

324

481



始





336

324-471

324-481



龜谷聖馨著

哲學より宗教へ

東京

弘道館發兌

大正  
4. 12. 7  
丙亥

Handwritten notes and markings on the back cover, including the characters '心' and '身'.



## 自序

哲學とは何ぞ、哲學者とは何ぞ。徒に僻論を拈弄する、是れ哲學か。頑強なる主張を敢てする、これ哲學者か。吾人は何れも然らずと答ふるに躊躇せざるなり。方今日進月歩の社會に立ちて、活潑々地の顯現を爲すを要するの秋に當り、世間と没交渉なる遊戯的僻論を弄し、或は過去の形而上學に囚はれて、強ひて頑冥なる主張を以て獨り快しとするの輩、これを哲學と名け、哲學者と稱し得べくんば、國家の前途亦甚だ憂ふべからずや。

宗教とは何ぞ、宗教家とは何ぞ。超然塵外に孤立して、經文を誦し、祈禱を爲し、愚夫愚婦をして愈々迷はしめ、益々苦しま



しむるもの、是れ宗教か。着るに錦繡、住むに殿堂、食ふに美味、而かも傳襲的陋習を墨守して、財寶色慾を念とす、これ宗教家か。否々大に然らずと謂ふべし。

予や固より學淺く才拙なりと雖も、窃に心を哲學及び宗教に傾くること多年。聊か這般の消息を察知し、夙に東洋の哲學及び宗教の宣揚を以て、世道人心の開發を爲すべき者と確信せり。因て先蹤を尋ね、新知を究め、學界先覺者の驥尾に付して、絶えず社會と人生との諸問題に接觸し、これが解決を得んと欲すること尙し。會々今秋 天皇即位の大典を擧げたまふの佳辰に遭遇し、欽抃至祝、又何ぞ堪へん。乃ち此嘉年を記念し奉らんが爲に、鉛槧を查取して、此の小著を公にするに至れり。此の書は素より予の哲學及び宗教に關する卑見の

全般にはあらず、他日更に研究の結果を以て江湖に問はんことを期す。幸に世の哲學及び宗教に興味を有せらるゝ各位、一閱以て著者の菲才を啓發するに吝かならざれば、本懷之に過ぎざるなり。今や印行成るを告ぐ、一言を卷首に題して、上梓の事由を明にすること爾り。

今上即位大典の日、麻溪三賢家の僑居に於て、籬邊の幽香を喜びつゝ、

龜谷 聖馨 謹識



例言三則

- 一 本書收むる所、哲學及び宗教に關する拙論卑説、其の大部を占むと雖も、編輯の次第、素より系統を立て、脈絡を追へるものにあらず、従つて説明の前後、解釋の重出を免ぬがれず、是れ讀者の寛諒を乞ふ所以の一なり。
- 二 著者が隨時隨處になしたる講演筆記等は、一二の加朱を試みたるの外、敢て甚しき修刪を爲さず、故に一時の放談に過ぎざるものあり、又陳腐なる冗話無しといふべからず、これ讀者の容認を得たき所以の二なり。
- 三 著者、近來公私多忙の爲め、悠悠筆硯に親むことを得ず、僅に小閑を偷みて、匆卒に校訂を了せり、故に篇中多少の誤脱無きを保し難しと雖も、幸に重版の機會あらば、必ず魯魚を正さんことを期す、これ讀者の啓蒙を希ふ所以の三なり。

校訂閣筆の日

著者 又 識

哲學より宗教へ

目次

- 一 宗教と哲學の權威……………一
- 二 佛教に於ける哲學的宇宙觀……………五
  - 理想的宗教と實行的宗教……………一三
  - 四 華嚴天台兩哲學の契合點……………一七
  - 五 釋迦文佛と華嚴聖典……………二四
  - 六 法身佛の觀念に就て……………三二
  - 七 佛陀の法身觀念と宇宙の實在合一……………四八
  - 八 陽明學と天台華嚴の二教理……………五四
  - 九 華天二教の比較評論……………七六
  - 一〇 實踐理性と陽明學……………八五



一一 學庸一貫論……………九二

一二 華嚴聖典の宗教的地位……………一〇五

一三 龍宮説の思索……………一〇九

一四 我國將來の宗教……………一一五

一五 大哲學は大詩歌なり又大宗教なり……………一二二

一六 正想的宇宙觀……………一二六

一七 根本佛教……………一三三

一八 吾が國體に對する美的觀念……………一九四

一九 人生に於ける信仰の價值……………二〇二

二〇 皇位の絶對と現實及理想の兩方面……………二二三

二一 人生最高の希望……………二三一

二二 哲學の權威と宗教の尊嚴……………二五一

二三 何の日か眞の文明を見ん……………二六一

二四 斯道は時處を超越す……………二六七

二五 眞理は永遠の勝利者たり……………二八七

二六 現今の社會……………二九七

二七 余の仰欽する古聖人の生活……………三〇九

二八 大哲ソークラテースを憶ふ……………三二二

二九 世界第一の聖人……………三三〇

三〇 法然上人とソークラテース……………三三四

三一 親鸞聖人を偲ぶ……………三三七

三二 大哲カントを憶ふ……………三四一

三三 佛教學者の使命……………三五〇

三四 フイヒテの誕生日に……………三五七

三五 學者の自重を望む……………三六一

三六 華嚴哲學と中庸……………三六六

三七 時局と今後の國民精神教育との關係……………三九〇

三八 予が宗教觀と社會政策……………四〇二





目次

三九	大我と小我を論ず	四〇五
四〇	普遍思想と宗教	四〇九
四一	宗教の尊嚴	四一八
四二	學界の恨事	四二二
四三	宗教的全人格を養成せよ	四二六
四四	地上一切の權力を超越すべし	四三二
四五	藝術と宗教	四三四
四六	巨魚の細鱗	四三七
四七	科學と詩	四四〇
四八	將來に於ける世界共通の眞宗教	四四三

哲學より宗教へ 目次終

哲學より宗教へ

龜谷 聖 馨 著



宗教と哲學の權威

近來我國では人の模範たるべき人々の行爲が却て社會より指彈を受け、又三界の大導師たるべき宗教家にして、實に忌はしき辱めを受くるが如き事實の公表さるゝは、洵に痛歎に堪へざる所であつて、最早世上一般の知れる例證を、今更こゝに言ふ必要はないが、然し常に宗教界及思想界に注意して居る吾人よりすれば、斯かる社會を産み、又現にかゝる社會を再出せんとしつゝある、宗教界思想界を顧みて大に痛心せねばならぬ、即ち今の我學界は、恰も婦女子が其の流行を競ふ如き態度で、以て思想の流行を趁ふて居る。由來宗教家や學者は自信に獨立して、此俗界が如何に變化するも、其の當初の目的と自信を一貫して、常に向上發展すべきである。

一、宗教と哲學の權威



然るに今日の思想界を見ると、時々刻々走馬燈の如くに變じ、其變化もよく秩序を追ふて變化するにあらざりて、單に一時の流行を趁ふと云ふ有様であるから、實に痛歎せねばならぬのである。例へば一時自然主義が盛なれば、吾も人も其の是非を判せずして、漫にこれに雷同し、又實用主義が隆なれば、其の根柢を極めずして、直にこれに隨喜するが如き、文藝家は勿論、宗教家哲學者も、單に淺薄なる流行に走るに従つて、少しも自信の一貫主義の徹底が無い。嘗て英のベーコンは、萬事は消え失せむ、されど科學は生長すべしと云つた豫言が半ば適中して、科學は漸次に進み遂に科學萬能主義で、以て世界の文明を支ふるに足ると信じて居つた。科學の闡明せる物質上の力は、精神力を退けて居つた。然るに今は其の反動で、科學を超越した、新理想主義が流行せんとしつゝある、これは當然進むべき方向で、精神的宗教的であり、奮闘主義であるから、大に現代の人心に投合してゐる。彼のベルグソンや、オイケンの説く所は、即ちこれであつて、今の思想界は殆ど二氏に風靡せられ、學者も評論家も、二氏でなければ夜が明けぬ様に思つて居る有様である。勿論今日の如く沈滞せる思想界にとりては、好箇の興奮劑で、又誠に喜ぶべき現象であるから、吾輩と

雖も、此等新思想の傳唱を賞賛し、又歡迎するのである。

然しよく考へて見ると、我が日本の宗教界や思想界には、確固不動の信念と定見がない、單に新しき流行を趁ふて、水面に浮ぶ浮草の態度と、何等選ぶ所がない、獨創に比して容易なる翻譯は、譯者自身の利益となり、社會の好奇心を歡迎するに重寶であるからとて、翻譯の流行、獨創にあらざる思想の傳播は、決して我國にとりて喜ばしき現象とは云はれない。迷信ならざる眞の宗教を有し、俗世に超越せる宗教を信ぜる吾等は、彼等の思想を傳唱するに先だちて、其の眞價を闡明し、且つ學者も東洋文明の眞髓を探究し發揮して、此等を彼等以上に權威あらしむるものとせねばならぬ。

曾て英國の或學者は、世に戦争のあるをも知らず、窓外に彈丸が飛亂するをも顧慮せざりしと云ふ。研學に忠實にして、眞理の外求むるものなき、斯る學者の存在こそ願はしい。又物質上の學問ではあつたが、それを鼓吹し擴張せん爲めに、芝の新錢座に寓居して、英獨の講學に餘念もなかつた故福澤翁も、上野の彰義隊が官軍と銃を交へて戦争して居たのも知らなかつたと傳へられて居る。然るに今の宗



教界や思想界は如何、當然超俗的位置を占めて、真理の權威を確立すべき任務を有するに係はらず、却てかの福澤翁の擧にも倣ふ能はざる有様である。

今日盛に傳唱さるゝオイケンや、ベルグソンの哲學の如きも、今更驚く程の根本的新味があるのではない。概念を斥けて直觀を貴ぶベルグソンの哲理は、既に我佛敎の一部即ち禪宗の喝破せる所であり、オイケンの精神的人生の哲理は、我が佛敎の根本精神である。勿論基督教國に生れたるオイケンの基督觀は、吾人佛敎の深理を専攻し、且つ公平なる宗教觀を有するものにとりては感心も出來ず、日本の宗教家や東洋の文明を咀嚼せる思想家は、充分彼等以上の學說を主張し得る位置と特權とを把持して居るのである。従つて彼等の說を確固不動にして、千古不磨の學說の如く傳ふる輩あらば、寧ろ嗤笑に堪へないのである。今年の秋には態々オイケン氏が來朝し、東西兩京大學等に其の講演を開くと云ふが、此の擧が機縁となり、我沈滯せる思想界に一種の清涼劑を加味すると云ふならば、兎に角單に流行の學說に隨喜渴仰すると云ふならば、輕擧であるのみならず、主客顛倒ではあるまいか。此際宗教家や思索家は、寧ろ己が信仰と自信に據つて、日本の文明及び其の

根本思想の傳布に努力し、而して宗教家として、或は思想家として、嚴然たる權威の確立に努力するの覺悟があらたい。

## 二、佛敎に於ける哲學的宇宙觀

印度は世界に於ける最も古い國であつて、夙に諸派の哲學宗教が盛に起り、蘭菊美を競ひ、金玉光を争つた。然るに、釋迦佛陀が不世出の大英才を以て、この間に出現し、諸派の哲學宗教を研究した上に、夫の如き哲學的宗教を道破した。誠に佛敎の教理の深玄幽妙なるは、現今と雖も、驚嘆さるゝ所である。今日世界には、澤山の宗教と諸派の哲學があるけれども、吾人の見を以てすれば、佛敎がその中で最も長じて居ると思ふ。そして佛敎の中でも大乘に屬する教理を研究すれば、深き程、深い味が出て來る。就中、吾々が専門に研究して居る華嚴の教理の如きは、宗教としても、又哲學としても、釋迦の説いた他の諸經典より長じて居ると思ふ。これは古



より佛教を研究する學者は、何れも是認する所で、決して一家の私言ではない。

佛教に於ける哲學的宇宙觀は、彼の西歐の哲學者が、唯心唯物の二原論を説く如く、空(唯心)有(唯物)二觀を説き、又觀念論と實在論との二大系統を説く如く、實相論と緣起論とを立論する。而してこの哲學的宗教としての佛教中にありて、最も秀出して居るのは華嚴の教理である。華嚴經は釋迦佛陀が、多年潛心研究の結果、大真理を發見し、これを高足の弟子等に最初に説いた大哲理である。所が餘りに高遠幽妙な爲めに、高足の弟子等も之を領解し得なかつた、乃で釋尊は更に四阿含、方等般若と云ふ順に、卑近の教理を説き、終りに法華、涅槃を説いた。されば釋尊が始めに高尚深遠な理を説いたのが華嚴で、終りに説いたのが法華である。真理には二つは無いといふが、今この華嚴、法華の兩聖典に就いて調査すると、その間に大なる差を認めるのである。

法華が支那に入つてから頓に興隆し、多く學者が輩出した、就中、之を系統的に大成したのは有名なる天台の智者大師である。又一方華嚴の方でも、多く碩學が出たが、これを大成したのは、天台の智者より凡そ百年後に出た法藏師、即ち賢首大

師である。今この二大學者を比較すると、兄たり難く、弟たり難く、殆ど伯仲の間にあるが、宗教として將た哲學としては、法華聖典より華嚴聖典の方が勝れて居るから、自然其の教相釋が、智者より賢首の方が一段上に在る。智者は一代の説法を四教に分ち、三觀論を説けば、賢首は一代の説法を五教に分ち、四法界觀を説いた。これを比較對照して見ると、教相學としては、いづれ劣らぬやうであるが、華嚴は釋尊大悟の第一聲であり、法華は涅槃に入る前に説いたもので、精妙ではあるが、華嚴に比すれば、其の宇宙觀は狭小であり、華嚴は廣大である、で俗世間に於ける宗教としては、華嚴より法華の方が勢力を有してゐるけれども、哲學としては華嚴は天台より卓越して居る。今この天台と華嚴とを比較論評するは、興味ある問題であるが、僅かの時間で盡されないので、故に單に華嚴の教理の優秀なる要點だけを述べる。

華嚴の哲理は、高尚深遠にして過去は勿論、恐らくは將來と雖も、この上に出るものは無からう。華嚴には法界緣起論を主張し、十重唯識をも説き、又哲學の奧妙を極めた十玄緣起、六相圓融を説き、又三聖圓融觀を説き、宇宙を人格的に見て、三身を説くかと思へば、十身を説き、この十身を開いて更に解境の十身と、行境の十身とを



合せて二十身を立て、或は宇宙觀として四法界を説くのみならず、華嚴聖典中の盧舍那品を觀ると、大法界(宇宙)を華藏世界として、哲學的に上下の二十層に分ちて細説し、而してこれを清涼の澄觀は、二百十億國土と説明した、その説明の高遠なる、實に驚嘆の外はない。由來華嚴の教理は、小常識的差別觀に局せず、倫理的とか國家的とかいふやうな方便的説明を加へない。そしてそこに純正なる倫理觀、國家的觀念が存在してゐる。これに比して天台の如きは、差別的に罪惡觀や修善惡觀を盛んに説く、華嚴は吾人の意識上に顯はれたる善惡を見ない、即ち天台の華嚴に及ばざる所である。又天台の哲理は、善も實相なれば惡も實相で、美も實相なれば醜も實相なりと云ひ、宇宙の平等實相を説明して居る、又罪惡を空うして涅槃の境地に達することを主張する。然るに華嚴の哲理はこれと異りて、最初から絶大無限の宇宙の全體を、善惡を超越した尊嚴高美なるものと直觀し、毫もその間に小差別的善惡美醜を置かない。

今日我國の哲學者間に唱へられて居る所の、唯心唯物の二原論を超越した、圓融實在論、即ち現象即實在論と、佛教に於ける圓融實在觀とを比較對照して見たいと

思ふ。先づ天台の三觀論と對照し、更に華嚴哲學の四法界を擧げて論じて見やう。



右の如く、天台の空觀は、哲學者の所謂唯心論で、又天台の假觀は、哲學者の所謂唯物論で、又天台の中觀は、哲學者の所謂現象即實在論に相當する。斯くの如く現今の直覺派の哲學者の所論は、天台哲學と同一であると思ふ。然るに華嚴の哲理に至りては、唯心論、唯物論、實相論、緣起論、現象即實在論も説くけれども、更にその上に周遍含容觀、即ち重々事々無礙觀、換言すれば、現象即現象論を唱へる、是れ華嚴哲學の東西の哲學宗教に秀出して、比類なき所以である。



二、佛教に於ける哲學的宇宙觀



華嚴の宇宙觀は、右の如くであるが、華嚴の初祖杜順師は、最初真空觀、理事無礙觀、周徧含容觀の三重を成立せしを、その後法藏師以下の大賢が、更に事法界を加へて四法界に開いて説明したのである。乃ち(一)事法界は天台の假觀に當り、又哲學者の所謂唯物論で、(二)理法界は天台の空觀に當り、又哲學者の所謂唯心論である。而して(三)理事無礙法界は、天台の中觀にして、哲學者の所謂圓融實在論、又は現象即實在論である。然るに華嚴の宇宙觀は、更に事々無礙法界、即ち前に云ふ如く、現象即現象論である。凡そ現象と云ひ實在と云ふも、皆詮じ詰むれば、吾々の一念に過ぎない、吾々は宇宙萬有を對望して、客觀主觀の二方面によりて認識なるものを生ずるのであるが、認識その者が實在することを覺らねばならぬ。されば現象の一例例せば吾々の個體が實在であり、此個體に、理も事も具有してゐるのである。今それ一微塵も宇宙の實在であり、又大海の水一滴を指に付すれば、その一滴の水中には、大海の水全體が存在してゐるのである。これを數學上から考察しても、一を離れて十も千も萬もない、一の中に億千萬の數が存在して居る、彼の哲學者の中に、唯心唯物の二原論を唱ふる者の、その所説に矛盾撞着を來すは、この二者を相對と

するを以てある。進歩したる哲學者に至りては、この二者を打つて一九となし、實在論に歸着するやうにした。乃ち天台學者の語る、三觀論に歸着するのである。天台の哲理は深遠高妙であつて、今後幾多の學者宗教家が出て來つても、天台哲學の空假中の三觀論以上の眞理は立てられないと思ふ。然るに獨り華嚴の哲理は、天台以上に秀出して居る。華嚴の大哲理は、この現象即實在論の上に、更に一步を進めたもので、現象の相互が圓融無礙と稱するのであつて、これが他の哲學宗教の上に秀出して居る所以である。此哲理は相入相即とも云ひ、又一多相即とも云ひ、乃ち一即多、多即一といつて、一には即ち千億萬の數が收まる、一を離れて多數はない、一には多數が包含されて居るが故に、實在とか唯心唯物を説くの餘地無く、現前一事物が實在を立證する。乃ち吾々人類が宇宙の本體で、吾々を離れて宇宙は存在しない。これを形容して華嚴哲學では、一微塵を破して、大千の經卷を出すとも云つて居る。華嚴哲學の十玄門中には、十世隔法異成門と云ふのがある。此の深遠なる哲理によれば、過現未の三世に九世十世を説き、この廣大無邊なる宇宙は幾億萬年の前から、又更に幾億萬年の後に至るも、總て吾々の一念の中に存在し、



而して吾人の一念は宇宙と共に決して滅するものでないのである。さうして見ると、吾々の一念の中に、過去幾億年も、未來の幾億年も、みな存在してゐるのである。かくの如く考察するときは、吾人を離れて宇宙なく、宇宙を離れて吾人なく、吾即宇宙、宇宙即吾であつて、客觀的に實在を假想するの要はない。

されば華嚴哲學では、婆羅門哲學や、近代の哲學者の如く、大我と小我とを相對的に立て、大我は絕對的眞にして、小我は相對的假であるから、差別的假我を脱して、常住不變なる大我に没入することを努力することを要すと説くが、華嚴の哲理はこの説を取らないで、相對的差別的に大我小我を立てずに、直ちに絕對我を立てる。宇宙即吾、吾即宇宙といふ大覺を得たものを、大悟界に入つたとするのである。私にはこれを哲學の粹を極めたるものとし、今後の思想界を支配すべきものであると信ずるのである。

### 三、理想的宗教と實行的宗教

凡そ哲學を攻究し、宗教を憧憬するの學者宗教家は、眼中唯眞理あるのみを知るべきである。然らば先づ果して我は何者であるかを自覺して後に、其の第一歩を踏み出さねばならぬ、即ち吾人は哲學者にして日本國民ではなく、又宗教家にして日本國民ではない、日本國民にして哲學者であり、宗教家であり、乃至教育家であり、軍人であり、實業家であり、大臣大將たるものである。此の自覺を得て然る後に、哲學宗教の研究に出でなければ、恐らくは大なる謬見に陥り、又甚しき妄想に傾かぬとも限らぬのである。故に吾人は此の見地より常に先づ國體の尊嚴を重んじ、施いて全世界宇宙に及ぼさねばならぬといふ持論である。

抑も思想界精神界には、國家思想と、普遍思想との二潮流があつて、一は國家を安固ならしめるために、國民の思想を發達せしめるものであつて、他は即ち人生の理智上に立ちて世界共通の根本思想をいふのである。而して吾人が現に研究しつつある印度に發した哲學宗教、即ち婆羅門哲學中の數論、勝論の二大系統は西洋に



於ける哲學宗教の源を爲したのであると窺かに推察する。即ち彼の慈恩の如きは其の著唯識述記に斯う云つてゐる。梵天の教は、西に往きて基督の教を開き。又虚空の説は、東に往きて伏羲の道を開けりと。即ち婆羅門の梵天の教は耶蘇教の造化神又は獨一眞神はこゝに胚胎し、又虚空説は儒教の所謂皇天又は上帝の源を爲したものであると思はれる。斯くの如く、古印度の哲學宗教は、早くより世界の哲學宗教の源を爲したものとすれば、其の上に更に百尺竿頭一步を進めた、大聖佛陀の道破された無上甚深の法門は、實に世界のオーソリチーとして、宇宙に冠絶せる大哲學的宗教であると同時に、又大宗教的哲學であるといふことがいへるのである。こゝは吾人が事新しく縷述するまでもなく、古來の學者が齊しく認容せる定説であつて、又千古没すべからざる事實であると思ふ。況んや此の世界的宗教にして、而かも世界的哲學たる佛教中の華嚴の眞理觀に至りては、至高最尊のものとして、亦過、現、未を通じての確論であると思ふ。其の他天台眞言乃至諸宗の教義宗乘に互りての、價值稱揚に就ては、勿論賑々を要せぬことである。

元來宗教には、理想的宗教と實行的宗教との二種ありて、今日世界に於ける大宗

教として認識せられつゝある、佛教及び基督教に就いて見るも、明かに二大差別を知得するのである。即ち如何に高尚深玄なる教理も、社會人類と沒交渉なる者は、終に理想的空論として顧みられず、却て社會人類のために、其の下層までも救済するを以て眞價ある宗教と爲す傾向である。然るに吾人の宗教觀念よりすれば、寧ろ其の謂ゆる理想的空論の如き、實は現實界を遙かに超越したるものを以て、宗教の價值と爲すに躊躇せぬのである。殊に華嚴の教理に在りては、殆ど俗社會とは沒交渉なるところから、或は其の宗教的存在を認められぬ程であるけれども、こゝは寧ろ其の多く哲學的宗教にして、俗界に遠ざかる所以の然らしむる爲である、とは云ふものゝ、華嚴の教理は俗世間と沒交渉の様に見ゆるも、其の實は密接に實行的に働らさつゝある。是に於てか吾人は社會の多數人が信仰の的たる、謂ゆる實行的宗教と對比して、多少辯を須ひたいと思ふ。即ち夫の賢首大師の如きは、教相學上佛陀一代の所説を五分し、華嚴を根本として説明した程であるが、之を要するに各宗各派の適從する眞理觀に依つて、各種各様である。然しながら、謂ゆる實行的と理想的とは、華嚴の教理と淨土教、殊に眞宗との如きものであつて、而かも其の



根本を一にして居るのである、一は即ち教理の上の働きを爲し、一は即ち實際に現成するの二路の差別はあるもの、自力聖道門と、他力淨土門とは、遂に差別即平等のものであつて、而かも且らく之を大小二路に分ち、善導大師の謂ゆる二河白道、即ち一は慕進悟入を本旨とする覺路と、下根の群衆も克く攝取さるべき願行が、遂に唯一真理の大原故郷に臻達し逢着するをいふのである。これとりもなほさず華嚴聖典に發し、華嚴聖典の真理觀に歸向すべく、夫の華嚴の真理觀を道破せりといふ、十地經の釋論たる十住毘婆沙論の如き、乃ち其の阿惟越致品及び易行品中には、此の運用を說破して深切を極めて居る、而して謂ゆる大路は、即ち五位の秩序を立て、精神上の峻峻たる難行道で、佛陀の如き大聖に非んば卒かに進行し難いものであるが、之に反して易行道は、内心に深く他力の信心を蓄ふる時、一遍の稱名を以て、忽ち蓮華臺上に千百億の釋迦と現ずることを得る、小路他力の法門は、能く下根下機の群衆にも入り易く行ひ得べきのである、是に由て之を觀れば、華嚴の真理觀の如きは、到底空論的理想ともいふべきに近く、念佛宗の真理觀は、即ち之に反して飽くまでも實行的である。而してこの大小二路は終に其歸を一にしてゐるので

ある。こは吾人の創見にあらざして、古聖賢の夙に屢々縷説した所である。而かも明惠上人の如きは、大方廣佛華嚴と南無阿彌陀佛と一つものとし、又普寂律師の如き、淨土教より出で、華嚴教を主張したが、矢張一同の信向を一貫した。

吾人が更に附言せんと欲する一事は、見真大師が肉食帶妻を創定したる卓見である。之を西洋に求むれば即ち僅にマルチンルートルを見るが、吾人は之を東西の二大卓見家といふに憚らぬのである。見真大師の創められた真宗は、實に華嚴の實行的方面を遺憾なく詮はしたものと云ふてよい。吾人は我が國將來の國民的宗教としては、須らく王法爲本を以て立宗の基礎とし、深甚廣大なる華嚴の實行的方面を履踐する淨土教の、益々振興し宣揚し、國民教化の標準とならんことを希望して已まぬ者である。

#### 四、華嚴天台兩哲學の契合點

華嚴聖典は、我が釋迦文佛最初の説法で、又法華聖典は釋迦文佛最後の説教たる



ことは言を俟たない所である。而して此の兩聖典は、其の深遠高妙なる哲學として、又最尊至上なる宗教の所依として、他の諸宗各派に秀出し、共に其の勝劣を競ふて相下らない、古來學者の其の間に輩出し、之が調和契合を企圖せしも、二家の徒は之を目して惡魔の如く思惟し、一も二もなく破斥し、遂に一人の公平に是等學者の深意を探窮する者はない。是れ我が苑花の美と香とを誇りて、而かも隣苑の花にも美と香とのあるを知らざると一様で、其の陋實に笑ふべきである。

斯く云ふもの、古より支那及び我國各宗の碩學が、其の教相の高尙深遠にして、而かも佛教の最高地位を占むるは、華嚴聖典なることは、萬口一致の公論たりしことは、言を俟たない。然し今一步を譲りて、假りに此の兩聖典の教理の酷似せる契合點を擧げ、之を比較評論するの、哲學上宗教上、また一の興味ある問題であると信ずる、故に茲に之を論じて學者の教を乞はんとする。

余は今二教の合一點を論ずるに先だち、戒環の『法華要解』を見るに、其の法華經を解釋するに、華嚴經を宗として説てゐる。今之を譯載して、余が所論を補はんとす。戒環曰く、經を解するに科あり、教を判するに宗あり、禾の科有て以て、其の苞本を容

る、が如く、水の宗ありて以て、其の支流を會するが如し。曾て謂らく、華嚴法華は蓋し一宗なり、何を以てか之を明すとならば、夫れ法王、運に應じて眞を出す、兆聖唯一事の爲にして、餘乗あること無し。是を以て首め華嚴を唱へ、特に頓法を明かす、根鈍を知ると雖も、且らく本懷に稱ふ。大を怖れて昏惑するに及んで、乃ち權りに方宜を設く、衆志貞純なるに至つて、則ち還て實法を示す。然らば則ち二經、一は始一は終實に相資發す。故に、華嚴を宗として科解するなり。或人謂く、華嚴は純ら實性を談じ、獨り大機に被る。法華は權を引て實に入り、三根齊しく被る。二經の旨趣、迥かに相及ばず。彼を引て此を釋す、殆んど宗を知らずと。

愚竊かに信解品を觀るに、其の父先よりこのかた、子を求むるに得ず、中ごろ一城に止る。其の家大に富めり、窮子遙に見て、恐怖して疾く走るといふは、正に初めに華嚴を説き給ふに喩る也。臨終に子に命じて、財物を委付す、窮子歡喜して、大寶藏を得るといふは、正に終りに法華を説き玉ふに喩る也。此に述して之を觀るに、始めは驚怖し、終りには親附する者異父なし。窮して棄る所、達して獲る所の異實なし、既に以て異なることなし、何んぞ之を宗とすべからざらんや。



又況んや二經、智を以て體を立て、行を以て徳を成し、光を放て瑞を現し、法界の眞機を全うし、因を融し、果を會して、修證の捷徑を開くをや、凡そ設くるところの法、意緒並び同じ、二經相宗とすることも、亦見るに足れり。聖人の説法は、始終一貫、果して唯一事にして、餘乗あることなしと、是れ實に華天二家の調和合一を唱道せる最勝者である。然りと雖も、華天二家の眞理觀は、必ずしも相同じとは容認すべからず。

抑、天台の教理は、諸法實相を以て其の根本義とし、華嚴の教理は法界緣起を以て又其の根本義とする。故に天台は宇宙萬有の平等實相を唱ふるも、華嚴は法界の森羅は一心の緣起なりと論じ、台家は教機の周徧を以て誇り、嚴家は法の深遠を以て高しとする。故に二者の宇宙に對する眞理觀は、自から異なるものあるを見る。然れども、今仔細に華天二家の眞理觀を探究し來れば、そが徹底の絶對界には、契合調和し、秋毫の相違あるを認めない。

乃ち試に二家教理の上に顯はれたる一二の類似點を摘録して、學者の參考に供したいと思ふ。

天台…實相論

佛最終所說 三論 攝末歸本  
法華經 向上修入門

華嚴…緣起論

佛最初所說 法相 從本垂末  
華嚴經 向下流水門

天台四教

藏教……………小教  
通教……………始教  
別教……………終教  
圓教……………頓教  
華嚴五教

天台…觀法

性具…理性…本體  
修起…事實…現象

華嚴…觀心

性起…理性…圓融  
緣起…事實…行布



天台：三觀論：假觀：十如是：十界互具  
 中觀

真空觀  
 華嚴：三重觀：理事無礙觀：十身：十互緣起  
 周徧含容觀

以上列記する所、或は二家其の旨を同うし、或は全く相反するものがあるけれども、台家所立の十如是と云ひ、或は十界互具と云ふもの、詮ずる所三觀に於ける中觀の説明に過ぎない。又嚴家所立の十身と云ひ、或は十互緣起と云ふもの、亦是れ三重觀(三重觀は後是れを四法界に開く)の中、周徧含容觀の説明に過ぎない。而して此二者(中道觀と周徧含容觀)を把て、仔細に攻究し、又打て一丸と作すに、秋毫も反する所がない、是れ二家哲學の相一致する所であると信ずる。

加之、法華經中の『如來壽量品』と華嚴經(新經)中の『如來壽量品』とは表面文字の上よ

り見れば、何の關係もない様である、けれども此の兩聖典中、其の互極を稽ふるに、互に相一致し、學者の考究に價するものがある。又彼の法華の普賢菩薩勸發品と、華嚴(新經)の普賢菩薩行品とを一瞥するに、其の歸着點が一つである、是れ亦學者の攻究を要する。乃ち普賢菩薩勸發品(法華經)に曰く、

世尊我今以神通力故、守護是經、於如來滅後、閻浮提內、廣令流布、使不斷絕……  
 爾時釋迦牟尼佛、讚言善哉善哉、普賢、汝能護助此經、令多所衆生安樂利益、汝已成、就不可思議功德、深慈從久、遠來發阿耨多羅三藐三菩提意、而能作是神通之願、守護是經、我當以神通力、守護能受持普賢菩薩名者、

と、而して又普賢菩薩行品(華嚴經)の偈に曰く、

如是未來世、有求於佛果、無量菩提心、決定如悉知、是三世中、所謂如來、一切悉能知、名住普賢行、微妙廣大智、深入如來境、入已不退轉、說名普賢慧、一切最勝尊、普入佛境界、修行不退轉、得無上菩提、

と、斯の如く法華聖典の壽量品には、阿耨多羅三藐三菩提心を發するを以て、究竟の目的とし、而して華嚴聖典の壽量品には、無上菩提を得るを、また究竟の目的とする。



阿耨多羅三藐三菩提と云ひ、又無上菩提と云ひ、共に無上正徧知の謂ひにして、佛教最高の理想としての歸着點である。是の如く觀來れば、華天二家の教理は、其の教相の上に於てこそ、互に相異なるも、徹頭徹尾二家絶對の眞理觀は、毫も相異なる所を見ない、然しながら、其の哲學としても、將た宗教としても、華嚴の教相が法華の教相より秀出せるは、勿論なれども、今は唯此の兩聖典の類似點をのみ略説し、博雅の士の教を乞はんと欲するのである。

### 五、釋迦文佛と華嚴聖典

釋尊に就ては、方今諸大家が種々なる感想を述べて居られるのを見て、少からず敬服して居るが、吾輩の立場から云へば、又聊か物足らぬ感じを禁ずるを得ない。といふのは、宗教界學術界の諸大家が、皆な釋尊を單に偉大な佛である事を論じたり、又耶蘇に比較して論じたり、各宗各派との關係に付いて説明せらるゝといふ風

で、どうも釋尊の眞面目を窺ふのに物足らぬ感じがする。何故かといへば、釋尊が、印度の王城に生れながら、富貴榮華を捨て、山林に入り、難行苦行をした後に正覺を得られ、八十歳にして涅槃に入られた、その化身の釋尊の眞面目と、又、久遠實成の法身としての哲學的佛陀の全面とを窺ふべきものは何であるかといへば、釋尊が、始成正覺の劈頭第一に、大悟界そのまゝを説かれた華嚴聖典に在る。然しその時は、其の高遠深遠なる教理を第一の高弟すら了解し得ず、宛ら啞聲の如くであつたので、乃ち釋尊は、これを阿含、方等、般若と、平易な方から諄々として説き起して、漸次に高くし、終に最初に述べられた華嚴の教理に接するやうに法華經を説かれた。してみれば、その第一に説かれた大眞理、それを根本とした釋尊を觀なければ、その本源を知ることが出来なからう。或る論者は、釋尊はその到底、大悟界の第一聲を誰れも了解し得なかつたので、漸次、低いものから、高いものに説かれた説法中の、高いものとして法華を取り、これが釋尊教理の神髓であるとする。さりながら、これは尋常一様の見解であつて、淺薄の説たるを免れない。

釋尊、大悟の第一聲は、これを哲學的に言へば、その中に含有する眞理は、釋尊以前



即ち阿僧祇劫の昔に既に存在して居たもので、たゞ始成正覺の時、釋尊の金口によつて道破せられたのに過ぎなかつた。それであるから、最も尊むべきは、此のはじめの教理であるべきことは言を俟たない。これによらなくては、釋尊の偉大を観ることは難かしからう。

兎に角、釋尊の大正覺の、そのまゝを取り得てゐるものは、華嚴聖典で、これは宗教としても、亦哲學としても、最高至上のものである。かく云ふと所謂我が佛尊しといふ諺に落ちるやうであるが、決してこれは我輩一家の私言で無く、古來佛教の各派を通じて、華嚴の教理を以て、至高無上とする、これは既に教界の輿論になつて居るのである。

彼の俱舍、成實、律、法相、三論、天台、真言諸家の如き、何れも高尚なる教理を説くけれども、これを華嚴聖典に比すれば、遠く及ばない。此等の教派は、印度から支那に渡り、印度よりは支那に於て益々隆盛を極めた。天台宗の如きは、支那に碩學の高僧が現れて、支那に於て大成し、蘭菊美を競ひ、金玉光を争ふた。實に天台の教相學は、隨分高遠ではあるが、華嚴の教理は、更にその上に秀出して、宗教として、將た哲學と

して、最高の地位を占めて居る。

天台も華嚴も、更に日本に来てから、一時隆盛を極めた。天台は今日でも猶ほ盛んである。そして密教、即ち真言の如きは、天台、華嚴の教相を應用して、系統的に組織したもので、密教本來には、殆んど教相學として絶無といつてもよい。然るに高く標榜して、華嚴天台の上に居り、佛教に於ては密教に優るものは無いとして居る。各自其の従ふ所を高しとするは、無理からぬことではあるが、公平に言へば間違つて居る。密教は印度から支那に入つて、その勢力は微弱であつた。弘法大師が支那に渡つた時には、佛教中の勝れたものは、既に傳教大師が大抵日本に持ち歸つて居たので、負けぬ氣の空海は、別に持ち歸るものが少ないので、密部を持ち歸り來つて、彼れ獨得の才智を以て、廣く真言を流布したのである。それであるから、大師の著述を観れば、華嚴と天台とをつき混せて、其の窮する所は顯教にわらず、秘密教なりと稱し、その才識によつて系統的に組織したことは明かである。これは密教の僧侶達が今日と雖も、その眞を吐露して居る所である。

この外、勢力のあるものに、禪宗がある。それから法華經を根本とする日蓮宗の



如きも華嚴から見れば至つて低い。彼の華嚴を大成した法藏の如きは、釋迦一代の説法を、小始終頓圓の五教に分けて、その極圓に華嚴經を置いて居る。これは無理ならぬことである。淨土教でも、法華でも、眞言でも、將た禪でも、律でも、皆華嚴の教理から出たのである。然るに其の根本法輪たる華嚴宗が宗教としての勢力は、他の末家に及ばない、これは何故か、茲が華嚴教の他に優れて居る所である。日本に於て華嚴宗の面影を存して居るのは、僅に奈良の東大寺に過ぎないといふのは、華嚴の教理が、高遠深大であることを證明して居るのである。華嚴は、最尊最美の宗教であつて、世に媚びないからである。

華嚴以外の各派は、營々として俗衆に向つて、現世利益といふことを説教する。密教に於てする、加持祈禱の如き、これをその派の人に云はすれば、相當の有難味を附けるやうであるが、華嚴の三密加持陀羅尼より出たもの(結局、世の俗衆をして、これを信ぜしめようとする態度である。天台でも、一方に高遠な理論をするかと思ふと、一方には種々迷信的な偶像などを擔ぎ廻つて、利益をいひふらす。不立文字などと構へ込んで居る禪宗でも、いろ／＼の佛像を擔ぎ出して、愚夫愚婦の御機嫌

を取つて居る。末法の世では、こんな風な俗世間的な題目や、念佛などで、極樂往生疑ひなしといふやうな、一文不知の俗衆に媚びる宗教は、深淺の度は兎も角も、多數の歸依者を得る。それに比較して、華嚴の哲理の如きは、釋尊の眞精神であるから、高遠深遠で、恰も下里巴人の卑曲の俗衆に於ける、陽春白雪の雅樂であるが、吾人は幾度も、調の高い詩歌には、これを和するものゝ寡しの嘆を漏らさざるを得ない。若し華嚴の教理の他の宗教に對比して秀出して居ることの例證を擧ぐることを需めらるゝ人あらば、毫も辭せざる所である。

世の學者は云ふ、元來宗教的眞理觀は、他の物的科學に於ける如く、専ら理知にのみよつて、これを討究して、その奧義を得ることは難い、宗教は意識を超越したもので、直覺によつてこれを體得することの出来るものである。主我的空想であると。論者の如く華嚴聖典に於ても、宗教としては、勿論、この直覺的觀念によつて、最高實在を會得すべきは云ふまでもないことである。併し又一方に純粹理智に訴へて、これを討究し證明して、至高無上の絶對界に沒同する教理である。

由來、華嚴に説く所の、彼の最高實在觀の説明、即ち周徧含容觀は、實に空論に過ぎ、



餘りに高遠過ぎるを以て、凡庸は直に人間社會に不必用なるものとする。これが却つて華嚴の宗教として、將た哲學として、他の哲學宗教に超出して居る所である。彼の周徧含容觀、即ち重々事々無礙の眞理觀は、他の哲學者の唱道せらるゝ、現象即實在論に一步を進めて現象即現象論である。華嚴の教理は、他の宗派の如く、主我的小常識上の見解に拘々たらず。又天台教の如く、人間界に於ける普通、小差別的罪惡觀を以て終始せず、直に玲瓏たる宇宙法界を觀る。而してこの超倫理的、はた超現實界の哲學的宗教にして、始めて倫理及び現實界の價値を知ることを得るのである。この大眞理觀によつて、釋尊の偉大を知るべきである。而してこの教理を學術的に研究すれば、教理の組織的系統が精妙である。乃ち一言すれば、法、報應の佛陀三身を十身に開き、宇宙を三重或は四法界に分立し、或は十玄緣起、或は六相圓融、十重唯識等、高妙なる哲學的教相を立て、天地法界を論じて居る。實に斯やうな調子で、誠にどの方面から見ても、優れたものである。

法華聖典の方では、四十餘年未顯眞實とか、或は法華は我が説きし經中の王であると經に説かれてあるとて、天台宗、日蓮宗の人達は誇るけれども、それは攝末歸本

で、華嚴の一部を晩年に道破する爲めの、價値的方便的説明である。華嚴聖典の大眞理は、斯かる差別的價値を云ふの用は入らない。これを例ふれば、華嚴は、大海の如く、他派はこれに注ぐ細流の如くであつて、華嚴の廣大無邊なるを嘆美するの辭が無い。又華嚴聖典は、龍樹論師が龍宮より將來したと云ふ。又以て其の深遠の教理たることを知るべきである。此の廣大無邊なる宇宙法界が華嚴の姿であり、宇宙法界が不生不滅、無始無終の法身の姿である。されば華嚴聖典によつて、釋尊を觀なければ、到底その全豹を知ることが不可能である。昔、東坡居士、盧山の美を歌うて曰く

横看成嶺側成峰。

遠近高低無一同。

不識盧山眞面目。

只緣身在此山中。

と洵に盧山の外にあつては、盧山の眞面目を見ることは出来ない。



## 六、法身佛の觀念

仰いで天象を觀れば、明月天に懸り、無數の星斗燦として花の如く輝き、又、眼を山川に轉ぜんか、峰巒重疊、濃淡相雜はり、溪流岸を嚙んで奔る、更に眸を平原に轉ぜんか、草花薫じ、樹葉囁き、萬鳥其の間に歡語を漏せり。何んぞ天地の美なる。心眼を啓いて此の宇宙を觀んか、如何に物質的科學者も、この宇宙の妙理に同化せられ、讚美の情を禁ずる能はざらん。宗教の存在する理由は、所詮此に在り。されば、人間の小なる理智によりて、又は小なる經驗によりて、宇宙の大本を是非するは、痴呆に類するものなり。

宗教は、吾人の經驗以上に位するものにして、何れの宗教と雖も吾人の意識を超越し、學理を超越し、世の推移に係らず存在するなり。佛教の偉大なるは、法身佛の觀念が、その根底たるを以てに外ならず。これを除けば、佛教は成立せざるは論を俟たざる所なり。

佛教の他の宗教の上に立ち得るは、此の法身の觀念に依る。若し佛教の祖師釋

迦文佛にして、單に印度一王國の太子として生れ、修業、解脫、一宗教を道破し、八十歳の壽を保ちて、遂に涅槃の雲に隠れたりと云ふ現身佛のみを以てせば、佛教は平凡にして、到底萬古に傳へ、思想界を永遠に支配するの價値を有せざるや明なり。その然らずして、佛教以外の哲學者、宗教家より讚美し、崇仰せらるゝ所以は、その常住不變、古今に通じて亡びざる、法身の觀念あるによればなり。

而して此の法身佛の觀念に付、哲學者、宗教家、説を立て、相争ふこと古來未だ絶えず。その間多くの學者は、釋尊在世中の佛教には、未だ此の觀念を有せず、唯、彼の人格を尊崇し、その所説の不滅的權威は、寧ろ後世に於て顯揚し、傳播せられたりと述べ、又或人は曰く、それは阿含部の中に多く含まれあり、阿含部以外には、之れを觀ること少しと。而して論者は、大般若波羅蜜多經及び華嚴聖典以外の經説を擧げて論述せるも、予はこゝにその一々を列舉論議するの違を有せず。一論者は法身の法と身とについて、大要左の如く論ぜり、曰く、

- (一) 法身は形容詞なりや、名詞なりや
- (二) 法身の法とは何を云ふか



(三) 法身の身とは何の意かと問ひ、而して

(一) については、法身といふ語は、其初めは、佛如來の具體的形容詞として用ゐられしが、後に、法性即ち實在、若しくは、本體を意味する抽象的名詞となりたるが如し

と述べ、

(二) については、印度の用語法に、二種の意味ありて、一は說法若しくは教法の法にして、他の一は諸法の法なり。佛陀の説教は、事物現象を明にしたるものなりとも見らるべきが故に、教法は即ち諸法なりとも謂ふを得べく、かゝる場合に、法は同一語に二個の意味を含有することゝなる。法身の法も、或場合には、教法を意味し、又他の場合には諸法を意味す。

(三) については、若し、法身を有財釋の形容詞となし、『法を身とするもの』法を體得したるもの』と解すれば、其法は、萬法の法にせよ、若しくは、教法の法にせよ、其身は猶ほ具體的の形貌を有せるを免れず、之れに反し、若し法身を本體的の名詞と

し、法性を意味するものとすれば、其法は萬法の法となり、その身は全く抽象的無形的となるなり。

と述べたり。是れ法と身と分説して、哲學的に論ぜざるなり。又法華經壽量品中にも、この法身佛の觀念を、佛陀自から道破せられあり。即ち

我成佛已來、復過於此、百千萬億那由它阿僧祇劫、自從是來、我常在此娑婆世界、説法教化、亦於餘處、百千萬億那由它阿僧祇國、導利衆生。

とあり。これ、佛陀自ら法身佛たることを道破せる證左なり。馬鳴論師の起信論にも、佛陀の三身を説き、即ち應身と報身と、法身との關係は、起信論を繕けるもの、既に知悉する所なるが、賢首大師は、之れを説明して、

佛具三身何故、乃云無有用相、釋云、若廢機感、如來唯是妙理本智、更無應化世諦生滅等相、但隨緣起用、用即無用、如波即水故、用恒寂也、涅槃經云、吾今此身、即是法身、と云へり。密教に於ても、種々に佛身を廣説せるが、住心品疏には、四種の法身を説く、一、自性法身、二、愛用法身、三、變化身、四、等流身とせり、此説明は今違あらざれば略せり。又彼の龍樹論師も、大智度論に於て、佛身に二種ありとして、



佛身有二種。一者眞身(即法身)二者化身。衆生見佛身無頼不滿。佛眞身者遍應虛空。光明遍照十方。說法音聲亦遍十方。無量恒河沙等世界。滿中大衆皆共聽法。說法不息。一時之頃各隨所聞而得解悟。……復次釋迦牟尼佛。王宮受身。現受人法。有寒熱飢渴睡眠。受諸誹謗老病死等。內心智惠神德。眞佛正覺。無有異也。

見眞大師も亦た二種の法身と彌陀釋迦二佛の合一を述べて曰く、涅槃をば滅度といふ。無爲といふ。安樂といふ。常樂といふ。實相といふ。法身といふ。法性といふ。眞如といふ。一如といふ。佛性といふ。佛性すなはち如來なり。この如來。微塵世界に。みちくしてまします。すなはち一切群生を海の心に。みちたまへるなり。草木國土。ことごとく皆成佛すとけり。この一切有情の心に。方便法身の誓願を信樂するが故に。この信心すなはち。佛性なり。この佛性すつはち法性なり。法性すなはち法身なり。しかれば佛について。二種の法身まします。ひとつには法性法身とまうす。ふたつには方便法身とまうす。法性法身とまうすは。いろもなし。形もまします。しかれば。心も及ばず。ことばもたえたり。この一如より。かたちをあ

らはして方便法身とまうす。その御すがたに法藏比丘となのりたまひて。不可思議の四十八の大誓願をおこしあそばしたまふなり。と述べられ猶同大師の淨土和讃中にも

- 彌陀成佛のノカタハ  
イマニ十劫ヲヘタマヘリ
- 法身ノ光輪キハモナク  
世ノ盲冥ヲテラスナリ
- 無明ノ大夜ヲアハレミテ  
法身ノ光輪キハモナク
- 无碍光佛トシメシテ  
安養界ニ影現スル
- 久遠實成阿彌陀佛  
五濁ノ凡愚ヲアハレミテ
- 釋迦牟尼佛トシメシテ  
迦那城ニハ應現スル

と仰嘆讚美せられぬ。又賢首大師の華嚴雜書門を見るに其の法身章に左の如く論ぜり、

法身義四門分別。初釋名者。法是軌持義。身是依止義。則法爲身。亦名自性身。二體性者。略有十種。一依佛地論。唯以所照眞如清淨法界爲性。餘四智等。並屬報化。二或唯約智如無性攝論。以無垢無罣礙智爲法身故。……此據攝境從心。名爲法身。匪



爲法身是非理。一切諸法。尙卽真如。況此真智而不如耶。既卽是。如何待攝境。三亦智亦境。如梁攝論云。唯如如及。如智獨存。名爲法身。四境智雙泯。經云。如來法身。非心非境。五此上四句合。爲一無礙法身。隨說皆得。六此上惣別五句。相融形奪。泯玆五說。迥然無寄。以爲法身。此上單就境智辨。七通攝五分及悲願等法。行功德。無不皆是此法身收。以修生功德。必證理故。融攝無礙。如前智說。八通收報化色想功德。無不皆是此法身收。故攝論中。三十二相等。皆入法身。攝有三義。一相卽如故。歸理法身。二智所現故。屬智法身。三當相並是功德法故。名爲法身。九通攝一切三世間故。衆生及器無非佛故。一大法身。具十佛故。三身等並在此中。智正覺攝故。十惣前九爲一惣句。是謂如來無礙自在法身之義。三出因者有四。一者了因。照現本有真如法故。二者生因。生成修起勝功德故。三者生了無礙因。生了相卽。二果不殊故。四者惣此勝德。爲所依因。卽機現用爲所成果。四業用者。亦有四。一此理法身。與諸觀智。爲所開覺。經云。法身說法。授與義故。二依此以起報化利生勝業用故。三或作樹等。密攝化故。四遍諸塵道毛端等處。重重自在無礙業用也。

余は毎に此の章を閲すること、法藏師が哲學的考察の精微にして、又宗教的信仰の深厚なるを想ひ、その理想の高遠なるに敬服し、轉た歎美の聲を發するを禁ずる能はざるなり。而して法藏師は、更に又義海百門に於て、法身の觀念を五つに開き、その效用を詳述せり、今其の要節を摘録せん、曰く

明五分法身者、謂塵空無所有、卽無非可防、是戒身、以塵無相、心自不緣、是定身、了塵空寂、是慧身、由塵空無則不緣於有、不住於相、是解脫身、由了塵體、更無異解、是解脫知見身、身以依止爲義、謂智依法、顯而得成立、故爲法身也。

と、實に又其の哲學的考察の精微なるを見る。尙師は、入楞伽心玄義に於ても、亦同じく法身の觀念を詳論し、益々精到を極むるも、こゝに詳説するに違わらず。

想ふに古來多くの碩學が、此の法身の觀念に就ては、横説縦論、或は主觀的に、或は客觀的に説明を試みしも、余は未だ曾て法藏師の如く、その廣大にして、而かも精微を極めしものを見ず、是れ畢竟華嚴聖典に顯はれたる、博大なる法身佛の觀念を、哲學的に廣説推究せるを以てなりと信ず。彼の毗曇三論、法相成實等諸宗教に於ても、何れも皆競ふて佛陀觀を立論し、特に又彼の教相の高きを以て誇る所の天台宗



の如き、更に又華天二家の教理を採用しながら、却て自ら高く標榜し、以て自家の教理の深玄なるを誇張する眞言宗の如き、いづれも皆遠く華嚴聖典に於ける佛身觀に及ばざるなり。

此は古來より各宗碩學の俱に許すところの輿論にして、固より余一家の私言にあらず。猶又法藏師が探玄記中に於ける法身觀に就て、少しく辯せんことを欲すれども、今は追無ければ、他日別に論述せむ。去りながら、今一つ同師が五教章に論述せる十佛の開合(解境と行境とは、華嚴に立つるところの、五教の佛陀觀を、秩序的に最も簡明に道破せるものなるを以て、勢これを擧げざるべからず。乃ち之を左に掲ぐ、

第十佛身開合者、有二、先義後數、義中先約法身、或唯眞境爲法身、如佛地論五種法攝本覺地、清淨法界攝法身、四智攝餘身、此約始教說、或唯妙智爲法身、以本覺智故、修智同本故、如攝論無垢無礙智爲法身、金光明經中、四智攝三身、以鏡智攝法身故、或境智合爲法身、以境智相如故、如梁攝論云、唯如々及如々智、獨存名爲法身、此上二句約終教說、或境智俱泯爲法身、如經如來法身非心非境、此約頓教說、或合具前

四、以備德故、或俱絕前五、以圓融無礙故、此二句如性起品說、此約一乘辨、次別約釋迦身明者、此釋迦佛身、或是化非法報、如始教說、或是報非法化、如同教一乘及小乘說、但深淺爲異也、或是法非報化、如頓教說、或亦法亦報化、總如三乘說、或非法非報化、如別教一乘是十佛故也、數開合者、或立一佛、謂一實性佛也、此約頓教、或立二佛、此有二種、一生身化身、此約小乘說、二生身法身、謂他受用與化身、合名生身、自受用與法身、合名法身、如佛地論說、此約始教說、三自性法身、應化法身、如本業經說、此約終教說、或立三身佛、如常說、此通始終二教說、或立四佛、此有二種、一於三身中受用身內、分自他二身故、有四、如佛地論說、此約始教、二於三身外、別立自性身、爲明法身、是恒沙功德法故、是故梁攝論云、自性身與法身作依止故、三亦於報身內、福智分二、故有四、如楞伽經云、一應化佛、二功德佛、三智慧佛、四如々佛、此約終教說、或立十佛、以顯無盡、如離世間品說、此約一乘圓教說、

と、此は説明を埃たずして、華嚴一乘圓教の佛身觀が、他の四教の佛身觀に秀出せるを知るべきなり。以上は華嚴聖典に於ける法身觀を、諸師の推究演繹せるものなれど、余は信ず、由來華嚴聖典は、其の全體にわたりと、華麗にして而かも崇高なる法



身佛嘆美の文字にあらざるなしと、乃ち一例を挙げんか、聖典中に  
智入三世悉皆平等……其身充滿一切世間……其音普順十方國土  
と讚美し、或は又

如來廣大徧法界、於諸衆生悉平等、普應群情闡沙門、令入難思清淨法……佛身  
普現於十方、無着無礙不可取、種々色像世咸見……如來法身不思議、如影分形  
等法界處處闡明一切法、寂靜光天解脫門

の如き、崇高美妙なる法身佛の讚詞にあらざるはなし、又、澄觀の演義鈔には、佛身を  
仰讚して

法身普徧、世所同依、故智身證理、如理徧故、色身無礙、亦同理徧……法身普徧、  
……於中有二、先隨相各別徧後、圓融總攝徧今、初明法身本體周徧、智身修成如體  
而徧、色即之用徧、法身如虛空徧、智身如日光徧、色身如日影徧

と云ひ、又、法報、化の三身に就て、同じく左の如く云へり、

經云、佛以法爲身、清淨如虛空、所現衆色形、令入此法中、又云、如來真身本無二、應物  
隨機徧十方……諸經論說三身壽量、化則有始有終、長短萬品、報則有始無終、一

得永常、法身無始無終、凝然不變、故法華中、以伽耶生雙林滅化身也、我本行菩薩道  
時、所成壽命報身也、常住不滅法身也、此經宗意、三身既融、三壽無碍、即長能短、即  
短恒長、無長無短、短長存焉、一一圓融、言思斯絕、

と、實に廣大精微を極めたりと謂ふ可し。猶華嚴聖典中の法身觀を考察し來れば、  
實に哲學の奧妙を極めたるを見る。即ち知る、古來今、佛教の哲學として、將た宗教  
として、萬古に亘りて不滅なる所以のものは、斯かる深遠の教理を有するが故なる  
を。然るに、今日、尋常の宗教學者なるものは、單に、阿含部諸經や、其の他に現れたる  
ものによりて、法身佛の觀念を云爲し、又根本佛教の説明を試みんとし、毫も佛最初  
の大悟界の説法たる華嚴中の真理觀を顧みざるは、甚だ了解に苦しきを得ず。  
尙、こゝに一言したきは、或る宗教學者は、法身佛の觀念は、佛陀の滅後其の諸弟子  
等が、佛陀の人格に代ゆべき歸依の對象として、神話的に佛身の不滅を信ぜんとし、  
真理の本體を佛陀の形而上的實體とするに至り、この真理の本體たる法は、即ち佛  
陀成道の根底、佛陀が體現して、吾等に宣示し、又同一道によりて、吾等に體得せしめ  
んとせし、真理智慧にして、諸佛成道の大本も、この法にあり、乃ち諸佛の智慧菩提と



云ふも、またこの法に在りて、佛陀が自ら絶対の眞理を得たりと自覺し、弟子等も亦佛陀の人格的感化によりて、佛陀を教主と仰ぎ、如來の信じたるなれば、所謂法なるものは、たゞ口舌の說法、又は文字の教法に止まらずして、佛智の本源、衆生成道の本、又超世不滅の實在ならざるべからずと云へり。この見方は、單に法身佛の觀念としては、略、吾人と違はざれども、その法身の觀念は、佛陀の滅後、諸弟子等の歸依の對象として、抽象的要求より生じたる如く論ずるは、吾人の大に非とする所なり。由來この觀念は、佛陀の滅後に生じたるにあらざるは、教理より、古來學者の唱導する所にして、彼の釋迦文物が、始成正覺を現身佛の始成正覺にあらざして、久遠實成の法身物にして、佛陀自らそを夙に道破せられたり。即ち演義鈔を見るに、この消息を説明して曰く、

譬如虛空、遍至一切色非色處、非至非不至、何以故、虛空無身故、如來亦爾、遍一切法、遍一切衆生、遍一切國土、非至非不至、何以故、如來無身故、爲衆生故、示現其身、約法身、自覺聖智、無成無不成……經云、譬、如世界有成壞、而其虛空不增減、一切諸佛成菩提、成與不成無差別、既無有成、何有不成……

以十佛法界之身雲、徧因陀羅網無盡之時處、念々初初爲物而現、具足主伴、攝三世間、此初即攝無量劫之初、無際之初、一成一切成、無成無不成、一覺一切覺、無覺無不覺、言窮慮寂、不壞假名故、云始成正覺……

一成一切成者、事々無碍故、故出現品云、如來成正覺時、於其身中、普見一切衆生成正覺故、如來成、即衆生成矣、況佛佛平等、一切成佛……

是れ、法身物の思想が、佛陀の滅後、遺弟等が、其人格に代はるべき歸依の對象として、抽象的形而上の要求によりて、成立せられしにあらざるの證左とすべし。

猶華嚴聖典の歸結を大成せる、法華聖典の從地涌出品に於ける、彌勒大士と佛陀の問答、即ち二十五歳の父と、百歳の子の譬喩、更に又同聖典、如來壽量品中の、彌勒大士が、大衆を代表して佛陀の說法を請ひたるを見ても、法身佛の觀念は、既に佛陀の說法たるを疑ふべからず。即ち

爾時、世尊、知諸菩薩三請不止、而告之言、汝等諦聽、如來秘密神通之力、一切世間天人及阿修羅、皆謂今釋迦牟尼佛、出釋氏宮、去伽耶城不遠、坐於道場、得阿耨多羅三藐三菩提、然善男子、我實成佛已來、無量無邊百千萬億那由它劫、譬如五百千萬億



那由它阿僧祇三千大千世界假使有人抹爲微塵過於東方五百千萬億那由它阿僧祇國乃下一塵如是東行盡是微塵諸善男子於意云何是諸世界可得思惟校計知其數不彌勒菩薩等俱白佛言世尊是諸世界無量無邊非等數所知亦非心力所及一切聲聞辟支佛以無漏智不能思惟知其限數我等住阿惟越致地於是事中亦所不達世尊如是諸世界無量無邊爾時佛告大菩薩衆諸善男子今當分明宣語汝等是諸世界若著微塵及不著者盡以爲塵一塵一切我成佛已來復過於此百千萬億那由它阿僧祇劫自從是來我常在此娑婆世界說法教化亦於餘處百千萬億那由它阿僧祇國導利衆生……

と以てその法身の觀念の根底を想察すべし。

然るに彼の四阿含等に現はれたるものに據り佛身觀を説き或は此觀念は佛陀滅後の遺弟等の佛陀仰讚の理想の如く佛教の眞價こゝに在りと論ずるを見る毎に單に流行的に覺理を研究せんとするものゝ深く透入することなきを哀まざるば非ず。

既に前にも述べし如く現身佛は印度國王の太子と生れ八十歳にして涅槃に入

り給ひしもその法身としては永劫不變宇宙と混一したまひしなり。否無始以來宇宙その物が法身佛にてあるなり。然れども此の法身佛は獨り釋尊のみに止まるかと云ふに是れ決して然らず即ち吾人凡夫と雖も亦た修道によりて此の大悟界に没入するを得べし。これ彼の他の宗教の如く獨一眞神を立て例之これに救はれて天國に生るゝも單に神の子として永久に獨一神に服従すると云ふ如きと其の差雲泥の如くなる所以とす。又世間の哲學者が多く大我と小我とを立て二者別物の如くに見小我の進んで大我に入ると論ずるは是亦大なる謬見にして華嚴學上より見れば小我大我の差別は始めより存せず心佛及衆生是三無差別にして帝網玲瓏の一大法界あるのみ假に大悟に至らざる前を小我と呼ぶに過ぎず。又今日の科學より云ふとも吾人は皆宇宙の一部なれば大悟界に入れば皆大我たるなり。嗟佛教の精髓たる法身佛はこれを詩的に觀するも或は之を哲學的に論ずるも或は又科學的に考察するも宏大無比今後萬世に亘りて滅せざるのみかは益々光輝を放つを信ず。予輩たゞ此の法身觀を嘆美して止まざるのみ。

因記猶報身佛の本體が久遠實成の阿彌陀佛たる事及び其の阿彌陀佛は常住法



身の本體た事に就ても、論述せんと欲するも、今は違わらず、他日更に論ずべし。

### 七、佛陀の法身觀念と宇宙の實在合一

凡そ世界に於ける多くの宗教は、其の教理の如何に哲學的眞理を含んで居るものと雖も、宗教と稱する以上は、純然たる哲學と違ひ、必ず神格的若しくは人格的本尊を立て、居る。

耶蘇教の如きは、ゴッド即ち最高絶對者たる獨一眞神を立て、宇宙の森羅萬象が皆此神に造られたものと見る。婆羅門教の如きも、この世界は梵天の創造と云ひ、佛教の上に於ても同様で、淨土教の如き、阿彌陀如來を本尊とし、眞言宗では、大日如來を本尊と立てるが如く、猶太教、希臘教、羅馬教、其の他凡そ既成宗教の中殆んど本尊を立てぬ宗派は一つも無い。而して其の中には、隨分神怪なる非眞理的の者も多くあるけれども、其の本尊を立てる理由を研究して見れば、其の間に高遠なる哲

理を包含してゐる。然るに世にはこの本尊を立てる深遠の理を窮めずして、都てを非眞理的迷信のものと斷定する學者もあるが、それは畢竟宗教的眞理に指を染ぬからであると私は推察する。つまり大哲理を含む宗教でも、其の人格的本尊を立てる理由は、吾々は由來人類なるが故に、其の人類の意識に相當する神格若しくは人格的本尊を假に立てたものである。耶蘇は人間と神とを合一せしむる爲めに、その中間に立つて自ら神の子と呼びて、人間を導いたものである。佛教に於ても亦同じやうに、釋迦佛陀が宇宙の實在即ち法身佛と、吾々人間との中間に立ち、凡夫を佛に導かうとしたものである。尤も佛陀は自ら遂に法身佛として宇宙の主體となつたが故に、阿彌陀にせよ、大日にせよ、若しくは毘盧遮那にせよ、各自、其の宗派で立つる本尊ではあるけれど、何れも皆宇宙の絶對實在を人格的に表示したるに過ぎない。釋迦佛陀が印度の一王國の太子に生れ、八十歳にして入寂したといはれるけれども、其の八十歳で涅槃の雲に隠れた釋迦は、化身即ち肉身の釋迦であつて、龍樹論師の所謂眞身の釋迦、法身としての釋迦佛陀は、壽命無量、不生不滅で、宇宙と一なりと立てゝゐる。佛教では佛陀を、尊嚴高美なる法身佛として解釋して



居る。彼の馬鳴論師の如き、佛の絶対法身を立つると同時に、其のはたらきを應身と報身とに開いて、遂に三身を立て、居る。前に云ふ如く、龍樹は別に眞身と化身との二身を立て、化身をば八十歳にして涅槃をとつた釋迦佛とし、眞神を絶対無限なる不生不滅のものとして居る。乃ち龍樹は大智度論に、次の如く説いて居る。

佛身有二種、一者眞身、二者化身。衆生見佛眞身、無頼不滿、佛眞身者、遍應虛空、光明遍照十方。說法音聲、亦遍十方、無量恒河沙等世界、滿中大衆、皆共聽法、說法不息。一時之頃、各隨所聞、而得解悟……復次、釋迦牟尼佛、王宮受身、現受人法、有寒熱飢渴睡眠、受諸誹謗、老病死等、內心智惠神德、眞佛正覺、無有異也……

斯の如く佛の個體換言せば佛の肉身は生滅したけれども、其の眞身は壽命無量、無始無終、不生不滅であつて、阿僧祇劫の昔より永久に說法して居ると云ふので、佛の眞身は、始より宇宙と合一し、最早佛の個體はなくなつたのである。乃ち華嚴聖典の中には、十佛即ち融三世と稱し、解境の十身と佛身上の行境の十身とを立て、宇宙を説明してゐる。

其の十佛十身の哲學的解釋は、繁雜なれば省きますが、兎に角同聖典中に説く

所の佛身は、普遍的萬有的で、吾々の意識を超越した、絶対無限の實在である。乃ち同聖典中に佛の法身を讚美して、

智入三世悉皆平等……其身充滿一切世間。

と云つて居る。而してそれに對して清凉の澄觀の疏に、

法身普徧、世所同依、故智身證理、如理徧故、色身無礙、亦同理徧……法身普徧、下

第二別釋、於中有二、先隨相各別徧後、圓融總攝徧今、初明法身本體周徧、智身修成

如體而徧、色即體之用、徧法身如虛空徧、智身如日光徧、色身如日影徧。

と説き、又同聖典中に、法身を仰讚し、歌うて曰く、

如來廣大徧法界、於諸衆生悉平等、普應群情闡沙門、令入難思清淨法……佛身

普現於十方、無著無礙不可取、種種色像世咸見……如來法身不思議、如影分形

等法界、處處闡明一切法、寂靜光天解脫門……

と是れ佛の神格を崇拜して、絶対無上の法身佛として宇宙の體と合一せしめたのである。斯くの如く、既に法身と法界即ち宇宙と合一すれば、宇宙即法身、法身即宇宙である。是れ華嚴聖典に於ける佛の觀の極致に達したる所である。



又彼の普通佛敎に説く所の無我論、又は無天論は、畢竟有我論或は有天論などに對し、それを打消す爲めに立てたのである、故に

婆羅門敎——有天論……有我論

佛敎——無天論……無我論

右の如く佛敎に説く所の無我論、又は無天論は、有我論、又は有天論に對立したので、つまり相對的である。然るに華嚴聖典に立つる所は、相對的有無を超越した眞我若しくは絶對我である。これは前にも述べたのであるが、今一度繰り返すこととする。乃ち一部の直覺派の哲學者は大我と小我とを立て、大我は絶對的で、小我は個性で相對的であるといふやうに立て、居られるけれど、哲學上、未だ至らざるものではあるまいかと私は思ふ。大我は小我に對するもので、相對的であつて、大に對する小であるから、大小の間に懸隔がある、故に華嚴聖典に説く所の如く、無限絶對なる眞我換言せば絶對我でなくてはならないと思ふ。

佛陀の法身が言語に顯はすことの出来ない、宇宙の實在に同化したのであれば、その神格が宇宙と合一して無くならなければならない。佛陀其の人が宇宙の實

在と同化せる以上、否釋迦の法身が宇宙の實在であれば、吾々も亦此極致に至らねばならぬ、これ華嚴聖典の主張する眞理觀である。この極致に至れる佛身を同聖典中に讚美して斯く歌つて居る。

如來甚深智	普入於法界	能隨三世轉	與世爲明導	諸佛同法身
無依無差別	隨諸衆生意	令見佛色形	具足一切智	徧知一切法
一切國土中	一切無不現	佛身及光明	色相不思議	衆生信樂者
隨應悉令見	於一佛身上	化爲無量佛	佛身常顯現	法界悉充滿
恆演廣大音	普震十方國	如來普現身	徧入於世間	………

かくの如く、佛の法身に天地萬物をあてはめ、森羅萬象悉皆佛身ならざるは無しとしてゐる。乃ち秋の夜の明月、春の晨の美花、或は鳥の妙音を發するも魚の水中に躍るも、山の聳ゆるも、水の流るゝも、皆佛身に非ざるはなく、遍一切處の法身に歸着すと立論してゐる。斯くして華嚴の敎理が、哲學としても、將た宗教としても、他に秀出して居るのである。華嚴の敎理にはこの他、十身十佛の外に、五佛をも立て、佛陀が初めて正覺を成じた時は、肉身の釋迦であるが、前に云ふ如く、法身佛として



は、不生不滅のものとし、畢竟吾々の意識以上に超越して居る所の言語に表現の出來ない、換言すれば、宇宙の眞理と融和した、絶對無限の實在してゐる。

### 八、陽明學と天台、華嚴の二教理

方今學術の進歩著しく、古來諸聖賢が眞理として説きし所のものも、間々非眞理となりしもの多く、今後も猶人智の進むに従ひ宇宙の萬有に對して、如何なる邊迄説明せらるゝかは豫知することが出來無い。かゝる次第であれば、今より教育、宗教、哲學、倫理等の諸科を研究するに於ては、之れが大深林となり、これが大淵源となるべきものを選んで、之れに據つて研究の材料とせんければならぬ。過日帝國大學の哲學會の演說會に於て、三宅雪嶺君が、哲科大學の必要と題して述べられた内にも、外國の大學には、宗教を司る所の、教科大學と云ふものがあつて、全大學中の首位を占めて、一國文教の中心となつて居る、吾國も國體維持の必要上、之れを缺くこ

とは、出來ない、されど單に之れを缺くのみにて、別に之れに更ふべきものを置かないが、必ずや隠々たる深林の如き、文教の大淵源を置かなければならぬ、眞を眞として、以て爲すべきを爲す所の倫理及び教育は、必ずこの所より出で來ねばならぬ……で、哲科大學を設置することを必要とするやうに述べられて居るが、これは吾々の最も同意する所である。前にも云ふ如く、茲に我日本の文教の中心となるべきものを選ぶとしたならば、どうしても豊富なる材料を有する所のものでなければならぬ、若し然りとすれば、これを佛教の大教理に求めなければならぬ、かく申すと儒教を奉ずる人や、其の他西洋の哲學を研究する人々は、反對せらるゝであらうかとも思ふが、公平の眼を以てしたならば、佛教が一番材料が豊富であるかと思ふ、他の耶蘇教にせよ、儒教にせよ、如何にしても範圍が狹隘であるから、先づ佛教を取らねばならぬ、佛教は高尚深遠なる哲理を有し、其の内には隨分教育及び倫理の材料も澤山有る、之れを中心として儒教を始め、其の他東西の哲學を加へて、共に研究したならば、大なる利益を得ることゝ考へる。

斯くは云ふものゝ、佛教は廣大無邊なる教理では有るが、其の内に神怪不可思議



で、所謂神秘的のもの、迷信的のものも數多くある、故に之れ等は宜しく精細に調査して、その玲瓏玉の如きもののみを選び取り、石の如きものは捨てなければならぬ。余は常に斯う思ふ、佛教の教理中、華嚴に屬するものは非常に高尚なる哲理を有して居て、此の中には高遠なる宗教的の教理を具へて居ると同時に、又非常に哲學的の深理をも含有して居るのみならず、將來他の科學の進むに従ひ、宇宙萬有の解釋に付いて著しく研究の度が進むであらうが、それに應じて行く道理をも具有して居る。故に今後宗教としても、亦哲學としても、之れを大いに發揮せしめなければならぬと。今日まで此の華嚴聖典が殆んど世人の知らざるが如く、衰微してゐると云ふのは、其の教理が餘りに高尚深遠で、淺學者の窺知する事の出來ないからであるのと、又一方には他の宗教の如く、祈禱などを一切せず、又この教理によつて福を得よとか、病を治せよとか云ふ、迷信的に人を呼ばないからである。即ち形式の上には於ては、かくの如く衰頹して居るが、その精神は宗教として、又哲理として、大なる價值があるのである、恰も之れを音樂に譬へなば、調の高い音樂は人に悦ばれず、卑近なるものは大いに悦ばれる如きものであらうと思ふ。

これに次いでまた非常に高尚の理を説くのは、彼の天台教である。天台の教相學といふものは西洋の哲學に耻ぢないといふ程の深理を含んで居るが、天台宗には迷信的に人を勧誘する傾向があるので、大に俗受けもよい様である、兎に角此の二教を余の常に稱揚するのは、たゞ余一家の言ではない、古今の宗教家及び苟も斯道に指を染めたもの、殆んど輿論の如く稱揚する所である。

而して今陽明學といふものは、如何なる地位を占めて居るかと云ふに、儒教——孔子の教を敷衍したものであるが、孔子の教も今日では、倫理、教育と云ふ側であつて、其の他に宗教といふ意味は含んで居ないが、これは學者が佛教を厭つた爲めに孔子の教を極めて狹隘に考へたによつて、あつてもとゞ孔子は形而下の教のみでなく、形而上の深遠なる理も説かれたものである、それは易とか中庸とかを蕪味する時は、思半ばに過ぎるのであらう。彼の宋儒は喜んで性理の學を唱へ、孔子の教を哲學的、性理的に説いて佛教に似たかの如くにした、然るに王陽明子の如きは、不世出の才と、一大見識とを以て、宋儒の上に更に一機軸を出して、知行合一、致良知と謂ふ如き、唯心的、一大學理を道破せられた、實に吾々は賞讃嘆美して措く能は



ざる所である。王陽明子は初め禪を學ばれたが、後禪を捨て、儒に歸せられた、而して多少表面には佛教を排斥せられたが、其の當時盛んな禪を研究せられんとしたのは、これは禪は人を早く悟すに便利な教で、即ちこれを頓悟と言ふ、これを華嚴の五教の側から見ると、頓教と云ふた部に屬するのである、故に哲學上から見ると、淺近のやうに思はれる、そこで陽明先生が之れをすてられたのであらうが、若しもその在世中に華嚴や天台の如き深奥なる教相學を研究せられたならば、兩方を綜合して一大學説を樹てられたであらうが、之を攻究せられなかつたのは如何にも残念に思ふ。併し乍ら明敏なる陽明子の事であれば、當時竊かに天台や華嚴を研究して、或は自家立論の材料にせられて居たのかも知れぬ。それは其の説かるゝ所の學説が、關合して居るから起つた疑ひである、さう乍ら眞理に二無しとすれば、關合するのが當然であると云はれるが、想ふに或は竊に研究せられたのではあるまいか。

明儒及び其の後の學者が、單に王陽明子の學説ばかり説いて斯う云ふ前後な事を少しも注意しなかつたのは遺憾である。余は陽明子の學説と、華天二家の教

理とを比較研究して見たいと思ふ、これは余がこれまで所々で、陽明學と華嚴の法界觀など云ふ演題の下に講話したことがあるが、今は又華天二教と陽明學を更に比較をして見やうと思ふのである。

彼の教界に有名なる支那の智旭、世に藕益大師といふ、この人は非常な天台學者で、又淨土教の念佛をも鼓吹せられた博學多識の高僧である、此智旭に周易禪解、論語點晴、學庸直指、孟子擇乳、といふ著述があるが、何れも皆天台學の見地で解釋せられてある、また此外儒教と佛教の教理を合一せしめんとした文章も澤山書いてある。其中庸直指、大學直指といふものを見るに、通常の儒者の所説とは違ひ非常に面白い解釋のしやうである、此人は王陽明子の學風を喜んだ、藕益大師宗論と云ふ本に屢々そのことを云つて居る、その宗論中にも、致知格物の解などは、陽明先生の致良知學説によく似て居る、又その宗論中に、閱陽明全集畢、偶書と云ふものがある、それを見ると、儒佛の二教の間に劃然鴻溝を設くる儒者などを斥けて居る、その文は頗る面白い、茲に抜載して見よう。

君子小人、良知之體、未始不同也。一蔽於私、而不能致。遂嫉功、忌能、誣忠、陷良、無所不



至。吁。可哀矣。唯君子。昭曠如。大虛空。絕不與較。是非辯得失。故小人。卒無所騁其毒。而陷溺未深者。猶可化爲君子。一與之抗。則其去。小人。不能以寸。而玉與石角。玉。必先敝矣。通此佛氏。二無我。觀妙旨。冷然。就謂世間。大儒非出世白茅哉。或病陽明。有時關佛。疑其未忘門庭。蓋未論其世。未設身處其地耳。嗚呼。繼陽明起。諸大儒。無不醉心佛乘。夫非練酥爲酒之功也哉。學。無論儒釋。其貴真賤僞一也。學果真。雖一時受譏。被抑。精光終不可掩。學苞僞。雖一時欺世。盜名。醜態終亦必露。故曰。斯氏也。三代所以直道而行。夫直道。卽良知本體而已。致此本體。可建天地。質鬼神。竣百世。況斯世之民哉。顧斯世之民。信之。而權姦。獨誣陷之。俗儒。獨排斥之。彼權姦。俗儒。獨無良知邪。特有以蔽之。弗能致之耳。嗚呼。均此本體。但弗致。則與瑾彬同惡。能致。則與陽明同善。讀聖賢書者。宜何如慎其獨也。今世佛門。陷足於僞者。亦多矣。吾爲此。懼欲閱之。而未能閱。此書。不覺感憤流淚云。

此文意には悉く心服は出來無いが、何にせよ實に卓見と云はざるを得ない。

余常に云へる如く、陽明王子の學説は、所謂大學の三綱領、卽ち明德、親民、至善の註脚に過ぎないのである、而して又彼の天台哲學の眞理觀も、高尚深遠なると同時に

教相學としても、非常に入り込んで居るけれども、之を概括すれば、空假中の一心三觀に過ぎない、それから又華嚴の方も、説く所が實に高遠博大であるが、之れを要するに眞空、理事無礙、周遍含容の三重觀に過ぎない、尤もこの三重觀は華嚴哲學の大祖、杜順師の道破せし所で、後に至つて清凉等之を開いて、事法界、理法界、理事無礙法界、事々無礙法界の四法界とせり、而してこの三重觀を以て幽玄深大なる華嚴哲學を概括することが出来るのである、因て今これを大學の三綱領に對比して、そが歸着點を示したいと思ふ、勿論此大學の三綱領を天台の一心三觀に對比して論ぜしは、前に云ふ智旭卽ち藕益大師であるけれども、それもホンノ一寸言ひ顯したただけで、詳細に論じたのではない、而して華嚴の三重觀を、之れに當て箴めんとするのは、余の叨りに自ら願みずして創唱する所である、余は淺學劣才であるが、此點に於ては少し自負して居る、のみならず一心三觀を、大學の三綱領に當て箴めんとするも、余の創めて唱道する所と思ふて居たが、後、大學直指を讀むに及んで、智旭も既に唱へたことを知り、蓋し關合して居るのを感じたのである、勿論大學の三綱領を説くには、後世の儒者が倫理的若しくは人格的に説明して居るが、華嚴の三重觀



も天台の三諦觀も、共に哲學的に若しくは非人格的に、宇宙の眞理實相を説いたのであるから、其の間に相違の點がある様であるが、大學の三綱領も道の本原天より出づと云ひ、虛靈不昧の明德と云ふ説から見れば、無論これは哲學的に説明して、差支無からうと思ふ。

先づ天台の一心三觀から述べやう、天台の一心三觀と云ふのは、支那の南岳より承て、智者大師が廣く説明を加へたのであるが、その實は印度の龍樹論師の道破せし所である、龍樹論師の智度論の中に「三智實在一心中得」と説いてある、これが其の源である、乃ち吾人の一心にこの三智（一切智道種智、一切種智の三智を謂ふ）が具有のて居ると云ふのである、蓋し宇宙の眞理萬有の實相を吾人の觀智に對するを、三觀の妙理と云ふのである。

抑も宇宙の眞理萬有の實相は、素より虛妄の相を含むもので無い、乃ち之を空觀と言ふのである、蓋し色眼鏡を掛ける人は、宇宙の森羅萬象を其の色眼鏡の色に随つて之を認むるが如く、凡ての觀察は、一も眞理に非るを以て、悉くこれを排斥すべく、されば眞理界中には、寸毫も虛妄を止むることを許さずして、消極的に宇宙の眞

理萬有の實相を説明するものである、これを天台哲學では眞如破情の徳と稱して居る。次に假觀とは、先きの空觀に反して、宇宙の眞理萬有の實相を、積極的方面から説明するものである、今夫れ宇宙の眞理萬有の實相は、吾々の思想意識を超絶したものであるから、消極的にこれを説いて、空と云ひ得るであらう、されど宇宙の眞理萬有の實相そのもの、存在を否定することが出来無い、宇宙の眞理萬有の實相は、いづれの場處何れの時間にも存在して居るのである、故に眞理には、虛妄の相が無いとはいふものゝ、それに何等かの形を有して居り、何等かの作用を有して居るのであるからして、これを小にしては、顯微鏡でも見ることの出来無い、極めて微細なもの、或は之れを大にしては、吾々の想像と精巧なる望遠鏡とを用ゐても、知ることの出来ない宇宙間に於ける無數なる星界の活動現象も、皆これ實相の作用であつて、眞理の顯現で無いものは無い、故にこの眞理實相の顯現たる、吾々が眼前の天界及び地上に於ける、極大と極微とは、その成立の始めより、壞滅の終りに至るまで、轉變生滅千萬無量の現象を示し、又吾人の見得る世界には、自ら一定の眼界はあらざれども、直ちに之れを以て吾々の見得る世界以外に、何等の世界も無いと云ふこ



とは、決して吾々の斷定を許さない所である。果して然らば、斯くの如き廣大無邊なる現象を認むると共に、宇宙の眞理萬有の實相も、その存在を否定することは出来無い、これ所謂假觀である。これを天台教では、眞如立法の徳と稱へて居る。

以上空假二觀は、宇宙の實相を消極的方面より見て空と説き、また積極的方面より觀察して假と云つたのである、さればこの二觀は一面より空といふも、或は他面より假と云ふも、共に同一眞理實相を、この異なる二方面の見地より説明せしものであるから、言語の上に於ては、破と立と相對し有と無と相反すれども、それは全然相違せる二物を説明するに非ずして、その現はす所のものは唯、宇宙の實相に外ならんものである、即ち空といふも、宇宙の眞理實相たる、假その物の事々差別し、相々起滅し、暫くも止まらずして、到底吾人の思想の企及す可からざる所にあらざるを云つたものである、故に空といふべきものも、その實體を捉ふれば、つまり假の外に無いのである、又従つて假と云はるゝものを捉ふれば、それはまた吾人の意識を超越したるものなるが故に、これまた空の外に認むることは出来無い。果してさうであれば、空その物を説いて假と云ひ、又假そのものを説いて空と名づけたものであ

るから、素より兩者相容れざるものでない。のみならず、空といふも、そはもと偏空を意味するもので無く、又假といふも偏假を意味したものでない、この空假の兩意義を明かに説明せんが爲めに、更に説いて、中觀と云ふものが出て來るのである。

中觀とは何であるかといふに、右云ふ如く、空も偏空に非ず、假もまた偏假に非ずと云ふときは、絶對の中道と稱す可しと立論するもの、即ち絶對的中道觀である、これを天台教では、眞如絶對の徳と稱して居る。

されば、天台の三觀論は、同一宇宙の眞理實相を三方面より説明せるものである、それであるからして、宇宙の眞理といふものは、空であると言はるゝと同時に、また假であり、また中道である。又假なりと云はるゝと同時に、空であり、中道である。中道といはるゝと同時に、また假であり、空でありと云はるゝのである。されば、空と言ふも單に空でなく、假と言ふも單に假で無く、中と言ふも單に中で無い。空の内に假と中を具有して居り、假の内にも、空と中とを含有して居る。又中には空と假とを融即して論ずるのであるが、三即一、一即三にして、悉く絶對の意義に用ひらるゝものであるが故に、空を擧ぐれば、直ちに假と中を具有して、即ち絶對的であれ



ば三觀共に空といふべく。假を擧ぐれば、それは空を包含すれば、絶對的で三觀等しく假と云へる。また中觀を擧ぐれば、空と假と相即して、絶對であるから、三觀悉く中道と稱し得らるゝ、それで古人も、一空一切空、一假一切假、一中一切中、と云つて居る。されば天台の哲學は、宇宙萬有の平等實相を説き、全然相對的差別の現象界をして、よく絶對平等の本體界に移して、立論せし如きは、洵にこれ複雑なる教相學の歸着點を示すと同時に、又大に佛教哲學の高妙なるを賞讃すべきである。

既に天台の三諦觀を略述せり、次に華嚴の三重觀を述べやうと思ふ。今此の三重觀を述ぶるに先き立つて、一寸述べねばならぬ事がある。それは外でも無い、子が陽明哲學と佛教、特に天台、華嚴の兩哲學とを對比して論ぜんとするより、勢ひ佛教の教理が、非常に深遠高妙にして、哲學的眞理の淵源であることに論及した。又眞理に二つ無いといふ道理から、儒佛一貫説を唱へたに付いて、或は儒教を奉ずる學者、又は陽明學派の學者より、非難を受くるの嫌ひがわりはせまいかと、疑ふ人があつたによつて、一言此事を辨明したのである。

凡そ學者が學を講じ理を究むるには、儒、佛、老、莊、程、朱、陸、王は固より、西洋の諸賢哲

の學派に就いても公平なる態度を以て、研究す可きである。乃ちこれは、陽明子の唱道せる、格物致知の本旨であつて、陽明子が唱ふる道も、教も、亦、陽明子一人の道では無い、天地自然の眞理で、陽明學派の私にす可き道で無い。若しも前云ふ如き、極く狭い量見の學者があつたなら、將來日進月歩の學術界に立つことが出来ない。故に斯かる狹隘の量見は、速に打破して、研究の範圍を擴張す可きは、無論のことであるかと考へる。是れ子の敢て佛教哲學の方面から陽明學の眞理を發揮しやうと志して居る所以である。

抑、儒佛一貫説は、余の持論である、彼の明末の智旭も、盛に唱道せしのみならず、我陽明子より以前、即ち宋の時代に、儒佛一貫説を唱道した、博識の高僧があつた。彼の宋儒が盛に性理の説を唱へて、佛教に負けまいとしたのは、學者の皆知る所であるが、程氏の如きは、陰に華嚴の教理の深奥なるを羨みしも、表面には、華嚴全部を研究するよりは、易の一節を讀誦した方が、天地の眞理を知る上に於て、早いと、負惜しみを云つた程である。宋時代の儒者は、何れも、學問は優れて居たので、其の言説が一世を風靡せんとした。その時に方つて、一の高僧があつて、之れ等の儒者の所説



を破つた。それは誰れかといふに、鐔津和尚、また明教大師とも云ひ、名は契嵩と稱した人である。此の人は非常な學者で、又文章も上手であつた。その時分の學者や又、廟堂に立つて居た政治家も、皆この高僧の説には、心服したのである。此人の説では、儒佛は一で、儒の教へは形體的の修養を云ひ、佛の教へは心靈的のそれを稱へると云ふので、多くの著書もあるが、その中にも眞諦無聖論、皇極論、中庸解といふが如きは、その顯著なるものである。その説は誠に正々堂々として、一言も他人の是非を許さない。又、仁宗皇帝に二度も奉つた書とか、韓相公に上つた書とか、或は歐陽侍郎に上つた書などは、實に痛快な筆を揮つて居る。此等の書を見れば、儒教をのみ知つて、佛を知らざる輩の、頂門の一針ともなるであらう。此の人の文中次のやうな文字がある。

古へ聖人あり、佛と曰ひ、儒と曰ひ、百家といふ、心は則ち一なり、其の迹は異なり、夫れ一なるものは、其れ皆人の善を爲さんことを欲するものなり。異なるものは、家を分つて、各、其の教を爲す者なり。聖人、各、その教を爲す故に、其の人を教へて、善を爲すの方、淺あり、奥あり、近有り、遠有り。惡を絶つて、人、相擾れざるに至つて、

則ち其の徳同じ。

と。此れらは中々の卓見であると思ふ。それから又有名なる宋の李忠定公、この人は宋一代の名臣であつたが、この人も儒佛一貫説を主張した。此の人が、嘗て俱に廟堂に立つて、政を行つた所の、吳元中に與へた書中にも、かういふことを云つて居る。これは殊に注意せんければならぬと思ふ、前にも云つた通り、佛教中、華嚴が最も高い眞理を説き、儒の方では、易が最も、形面上的眞理を説いたものであつて、而もこの二者は、一つであると論じて居る、それを今譯述すれば。

易には象を立て、以て意を盡す、華嚴は事に托して、以て法を表す、本と二理無し。世間と出世間と、亦二理無し。何を以てか、これを言ふ、天地萬物の情、九卦に總攝せざるなく、引て之れを申すれば、其の象、無窮に至る、此れ即ち華嚴法界の互相攝入なり。一を無量となし、無量を一となく、小中大を現じ、大中小を現ず。法界の成壞、一漚の起滅、是れなり。乾坤の闔闢、一氣の盈虛、是れなり。易に時あり、其華嚴にあつては、則ち法門なり。嘗て觀る七處九會、諸天宮に昇り、法を説くと雖も、善光明殿を離れず。普く群生の前に現ずと雖も、而も常に菩提座に處る。每會



必ず十法界、諸佛菩薩あり、同一名號來集して禮を作す。同一の威儀、慰諭讚稱同一の言説、乃至事ふる所の佛、縱來する所の國、同じからざるもの無し。此れ何の理か、譬へば鏡鏡相照し、重々相入するがごとし、窮盡すること有る無し、是の故に百億天地、即ち乾坤あり。百億日月、即ち坎離あり。百億の山海、即ち長短あり。陰極り陽生ず、君子道長きは、佛の出世なり。陽極れば陰生じ、君子道消すは佛の滅度なり。剛柔相推し、以て變化を生ずるは世界の生滅相依なり。六爻周流、循環端無く、萬物輪廻は、互に高下するなり。是れに由りて之れを言へば、華嚴法界は、この乾坤諸卦と二理有らんや。云々

この文章の全體から云ふと、儒教の最高真理觀と、佛教即ち華嚴哲學の最高真理觀とは、寸毫も相違はないのである。さて、華嚴の三重觀を極く、簡單に陳べやう。三重觀は、既に、前號にも云ふた如く、第一は眞空、第二は理事無礙、第三は周徧含容の三觀である。嚴家の學者が周徧含容を開いて、これより十玄緣起とか、若くは、六相圓融と云ふやうな、高尚深遠な哲理を道破して居るが、今は簡單を旨とすれば述べない。第一眞空觀とは、前にも述べた、天台の空觀と、一つのやうなものである。乃ち

廣大無邊なる宇宙の森羅萬象は、吾々の認識の上に於てこそ、森羅の相を區別せらるれども、實體、其のものよりせば、眞空でなければならぬ。例へば吾々の目に映ずる所の、青、白、黒、紫、赤、紅、綠色も、これ皆吾々の眼に映じて、吾々が爾く觀するものであつて、色、其のもの、側からは空である。即ち天地法界平等無差別にして、一眞如ならざるは無しと云ふもの、是れであつて、換言すれば、意識を離れたる、即ち認識以上のものを云ふのである。それから、第二の理事無礙觀とは、理眞空即ち本體があれ、現象事がなければならぬ、故に其の(事)現象は理(本體)から出たものである。故に事と理と、區別のあるものでなく、理即事、事即理で、換言すれば、本體即現象、現象即本體である。是れ宛も水を離れて波なきが如くである。

以上眞空觀即ち認識以上の實體と、認識以下と差別無き、理事無礙觀、即ち換言せば、色空無礙なることを説破せしも、猶未だ盡さるる所あり。是に於て、更に百尺竿頭一步を進めて、第三の周徧含容觀を道破したのである。周徧含容觀は、華嚴哲學に於て、最も誇るべき所の事々無礙觀の謂であつて、先に所謂、理事無礙觀は、本體即現象の謂であるが、此の周徧含容觀は、現象即現象の同體圓融、無礙相攝の深理であ



る。即ち一多相即、無盡緣起の理である。これは陽明學に、最も密接の關係ある真理觀である。陽明子の學理は、知即行で、所謂天地萬物皆一體と立てるので、宇宙の大は即ち吾々人類の、一個の身體に存してゐると云ふのである。

以上述べ來りし天台の三諦觀や、華嚴の三重觀は、宇宙の眞理を研究する行程を示したものである。昔人も斯う云ふ場合に比喩を引いて解いて居る。それは如何に帝王の宮殿が、華麗莊嚴を極めて居ても、これを圖に案ずるとか、高さに上るとか、或は宮殿の門戸を入らなければ、その美麗を知り得ないのと同じであると云ふのである。此の三諦觀や三重觀は、眞理を見出す所の門戸である。樞鑰である。されば儒教の方でも、大學の三綱領も其の通りで、これに對比して論ず可きである。これより陽明學の明德、親民、至善の三綱領説を略述して、以上述べた所のものに一致することを示さうと思ふ。

陽明子の説に據ると、君子(大人)の學が何を以て明德を明にするにあるかと云へば、君子は天地萬物を以て、一體とするのである。その天下を見ること一家の如く……天地萬物を一體とするのは、これに意ありとするのではない、その心の仁が

天地萬物と自ら一であるのである。これは君子小人に係らるのである、婦子の井に入らんとするのを見たらば、必ず惻隱の心が起る、これが仁の婦子と一體であるからである。婦子は猶、人類であるからであるが、人類でない所の、鳥獸の哀鳴、豺狼を見ても、必ず忍びざるの心がある。その心の仁が、鳥獸と一つであるからである。鳥獸は猶、知覺と云ふものがあるけれども、草木の挫折するを見ても、憐みの心が起る。これ仁の草木と共に一體であるからである。草木はまだ生意があるけれども、瓦石の毀壞するのを見ても、顧惜の心が起る、是れ、其の仁が瓦石と一體であるのに因る。これは即ち天命の性に根して、自然に靈昭味からざるものであつて、これを明德と云ふのである。かくの如く爾我相隔てざるを、明德を明にし、天地萬物一體の本来に復るといふのである。即ち明德とは、天地萬物一體であるといふの體である。さうして次に民を親しむと云ふのは、天地萬物が一體であるといふのは、たらしき即ち用である。即ち人の父兄姉妹及び、人類以下、總ての萬物に至るまでも、己れに近いものより親しむと同様に、推及するのを親民と云ふので、これまた天地萬物を以て、一體とするのは、たらしきである。次に至善とは、明明德、親民の極、則で



ある。陽明子の説によると、吾々の天命の性といふものは、粹善たる至善であつて、虚靈不昧のものである。即ち所謂良知である。かく論ずるは、大學の三綱領が實地に行はるれば格物致知治國平天下も自ら圓滿にせらるゝのである。乃でこれを對照しますれば、陽明子の解釋に據る明德は、即ち中庸に所謂天命これを性とといふ側からして、明鏡の如きものであつて、即ち明德は吾々の目に見えない心の本體であつて、真空とも謂はれるのである。故に天台の空諦、華嚴の真空に當て箴めることが出来る。親民と云ふのは所謂現象即ち用であれば、虚靈不昧なる明德を、己に明にしたならば、それを更に、人にも及ぼさなければならぬのである。己れと他人とは彼我の別はあるが、天地萬物一體の側から見れば、無差別でなくてはならぬ。故に彼我の別が假りにあらはれて居る、これが天台の假諦に當り、華嚴の理事無礙に當る、即ち己れと人と無差別といふのである。明德といふ體と、親民といふ用とを盡したならば、即ち至善に止るといふ。極則に及ばなければならぬ。即ちこれは、陽明子の説に據ると、致良知である。これは最早、至善といふ側になれば、絶對的のもので、この上寸毫も加へることの出来ないものであれば、天台に所謂中道で、華嚴

で、所謂周徧含容觀にあてはまるのである。然れば前にもいふ如く、陽明先生の所謂明德、親民、至善は、人格的或は道德的に説かれてあるが、天地萬物一體であるといふやうな、非人格的にも論ずることが出来る。それであるから、今日世間一般の倫理學者は、宇宙間に於ける眞理觀と、人間行爲を律する倫理の根本とは、別々であるやうに論ずる。これは陽明子の如く、天地萬物一體であるといふ道理よりすれば、大いな間違ひである。斯の如く論じて來たならば、前に所謂華嚴天台の眞理觀も、陽明學の眞理觀も、皆一に歸着するのである。猶この他に佛陀の三義といふものがあつて、これは、自覺、覺他、覺行、窮滿とある、これも同一の理で、自覺とは、明明德、覺他とは、自ら覺れば、人をも覺すといふ親民に當り、覺行、窮滿、即ち自他共に覺つたならば、直ぐに行ひ、其の行が圓滿になるといふのは、止至善に當る。かくの如く論じ來つたならば、天地を一貫せる眞理は一つでなくてはならない。眞理に二つは無い、それを狭い門戸を立つるのは、大なる間違であると思ふ、否、將來學術の進歩するに隨ひ、かくの如き偏見は自ら消滅するものである。



### 九、華天二教の比較評論

諸君、私の演題は、華嚴と天台二教の比較評論で、演題は立派であるが、其實は極く簡単な比較論で、云ふことも極く淺近であります。御承知の如く、佛教と云ふ宗教は、高尚深遠なる哲理を含んで居る。彼の俱舍にせよ、成實にせよ、律にせよ、法相にせよ、或は又三論にせよ、眞言にせよ、何れも皆深奥なる哲理を含んで居る。然し此の多くの宗派中、法門の最も高尚にして、教理の最も深遠なるは、先づ華嚴と天台とである。申すまでもなく、華嚴は佛始成正覺の時に際し、深位の菩薩、即ち大徳の君子に對して、佛自所證の本分を宣説したもので、機法共に高く、恰も日先づ出で、高山を照す如く、而して天台は、釋迦四十餘年の曉に、一期の化縁將に功を收めんとして法華經を説き、普く二乗三乗の機をして、一佛乘に入らしめ、佛智見に開示悟入せしむるもので、恰も萬川の流水、齊しく海中に入りて、同一鹹水と成るが如くである。乃ち華

嚴は釋迦說法の最初で、天台即ち法華は說法の最終である。故に華嚴を一乗圓教とすれば、天台も亦一乗圓教で、二者互に其高きを同くして共に相下りませむ。實に此二教は諸教の粹を抜き、各宗の上に超出して居る。私は近年此二教を研究しつゝ、あるので、乃ち今日此二教に就て、評論を試みて見たいと思ひます。然しながら僅々三十分許りの時間では、逆も精しく述べることは出来ませぬ。ホンの大要を一寸述べまして、諸君の清聽を煩します。

扨て二教の教理を比較評論せんとするに際し、一言せざるを得ない。そは學者間で、華嚴經は龍樹論師の作であると云ひ、或は龍樹論師が龍宮に入て取て來たと云ふ、神祕説もあり。又法華經も後人の僞作であると云ふ、大乘非佛説家もある。これらに就ては、少々研究も致して居るが、只今は問題外であるから申しません。又二教の祖師や、歴史に就ても、總て述べませぬ。故に天台は智者、華嚴は賢首を其祖として、お話するのであります。

#### 天台

天台は御承知の如く、支那陳隋兩朝の頃、佛教の哲學盛に興り、所謂蘭菊美を競ふ



時に方り、南方の天台山に一世の名僧智者大師出で、大に法華一乗の法を唱へ、遂に天台宗を大成した。此天台宗は、御承知の如く、其所依の經は法華經で、之に彼の三論、大論をも雜へ、中にも龍樹の中觀論を以て指南として居る。

由來天台の教義は、五時八教を立て、或は時間的に、或は空間的に、縦横一代の諸教を判釋することが周到で、實に一代教をして、悉く法華一乗の大海中に歸入せしめて居る。其手際の巧妙なるは、讚嘆の外はない。五時とは華嚴阿含、方等、般若、法華涅槃で、八教は則ち頓漸、秘密、不定、三藏、通別、圓の八教である。而して天台哲學の大義を精査して見ると、畢竟教觀の二門である。教門は即ち四教五時、一乘十如等で、觀門は即ち十二因緣、二諦、四種三昧、三惑義である。乃ち此教觀の二門を以て、一代教を自由自在に判釋して居る。而して又此四教を二種に分てり、一は化法の四教で、二は化義の四教である。此二種の四教を合して八教となせり。然しながら此の八教も、所詮は其理體は、藏、通、別、圓の四教である。此化義の四教は、華嚴の五教と見てよろしいかと思ふ。



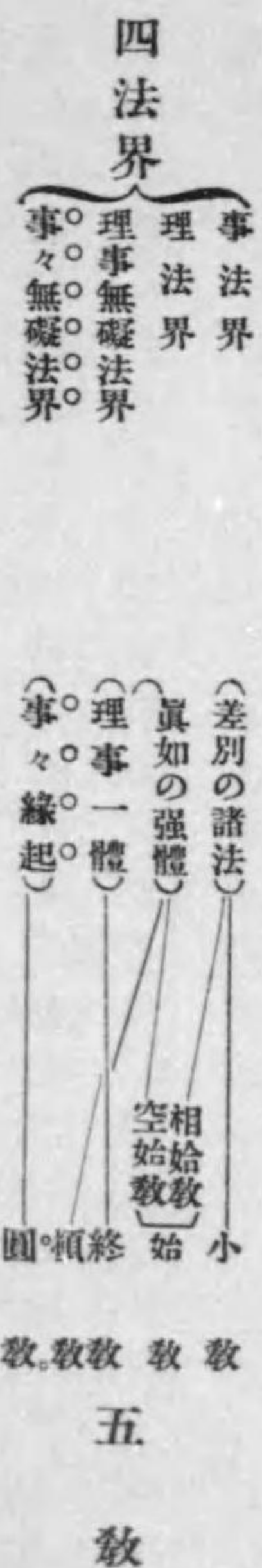
更に天台の四教を吟味すれば、一心三觀、即ち空假中の三觀を以て、宇宙萬有の平等實相を説くので、四教中の藏教を折空觀と云ひ、通教を體空觀と云ひ、別教を次第三觀と云ひ、又圓教を一心三觀と立て、居る。藏、通、別、圓の説明は略す……天台即ち圓教の意は、只今起る所の念々の修惡即ち性惡と談ず、別教の如く、末は迷源は眞と云ふ如き差別なく、只起る所の當體が即ち法性也、眞如也、三千也、三諦也と悟るのであつて、彼の牡丹の花の美麗な計りが眞如にあらず、牡丹の花中に棲で居る、醜なる蟲も眞如實相なれば、薔薇の花の美しさも、其香の清きも、眞如實相なれば、薔薇の針も蟲も、皆眞如の理體である。吾々は此理に迷へるが故に、無始以來二種の生死を免がれないので、此理を悟れば、當所に生死を解脱するのである。此圓教を覺するものは、即ち迷即眞、生死の當體其の儘が法性三諦で、此妄即ち眞、修惡即ち性惡なりと達觀す、是れ天台教の極意で、一心三觀は、鏡中の花、水中の月の譬喩を以て、宇宙の



森羅萬象を中道實相に入れて居る、是れ天台哲學が攝機の周遍を以て、諸教に勝れてゐる所以である。

華嚴

華嚴も矢張り天台と幾んど同時に起り、我國に渡つたのは天台より以前であるが、華嚴は天台智者大師より後、こと百餘年に、彼の一世の博識家賢首大師の大成したもので、華嚴哲學の諸教判釋は、前にも示したる如く、天台教の化義の四教のそれの如く、賢首も亦た一代の諸教を大別して、小、始、終、頓、圓の五教とせり。華嚴は此外に四法界を立て、宇宙の真相を解釋して居る、乃ち、



此四法界の説明を(五教は略す)せんには、長時間を要すれば他日に譲り、華嚴哲學の骨目にして緣起論たる事々無礙法界と之を解釋する、六相圓融と十玄緣起との二種の方法の中で、十玄緣起の第一、乃ち同時具足相應門と、第四乃ち因陀羅網境界門

とを略述せん、十玄門中には、此宇宙の萬有を總攝して餘す所なく、如何なる大哲學者が出て來ても、決して此外に更に説を立つることの出來ない程、深遠高尚なる理を説き盡して居る、十玄門とは、

- 同時具足相應門 一多相容不同門
- 諸法相即自在門 因陀羅網境界門
- 微細相容安立門 秘密隱顯俱成門
- 諸藏純雜具德門 十世隔法異成門
- 唯心廻轉善成門 託事顯法生解門

華嚴哲學は、此外更に十宗を立て、自家の圓滿完備を證して居る、さて同時具足相應門とは、其名の如く、諸種の事項を具足して相應するを云ふ、十義を述べたれど茲には略す、總て宇宙にあらゆる萬象が、同時に具足相應して互に相背戻しない、皆無碍自在にして、事々物々無盡に緣起し、圓融無碍なるので、之れが即ち華嚴圓教の極意である、即ち賢首大師が則天武后に教へし如く、金を以て製造したる獅子は、金は能成で、獅子は所成である、故に金の外に獅子なく、獅子の外に金無きが故に、金と



獅子とは不二である、金は能成であるから理で、金を以て造られたる獅子は、理に依て現はれたる事物に外ならず、是を以て此金獅子は、理事不二を示し、而して獅子の眼、耳、鼻、舌、身の諸根や、毛孔に至るまで、同時に具足して、圓滿に互に相碍へない、是れ即ち一切の事理は、同時に具足するに同じで、此獅子の一毛を損ずれば、獅子の全體とは云へない、然らば獅子の一毛は、獅子全體を包容して居るのである、果して然りとすれば、獅子に属する多くの毛も、一毛毎に獅子の全體を包容すべく、一個の獅子已に然りとすれば、無量の獅子も亦其通りで、宇宙の森羅萬象も皆此理の如く、重々無盡に縁起して、障礙なく、圓融轉旋して、窮りないのである。

又因陀羅網境界門には、賢首法藏は、又寶珠を以て譬喩として居る、乃ち明徹せる天上の寶珠を以て製したる因陀羅網の如き、一つの珠の中に、一々の珠の影が映り、其影は重々邊際なく、而して此無邊際多くの珠の影も、畢竟一珠の中に在りて、互に相炳現す、此の理を推し行けば、十方重々無邊際珠も、亦一々此の如く、重々一切の珠の中に包容す、故に此一珠の中に入れば、重々一切珠の中に入るのである、乃ち芥子を剖つて、一大法界を窺ひ、微塵を破て、大千の經卷を出すと云ふ、廣大不可思議

の理も、決して怪むに足らない、以上の如く華嚴は天台の如く、攝機の周遍なるなしと雖も、法の深遠高妙なるは、遙に天台に勝つて居る。

要するに、天台は性具即ち法界實相論を以て誇り、華嚴は法界縁起即ち無碍法界觀を以て誇り、互に其高きを競うて相下らず、天台は宇宙萬有の平等實相を唱へ、華嚴は宇宙萬有は一心の縁起なりと説き、天台は明月の清きのみ眞如に非ず、明月を掩ふ曇雲も亦眞如也、實相也と語り、華嚴は眞如の理體は明月の如く、明月を掩ふ曇雲は妄念也、妄念を去て、眞如の月の一法に入ると談ず、天台は一念の妄心に、十界三千の法を具し、善も惡も一念の所含にして、月も花も實相の表現にあらざるなく、現前一念の心に、法爾として善惡を具す、故に眞如は純然たる善法といふべからずと。華嚴は一切の諸法森羅萬象、盡く眞如の一法を眞とす、千浪萬波の異なるあるも、水たるの一法を體とするが如しと。

以上二家の宇宙に對する真理觀は、其相異なるは、即ち各所依の經典の然らしむる所である、乃ち華嚴の海印三昧は、其體は法身の眞如なるに起因し、天台の法華經は諸法實相のゆゑに、性具性惡を説くに起因す。此の如く一は法界縁起を説き、一



は諸法實相を談ずと雖も、畢竟行と智との行程を異にするに過ぎず、二家徹底の絶對界には、毫末の相違あらざるを信ず。絶對界には、歴史無く、歲月無く、東西南北なく、況や善惡をや、這般の區別を付するは、吾人々類が、不完全なる常識を以て、差別を付するに過ぎず、或る學者の如く、宗教は徹頭徹尾、常識的ならざるべからずと斷ずるが如き、偶々其理想の淺陋にして、宗教に暗きを見るに足る。此の如き深奥なる教理を説ける華嚴は、我國に在りては、僅かに名殘を東大寺に止むるのみ、蓋し調の高き曲は、其和するもの寡きに由る乎。天台は華嚴の如くならずと雖も、その宗の僧侶は、概ね無學無識にして、紫衣金装、徒らに人爵の貴きを願ひ、或は王侯貴人と相往來して、無上の光榮として居る、神聖なる宗教家の出世間、眼より看れば、爵位何ものぞ、王侯と雖も、凡夫也、實に天台僧侶の無識言語に絶する、滿堂の諸君、特に青年の學生諸君に望む、諸君は學科修業の餘暇に、希くば此の如き高尚なる宗教を研究して、歐米各國にも傳播せしむるの方法を講じ、又希臘教の外何宗をも信ぜざる露國人をして、此の如き宗教を教へ、以て彼等をして、覺醒する所あらしむるは、即ち御互の天職と信じます。

## 一〇、實踐理性と陽明學

元來王陽明子の學問は致良知、知行合一であることは、私が説明する迄もなく、諸君は疾に御承知のことと信じます。而して陽明先生が桂悟禪師の日本へ歸るを送るといふ文章や、其の他佛を迎ふるを諫むる疏などの文章を讀みますと、洵に文章は立派でありますけれども、佛教を嫌はれて、深く研究されなかつたから、佛を排斥する理論としては淺薄である。されば佛教の知識から申せば、私等よりも少し下るかも知れぬ。王陽明先生は、初め禪學はおやりになつたのであるが、其の時分には私共の専心研究して居るところの華嚴學とは、表面から見ますれば、殆ど水火も管ならぬものですが、内面的眞理の上より、其の眞髓に立入れば、即ち一であります。そこで陽明先生の説は何であるかと云ふと、直覺的唯心論である。而して歸着する所は、道德即ち倫理學でありまして、今日の如き道德の腐敗したる時世にあ



つては、此腐敗を救済するに最も適切なるものと思ひます。

曾て三宅雪嶺先生の御演説の大意が讀賣新聞かに出て居りましたが、先生の御説では昔より今日は道德が進んで居る、昔は紀文大盡が吉原で金を遣つたら、社會は之を是なりとして拍手した。又人を見たら盜賊と思へと言うて居たが、今日はそれほど無い。今日の社會はそれほど腐敗して居らぬ、といふ御議論で、面白い御説ではありますが、私は現今は如何にも人の知識が進んで居るけれども、道德は昔より數等衰へて居るかと思ひます。それは何故であるかと申しますれば、世間堂々たる學者先生で、而かも最高學府に在りて、學生の模範とならなければならぬ方々が、身の行は正しからず。或は最愛の奥さんを虐待なさるとか、又は名譽ある大先生にして、其の奥さんの妹と通じ、奥さんが忌やになつたから、遂に奥さんを虐待して追出し、第二に奥さんの妹を娶り、ソコで前の奥さんが憤つて、どこかに待伏せして、撲つやら傷けるやらで大騒ぎをして、終に訴訟沙汰になる所を、仲裁する者あつて治まつたと云ふ。之れが堂々たる最高學府の先生であると云ふに至りては、驚くの外はない。此外人爵高く、或は學識ある上流の貴顯紳士にして、口にする

も忌はしき行の人も社會には多くある。加之現時多くの新聞紙に上る所の、社會の出來事を見ましても、道德の腐敗して居る事は明瞭である。一言以て之を悉さば、教育勅語の御精神が、實際徹底して居るや否や、疑ひなき能はずである。

徳川時代に消防夫になる者、乃ち所謂飛人足が採用されたる時の請書と云ふものを見るに、

(一)命を惜しみ申間敷事

(二)うそ偽りは申間敷事

(三)驅けつて馬に負け申間敷事

此の三箇條の誓約である。命を惜まぬと云ふは仁で、うそ偽りを云はぬと云ふは智で、驅けつて馬に負けぬとは勇である。此智仁勇の簡單なる誓約でキチンと守つたのである。然るに今日は固く公證役場で公證したことも、約束を履行せぬ。法律を研究しても何にするかと云ふと、何でも法律を潜つて悪い事をする爲めに研究する。それ故に口で言ふことゝ、行ふことは皆な違つて居る。所が王陽明先生の説は知行合一である。故に此道が非常に良薬となるに相違ない。易にも言



行は君子の樞機とある。どうしても私は今日の人は、知識が進んで居るけれども、道徳が非常に衰退して居るものと思ふ。それで倫理が總てに於ける、人間行爲の根本とならなければならぬ。譬へば醫者をするにも、辯護士となるにも、教育家となるにも、或は官吏となるにも、倫理即ち道徳心が土臺とならなければならぬ。世の倫理學者などが、倫理と宗教を箇々別々に論じて、倫理は相對的卑近なもので、宗教は絶對的高遠なものである。即ち宗教的理想は、宇宙の實在たる神に其の源を發して居るが、倫理は人爲的のもので、神とはくらべものにならぬと、斯う云うて居る。然し私共はどうしても倫理と宗教とは、一でなければならぬと思ふのである。至誠なる倫理は宗教の信仰から起らなければならぬ。斯様な考から私は自家の理想とする宗教上から、彼の教育に關する勅語の解釋を致したいと思ひまして、閑を偷みて従事して居ります。ドウか出版界に公に致しましたら、御購讀下さる様に今から廣告して置きます。要するに陽明先生の學説は、物と心とを別にせぬ、即ち唯心論であります。唯心論的宇宙觀につきましては、先頃世に公に致しました拙著、吾國體と宗教の中にも述べて置きました。私の著書はイツでも餘りに賣口

が悪いのでありますのに、三千部も賣れましたのは、唯物學者の大家加藤博士の所論を駁したからであります。加藤博士は唯物主義、利己主義を主張する人であるから、陽明先生の學説の如き、唯心論や、致良知とは全く反對である。屢々申す通り倫理の根本は宇宙の實在即ち至善、語を換へて申しますれば、愛より發するものであると信じて居ります。斯様な譯で實は華嚴哲學に於ける眞理觀を御話したいのですが、諸先生が澤山控へて御居で、ありますからお預りとしまして、後日また述べることに致します。

さて陽明先生の著作としては、傳習錄や其の他に種々ありますが、之を概括すれば大學の三綱領、即ち大學之道、在明明德、在親民、在止於至善、と云ふの注脚に過ぎないのである。陽明先生の説に據りますと、明明徳と云ふのは體であつて、親民と云ふのが用で、止於至善が極則である、吾々人間の性命は天より受けたもので、乃ち天命之を性と謂ひ、其の虚靈不昧の明德を明にし、自覺したならば、又之を推及して人を親しみ、自他平等にならなければならぬ。其の上更に極致即ち至善に止まるのである。至善と云ふのは、我々が差別的善惡を超越して、天地宇宙と一體となるの



であると、斯様に説いてある、是が陽明先生の骨子であつて唯心論である。陽明學が唯心論である一例を申しますれば、陽明先生が或る日弟子を伴ひ、南鎮に遊ばれた時、一弟子が巖中の華樹を指し問うて曰く、天下心外の物なし、此の華樹の如き深山の中に在つて、自ら開き自ら落つ、我心何ぞ關せんと。陽明子曰く、汝此華を看ざる時、此華汝が心と同じく寂に歸す。汝來つて此華を看る時は、此華顔色一時に明白起り來る。便ち知る、此華汝の心外に在らざることをと。又或は曰く、良知は是れ造化の精靈なり、此精靈天を生じ、地を生じ、鬼神を成し、上帝を成す。皆此れより出づ。眞に是れ物と對なし、人若し之れを復し得て、完々全々、少しも虧缺なき時は、自ら手の舞ひ足の踏むを覺らず。知らず天地の間、更に何の樂の代ふべきものあらんやと。又曰く、孔子氣魄極めて大なり。凡そ帝王の事業と雖も、一々理會せざることをなし。是れたゞ其の心より來る。譬へば大樹に枝葉あるが如し。若し根本に培養功夫する時は、枝葉自然に生ず。之れ枝葉上より功を用ひて、根本做し得るに非らざるなり。學者孔子を學び、心上に功を用ひずして汲々然として其の氣魄を學ぶ時は、之れ其の方法順序を轉倒せるものと謂ふべしと。斯様な譯

でありまして、陽明先生の言ふ致良知と云ふこと、華嚴に言ふ總該萬有心と云ひ、或は天台に所謂一心三觀など云ふものは皆な一である。又佛教全體の上に於ても、佛陀の三義と云つて、自覺覺他、覺行窮滿とあり、佛教の所説八萬四千、其の經數千卷の多きも、之を總括すれば、此三義の注脚に過ぎぬ。是亦大學の三綱領と同意味である。過る明治二十三年我が聖天子の下し賜ひたる、教育に關する勅語の中にも徳を樹つること深厚なり……博愛衆に及ぼし……斯道は實に我が皇祖皇宗の遺訓にして……之を古今に通じて謬らず之を中外に施して悖らず云々とありまするのは、前に述べました諸説と同様の意味に解することが出来るのであります。兎に角陽明先生の學説は唯心論で、心を以て宇宙を總該するので、華嚴の教理などで申す、一念即無量、無量即一念と云ふのと一つで、總て天地萬物皆な吾々の一念に在り、過去、現在、未來の三世を一貫して居る吾々の心は、今此所へ來て吾々が御話をすると云ふなども、あなた方が茲にお出になるのも、チャンと阿僧祇劫の昔に極つて居る。シテ見ると日本が他日世界を統一するとか、或は科學者が色々に實驗的研究を爲して居る所のものも、總て皆吾人の一念に存して居るのである。



或る學者は煩惱即菩提など、宗教家はつまらない事を言ふと云はるゝが、決してつまらない説ではない真理である。一つの心がグル／＼廻つて、善にも惡にもなるのである。斯様な道理から考へますると、倫理學者の所謂倫理の根本も、佛敎家が云ふ眞如も、耶蘇の神も、儒敎の上帝も、皆な宇宙の實在として一つであると思ふ。王陽明先生の所謂致良知と申すのは、眞に純潔偽りなきもので、倫理の根本である。私は信ずるのであります。まだお話ししたいことは澤山ありますが、残念ながら是で止めて置きます。

## 一一、學庸一貫論

唯今は、遠藤博士が宋儒の理氣の説に就いて、高尚なお話がありました。随分長い間お話になつたが、實に面白いお話であるによつて、時間の長いのを感ぜず、まだ多く承りたく思ひました。然し後の演説の時間は、モ一僅になりました。私がこれ

からお話し申すにも、何分時間が足らず、また後日にも思ひましたが、折角招かれ、て出席したのであります。僅かの間に立ちます。今日は、過日東主幹よりの御頼みで、柳原伯も出席なされて、知即行に就てお話しなさるゝ都合でしたが、恰度、宇和島の伊達家即ち伯の祖父に當られる方の法要が、九時から、高輪の東禪寺で、開かれるので、其の方に赴かれ、晝飯も其處で馳走になるによつて、已むを得ず出席出来ないとの事であるにより、乃ち私が、極短時間しか述べられないのは遺憾と心得ますが、學庸一貫論といふ、立派なる演題の下に平凡なお話を致します。

學庸とは申すまでもなく大學と中庸で、この二つの書物の趣旨、道の説き方が、一つであることをお話ししたい。程子や朱子などの説によると、この二書をば、あまり密接な關係のあるものと見ず、大學を讀んで、それから後に見る可きもので、中庸には鬼神のことなどを云つておれば、大學より深奥だといひ、二つの書物を大變懸隔があるものとしてゐる。

大學も中庸も、元來禮記の中にあつたのを、二程子を取り出して表彰し、又朱子が注解されたのであるが、昔し日本にも此二書を禮記の中より抜き出した人がある、



而して私が外の書物によつて見ると、宋代に於て二程や朱子の手によつて、禮記から別に表彰せられたのみで無く、既に晉の時代から、孤り行はれてゐるのであります。それに梁の武帝もまた中庸の講疏をつくつたとあります。禮記を見ますると、中庸は第三十一に編み込んであり、以下第三十二表記、第三十三、緇衣、第三十四、奔喪、第三十五、問喪、第三十六、服問、第三十七、問傳、第三十八、三年問、第三十九、深衣、第四十、投壺、第四十一、儒行で、第四十二が大學となつて居る。この點から見ましても、大學の方が、あとにならんければならぬかと思ふ、そのみならず、中庸の末に至つて、明德の事を説き、大學の綱領に移るやうになつて居る。中庸の天命之れを性と謂ひ、性に率ふ之れを道と謂ひ、道を修むる之れを教と謂ふ、これが大學の三綱領の前提となつて居るやうに考へられる。元來、宋儒は非常に、大學中庸を、高尚深遠な哲理として説いて居るが、日本の伊藤仁齋、物徂徠などは、天下國家を治める道であると説き、高尚深遠な理に解して居ない。固より修身齊家治國平天下、即ち形而下の事のみ、のやうに解さるゝが、之れは又形而上の精神的真理として、哲學的に論ずることが出来るのである。

今本題に入るに先きだつて、一言申したいのは、唯今、遠藤博士の、佛教は一元論云々と云ふお話があつた。いかにも、佛教は一元論であつて、彼の起信論などでは、此吾々の心を解して、眞如門と、生滅門とに分つて、殆んど、二元論のやうに論じてゐるが、決してさうでない、華嚴哲學の法界緣起論になりますれば、明かに一元論であります、即ち、宇宙の實在と萬有とは、別々にせず、實在即現象、現象即實在と論ずるのみならず、更に進んで、事々無礙といふ玄理になると、現象即現象と論じて居る。このらの哲理から云へば、一元論であります。それから、同博士が宋儒の理と氣との説について、程明道が理氣を一にしたことを、非常に廣く深遠な材料を引用して、お話になつた。善と惡とについては、明道の説が曖昧になり、弟の伊川の方は、理と氣とを別に説いたやうなお話もあり、終には、陽明子の學説と、程明道の學説とは、一致するやうにお説きになつた。そのお説は誠に面白く、敬服の外はない。然しながら、私は陽明先生が、理氣をも説かれたが、更に進んで、理氣を超越して、致良知、即ち換言すれば、唯心的に人の心といふ事に付いて説を立てられた天地萬物心を離れては無である、と喝破せられ、又理氣を深く説かずして、直覺的に心を説かれた様である。



これが陽明子の大に宋儒の學說より進んだところと思ふ。理と氣を分ると善と惡との區別が分らなくなるが、心を説き、心を明鏡の如きものと論じ、心の鏡に照らせば、善惡の行爲は明白に分かる、而して人の心は、小差別的善惡を超越した、至善のものにせられた。こゝらは宋儒よりも一歩進んだ見識である。之れが一新機軸を出した所以である。朱子も二程子も、心を説いては居るが、陽明子の如く、判然と心を説明して居ない様に思ふ。それから中庸と云ふことを、程子は、

不偏之謂中、不易之謂庸、中者、天下之正道、庸者、天下之定理。

と解釋して居る。元來中といふ中の字は大中正といつて、宇宙の大真理であつて、總ての本である。佛教の方でも中道實相と謂ひ、天台哲學の如き、すべて中を人法の根元とする。彼の龍樹論師の如き、中論といふ哲學論を著はして居る、其の所説が幽玄高妙であるが、之を此中庸に當て箴めて論ずることも出来ると思ふ。佛教家にして、中庸に就いて卓見を持つて居たのは、彼の宋の明教大師で、名は契嵩と云つた。此の人は極めて英邁な僧で、宋の仁宗皇帝に上つた書などを見ると、誠に立派なもので、當時の學者達の誰れも此人の説には反抗し得なかつた。儒佛一貫説を唱

へ、中庸解を作つて居る、なか／＼面白い説である。又これも宋代の僧で、孤山の瑪瑤院に栖んで居た、名を智圓と云ひ、字を無外と云つた、天台學者があつた、此僧も儒佛一貫論を鼓吹し、自ら中庸子と號し、儒佛二教を併行せしめざれば、世を濟ひ民を救ふことが出来ぬと極論して居る。此僧或る人の中庸を問ひしに答へて、

釋之言中庸者、龍樹所謂中道義也。

と、餘程精密に中庸説を論じて居る、これ等は諸君も就て御一覽あらんことを希望する、話しが前後するが、こゝで一寸述べたいのは、此頃、世間が物質的文明を謳歌し、精神的の道義は、將に地を拂はんとして居る、それが氣に懸つてか、或は時勢の然らしむるのかは知らないが、此頃、儒教復活とか、孔子教會などが起つた。私も無論賛成するので、そんな會には申込みに依つて入會して居る。而してこれ等の會では、論語を主眼とし、一途に論語の研究に心を籠めるらしい。これは至極尤もな事である。孔子の事蹟を研究せんとならば、論語が一番大切なるものであるが、然し私の考では、孔子の性行學問の立方などをよく知らうと思はゞ、論語のみでは不足の感じがある。何故かといふに、論語といふ書は、門人の顔回とか、子路とか、冉求とか、



攀遅とかに對して、其の性行人格に應じて説かれたので、同じ孝を説くにも、その弟子によつて、説き方が違ふ、仁とか義とかいふ方面も同様で、所謂、應病與藥的説明で、自分の抱負を其の儘に説かれたのでない。それを各門人が筆記したのであるが故に、孔子の眞面目を窺ふには、一寸適切でないといふ感じがする。孔夫子の眞の學問の奥義とか見識とか、形而上の理を研究せんとすれば、それは易とか大學、中庸とかについて、研究せなければならぬと思ふ。孔子の見識は易經……其の外中庸、これは子思の作つた書だといふが……此の中庸に據つて知ることが多く、また易の繫辭の如きは、孔子の學力を窺ふことが出来る。之れが儒教の聖典として、學庸、易が最も重きをなす所以であらうと思ふ。

乃で私の今日、お話するのは、明末に生れ、陽明子の學を研究した、藕益即ち、智旭である。この人は天台の見識を以て、大學、中庸を論議したのである。此書は、坊間に多く鬻いで居ない。否、殆んど無いのである。此人の傳記を讀むと後人をして、感奮興起せしむるものがある。智旭師は五十七歳でなくなつたが、著書は澤山ある。此の人の抱負が、洵に欽慕に堪へない。智旭師は其の臨終に、門人に對して、こんな

事を述べたとあります。予が此世に、生れて來たのは、世を救ひ人を助け、總ての人を、佛の道に入れ、立派な、完全な人にせんと欲するの念は、寸時も忘れない、故に予が死んだなら、墓に埋めないで、死骸を焼いて細紛とし、その一部を、深山幽谷に撒き散して、多くの獸類に喰はしむるやうにし、その半分をば、海、又は湖水に散布して、多くの水族のものに與へてくれ、吾が焼かれた死骸の灰でも、口に入れたら、彼等もまた成佛するであらうと斯う申したと。こんな事は、今日から見れば、自惚に過ぎないやうだが、抱負の大なることには、敬服の外は無い。此の人は、佛敎の見識特に天台哲學の見地から、儒敎を解した。またも、宗敎を擔ぎ出すやうだが、太田錦城の疑問錄を讀むと、宋儒の説は、多く佛敎から來たと説いて居る。即ち二三の例をあぐれば、周濂溪の大極圖説にある所の、太極而無極といふ説も、これは唐の杜順禪師の華嚴法界觀にある語である。朱子の、太極只是天地萬物之理とか、明德を解して、虛靈不昧とかいふのは、これ皆な、天台の智者大師や、華嚴の賢首大師の語を引用したのである。また程子などのよく使つた、活潑々地の語は、慧昭禪師の臨濟錄に出た語であつて、其の他、宋儒の語の多くは、皆な佛書から出たと説いて居る。實に善く調



べて居る。錦城の云はれた如く、チャンと佛書に出で居る。故に必ずしも儒者の學說を、佛敎の側から釋くのが、不思議は無いのであります。乃で此の學庸一貫論を説くには、智旭の云つた事を本として、其れに私の意見を加へて、お話するのであります。但大學或問を見ますると、大學と中庸とは、其の言、千百を累ぬと雖も、而も意義相了し、血脈貫通せり、元と是れ一篇の文字なりといつて居る。また同或問に、大學は徳に入るの書で、學者のことなり、故に主として道を修むる、これを教と謂ひ、而して學がその中にあり、中庸の一書が、性、道、教の三言、一篇の綱領たり、而して道の一字、三言の綱領たりと云つて居ます、此れを見ても、學庸一貫の説は明かであります。

右云ふ如く、學庸一貫論を稱へるのは、先づ中庸が先きで、大學が後になるといふのであつて、中庸の始めには、性、と道、と教、との三綱領をかゝげ、一番末に至り、

詩云、予懷明德、不大聲以色、子曰、聲色之於以化民、末也、詩曰、德輶如毛、毛猶有倫、上天之載、無聲無臭、至矣。

とあるのは、即ち大學に至りて明かす所の、明德の事を此末段に入れたのである。斯様に前後相照應せる所より見ますれば、大學の明德、親民、至善の三綱領と、中庸の

性、道、教とが、相連らなつて居るやうに思はれる。其の他、兩經の中に、脈絡の貫通する所が多い、それは、後で述べることにして、彼の智旭の説に據つても、大學の首章に、明德を明にするに在りと謂ひ、前章の末に、予れ明德を懷ふと云ふことを承けて言ふ、元と一經十傳に非ず、舊本もまた錯簡無し、王陽明居士已に之れを辨ずと云つて居る。中庸の始めに至つて、また、智旭は、中とは性の體であつて、庸とは性の用である、體より用を起し、要を全ふするは、體にありと謂ひ。それから天命之れを性と謂ふの性を、不變の理で、所謂眞如門である、性に從ふ之れを道と謂ふ、此道は隨縁である、所謂生滅門であると論述し、道を修むる之れを教といふ、その教をさして、不變隨縁の合一體であるとして居る。今日の哲學的の用語を以て謂へば、性とは、實在の謂ひであつて、道とは、現象の謂ひである。而して、教とは、實在、即現象の謂ひである。而して、又智旭は、此の性をさして、善に非ず、惡に非ず、即ち善、惡を超絶したものとして居る。故に人の性といふものは、心性と云ひ得るから、之れを陽明子の方で、良知或は心と申します、その心は何であるかと云へば、鏡の體の如く、妍にもあらず、媸にも非ずして、明鏡の光りが、よく妍媸を照顯するが如しと云ふのと一つである。故



に人の性といふものは、その性のまゝに率つて萬事に應用すれば、即ち善となり、此性に背けば即ち悪になるのである。性に率ふものは、即ち君子で、反くものは、即ち小人或は悪人である。此道理であるから、性に率ふこれを道といひ、道を修むるこれを教といふことになつて、所謂至善に止まるのである。それから、大學の方に及んでも、智旭は、かう云ふ解をしてゐる。大學の大を、小に對する相對的の大で無く、即ち絶對の大であると云ひ、學を覺なりとして居る、又大の字をば木覺の體を標したものとし、學の字をば始覺の功を彰したものとして居る。而して之れを吾々の心の本體と立て、居るのである。又、明明徳の上の明は、始覺の修養を云ひ、下の明徳の二字は、本覺の性體といひ、此性體中に、明徳、親民、至善の三義を具足して居ると謂つて居る。而してこの三綱領については、余は他の講演の席で屢々述べたから、今日は略しませう。智旭が全く天台の見識で、斯様に説明をして居るが、然しそれを詳しく調べて行きますと、陽明子の大學の三綱領に對する説き方と、つまり一つになるのであります。猶よく類似した所は、中庸に

修身以道。修道以仁。仁者人也。親親爲大。義者宜也。尊賢爲大。親親之殺。尊賢之等。禮

所生也。在下位不獲乎上。民不可得而治矣。故君子不可以不修身。思修身不可以不事親。思事親不可以不知人。思知人不可以不知天。

と云ふのは、大學に

古之欲明明徳於天下者。先治其國。欲治其國者。先齊其家。欲齊其家者。先修其身。欲修其身者。先正其心。欲正其心者。先誠其意。欲誠其意者。先致其知。致知在格物。

と云ひ、或は又

自天子以至於庶人。壹是皆以修身爲本。

と云ふのと、皆同一の意である。又中庸に

詩曰。衣錦尙絢。惡其文之著也。故君子之道。闇然而日章。小人之道。的然而日亡。君子之道。淡而不厭。簡而文。溫而理。知遠之近。知風之自。知微之顯。可與入徳矣。

と云ひ、又

詩云。潛雖伏矣。亦孔之昭。故君子内省不疚。無惡於志。君子之所不可及者。其唯人之所不見乎。

と云ふのは、大學の



小人閒居爲不善無所不至見君子而後厭然揜其不善而著其善人之視己如見其肺肝然則何益矣此謂誠於中形於外故君子必慎其獨也

と同一の意味で互に脈絡が貫通して居る。それから猶中庸に

苟不至德至道不凝焉

と云ふのは大學に

所謂在止於至善

と云ふことを先づ道破したものと云つてよからうと思ふ。それから中庸に

自誠明謂之性自明誠謂之教誠則明矣明則誠矣

と云ふのは大學に

所謂誠其意者毋自欺也如惡惡臭如好好色此之謂自謙故君子必慎其獨也

と云ふのと是れ亦同一の意味である。

此の外に述べたいことは多くあるが今日は遺憾ながらこれで止めます洵に冗らぬ説でありましたが後日更に詳しくお話し致して諸君の教を乞ふつもりであります。

## 一一、華嚴聖典の宗教的地位

華嚴一乘哲學は教義の二を出でず故に賢首法藏は釋迦文佛の海印三昧の一乗教義と云へり教とは何ぞ聖人被下之法なり聖佛陀が阿含施設して群生を利益する方便是れなり故に因分可説と云へり説くべからざるの果海を佛陀の善巧方便を以て種々に施設して教を設け以て衆生を導かんと欲するなり

義とは何ぞ曰く體義是れなり諸法の體は宇宙の第一原理言詮を以て説示すべきに非ず故に之れを果分不可説と云へり果海毘盧舍那の妙境界は説かんとするも説くべからず十佛の自境界にして因位の能く證知すべき境にあらざればなり十佛の自境界に二種を立つ左の如し

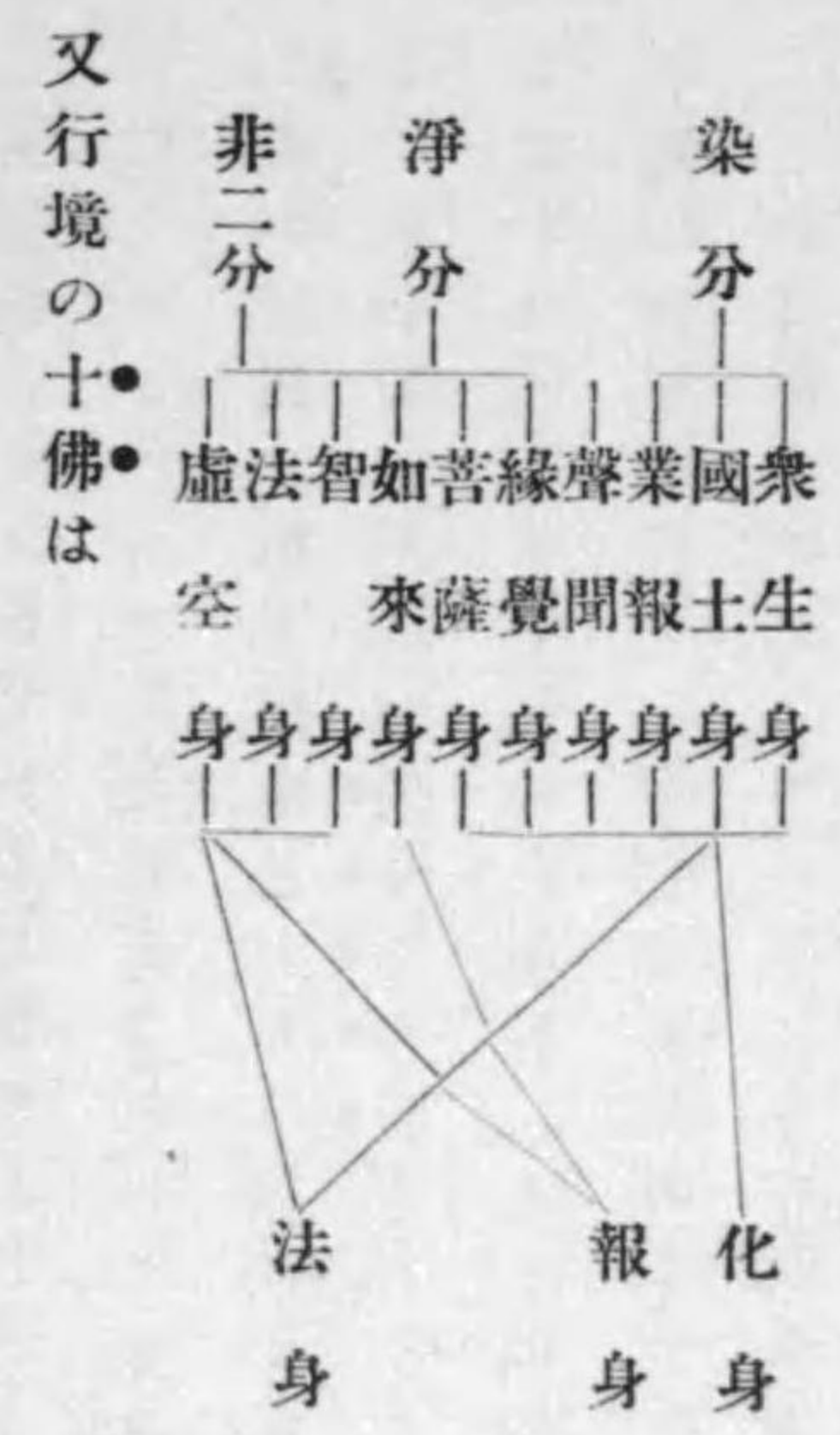
一 解境の十佛 解悟照了の境界

二 行境の十佛 絶解修證の境界

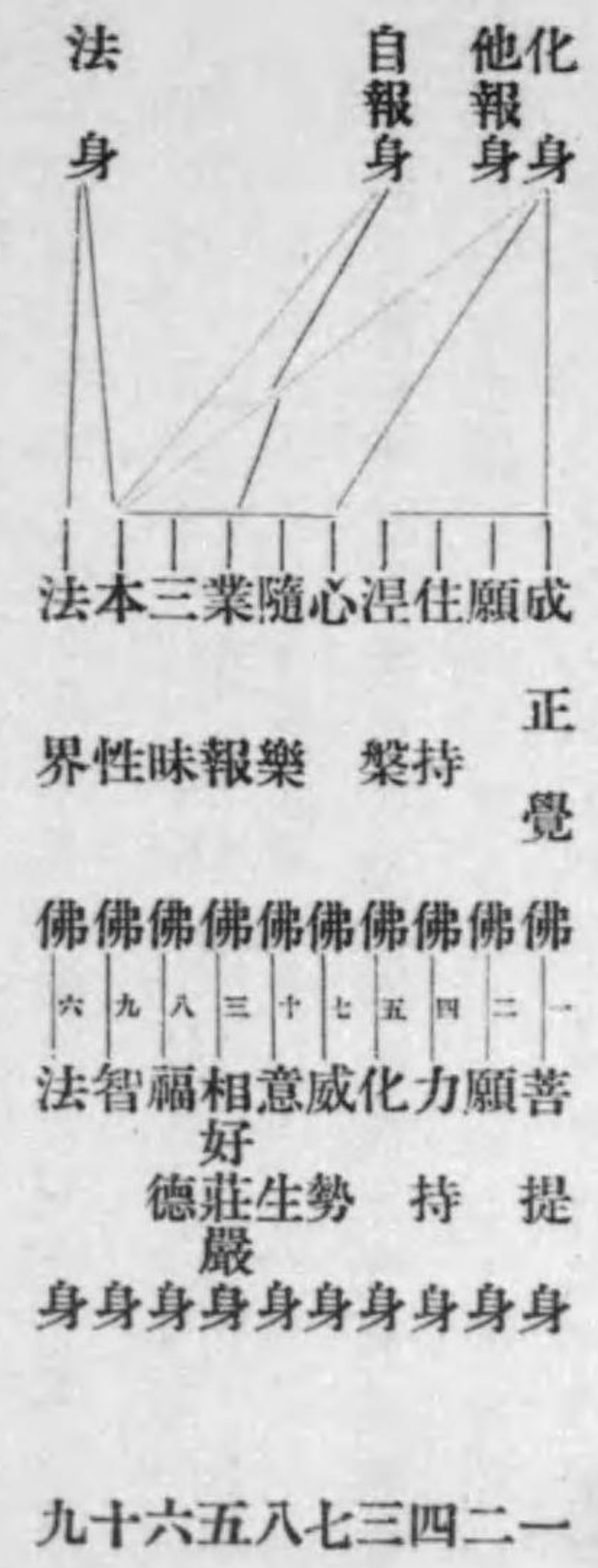
一一、華嚴聖典の宗教的地位



乃ち解境の十身は



又行境の十佛は



以上十身の絶對界、即ち毘盧舍那果上の極證は、普賢の大機のみ、能く證入する所

なるが故に、其極意を説かんとするも説くべからず、悲智の具足し、圓滿せるものを、果海難思の法とす、故に、梅尾の明惠上人も、以定水洗心垢與普賢文殊比肩、智光拂情暗、與毘盧舍那比肩と云へり、文殊は智を表し、普賢は定を表す、故に普賢の定力に悟入して、凡夫の煩惱の心垢を洗除すれば、凡夫位なれども、直に普賢文殊と肩を比するなり。又文殊の智光を以て、凡夫封執の情闇を拂去すれば、則ち毘盧の智藏海に悟入するなり。

之を要するに華嚴哲學の極意は、果海證入に在り、其の果海を開けば、文殊、普賢の二聖となり、其の二聖還源すれば、三聖圓融觀を成ずるに至る、清涼大師著三聖圓融觀は此の旨を顯示す、而して此の果海(法界)に悟入するには、幾多の工夫を要す、乃ち之を五教の次第に因りて云へば、小乘は到底夢想だにも及ばざる所にして、大乘始教は五十二位の階級を歴ざるべからず、終教に之きて四十一位を要し、頓教は一念頓悟下に成佛を談じ、圓教は信滿成佛を談じて、十信滿位即ち佛身なりと談じて、遠く住行向地の高きに至らずして、十佛の自境界に悟入する旨を談ず、然るに此の自境界を發揮するには、華嚴哲學には四種の法界を立て、以て一代聖教を攝せり。乃



一、事法界(萬差の諸法)

二、理法界(眞如の強體)

三、事理無碍法界(理事一體)

四、事々無碍法界(事々縁起)

是れ華嚴聖典に談ずる所にして、一切の森羅萬象當體相碍へず、森々羅列するもの、皆法界の理より顯現したるものならざるなし、之れを眞言には六・大・不・離と談じ、天台にては諸・法・實・相・或は一・心・三・觀と談ずる是れ也、天地山河花香月色皆斯法の妙體ならざるなし、是れ華嚴一乘の他教に秀出する所以也、華嚴安心の歸する所は、法界の理を達觀するに在り、法界の理を達觀して、湛然寂靜而かも動ずる所なければ、即ち毘盧舍那如來にして、之を普賢の大機といふ、故に行・布・門の別より云へば、佛と普賢と迷悟因果の別を存すれども、圓・融・門よりいへば、佛と普賢と別なく、法界唯一の性海難思果分之法となる、故に圓融不碍行布、行布不碍圓融と稱するなり。

迷悟因果は、迷悟前には、別あるのみにして、悟情の前には、其の別を泯し、情・非・情の別あるべき理なく、故に華嚴所設の十佛の中には、衆生身・國土身あり、衆生身は一切衆生に應同すべき佛身にして、之を有・性・身と稱すべし、國土身とは、國土の其の儘佛

身にして、佛と國土と分つべき理なし、是れ非・性・の佛身なり、己に佛身の上に情・非・情の別あり、而かも其の情・非・情を一佛身の上に具すれば、悟地の知見より云へば、情・非・情の分つべき理あることなしと謂つべし、是れ行・布・門の前には、迷悟彼此の別あれども、圓・融・門の上より云へば、法界は唯一の理佛の外なし、此の最高理想の法界に悟入したるは、即ち華嚴法界の觀心にして、釋迦文佛の海印三昧中に觀見せしを擴充したる、一代五十年の説教となるに至りし也、故に一代教の安心も畢竟歸する所は、華嚴法界觀の安心に外ならずと謂ふべし。

### 一三、龍宮説の思索

華嚴聖典が、佛陀所説の他の諸經典よりも優れて居ることは、苟も佛教の教理を研究する學者の皆知る所である。而して此の聖典は余が常に云ふ如く、佛陀が始めて正覺を成じた時の所説なりと云ふに係らず、後世の學者が多くこの聖典を龍



樹が龍宮より將來したと云ふやうに、或は詩的に、或は神秘的、神話的に考察し、これ全く龍樹が己れの思想の向進するに隨ひ、龍宮將來に付託したものとす。又一方には、これを史的事實として、龍宮を龍族と稱する種族の宮城であると主張する。これは何れも一應尤のやうなれども、余は常に云ふ如く、深く大乘的經典を研究せず、濫りに想像を逞くした説に過ぎないと思ふ。元來印度の民族は、非常に記憶力が強いから、佛陀在世當時の所説を書物に結集もしたらうが、又大抵記憶に存したものである。又由來印度は沒歴史の國で、大乘的佛教のことを、かくの如く神話的に傳へたものである。のみならず、昔より英雄偉人に關しての傳記を見ると、皆神話的に或は詩的に記述されてゐる。かのソクラテスや、マホメットや、老子、孔子や、若くは王陽明や、其の他世界の偉人宗教家に關する傳説は、皆神怪不可思議な説話を以て埋められてゐる。かの楞伽經の如きは、大海中の鐵圍山上、十頭の羅刹鬼人が住する、宮殿の内にて説いたとも謂へば、或は又無著が毎夜定中に入りて、彌勒菩薩より大乘聖典を聞いたといふ様な説もあり、東西兩洋、何れの國の偉人傑士にも、皆それ〱神怪不可思議説が付き纏つて居る。これらは畢竟、その人々を偉人視

する所より起つたものであらうが、又當時は今日の如く、科學の進歩しなかつた時代であるから、それで何事でも容易に信じたのであらう。この龍宮も、その當時誇大化されて、色々神秘的にされたものであるから、必ずしも無いとはいはれないが、何にせよ華嚴聖典は彼の龍樹が龍宮に入つて、持來つたといふことは、この聖典研究に當つて、さのみ重大に視なくつてよいと考へる。これについて、先づ數説を列記して參考に供したいと思ふ。

(一) 龍宮とは南海の孤島、又は深山幽谷に在る一所を指し、大龍菩薩とは、その孤島又は幽谷にある、有徳の高僧を稱したものであらう。傳に、龍樹雪山に一老比丘に遇ひ、後、四方に周遊し、異教を求むとあれば、龍樹雪山を去つて、諸所を歴遊し、名僧智識を求めたるものゝ如し、而して當時は大乘聖典の衰頽せる時代なるが故に、たゞ僅に南海の孤島幽谷の間に、有徳の高僧ありて、大乘聖典を護持せしならん、それを龍樹が得て、盛に印度に興起したるに依り、龍宮より將來すといつたのであらう。

(二) 華嚴聖典が、龍宮に藏まりありしといふは、海中の或る畜類の住所を指すに非ず、



龍は不可思議微妙の作用をなすものなれば、孔子も、老子の神聖なるを嘆美して、猶龍と云ひ、又古來帝王を尊稱して、尊顏と云ひ、龍體といふ如く、龍とは神聖なる不可思議的の形容詞にして、その神聖なるもの、宮殿とは、心の靈妙不思議なるに名づけたるものと思はれる。

(三) 印度には、古來種々の人種あり、甘蔗を以て一種族の姓とするものあり、獅子を以て一種族の姓とするものあり、古書に日種、又は月種と稱するもの、皆種族の名稱に外ならず。龍も亦人種中の名稱なり、印度にナーガース(龍族)あり、この種族は古代印度非アリアンの一族なり、古代印度の南方に一王國を形成せり、龍宮これなり。佛陀在世中、種々の所に到り説法せり。又龍族の乞に應じ、法筵を開かれたることもないとはいはれぬ、乃ち龍族この法を受け相傳して、これを王宮に藏し、數百年の後にして、龍樹その地に到り、その王宮に入り、それを得て以て世に公にしたのであらう、故にその所傳怪しむに足らぬ。

(四) 華嚴經と云ひ、大日經と云ひ、大乘聖典にありて、其所説、豪壯神怪、他經に超えてゐる。諸大乘經が、小乘經典に對して、特殊の傳來義を必要と考へた時代に、此二

經典も、或は龍宮説、或は鐵塔説を假りて、説明するを得ざるに至つたのではないか。佛陀の遺法の湮沒に付いては、第五の五百年頃は、鬪諍堅固、白法隱沒すと云ひ、千五百歲俱瞋彌國、……惡魔波旬及び外道衆、踊躍歡喜、競ひて塔寺を破壊し、比丘を殺害し、一切の經藏、皆悉く流れて鳩尸那竭國に移る。阿耨達龍王、悉く持して海に入る、是に於て佛法滅盡せり……とか、或は龍宮藏とは、喩に従ひ名を彰す、龍宮には珍寶多し、法藏には無邊の義を具すとも云へば、要するに龍宮説は一種の譬喩として、學者間に行はれたるやうである。

(五) 佛滅千五百歲、一切藏經悉皆移流して、鳩尸那竭國に至る。阿耨達龍王、悉く持して海に入る、龍宮とは阿耨達池を云ふのである。

(六) 龍の觀念は、古代印度にありて、半人半獸の女性的毒蛇に擬せられ、水底に棲息し、多く貴寶を有した、此の龍の觀念は、吠陀又は優婆尼沙土の古書に見ることを得なる。

かくの如く、龍宮について異説紛々たれども、泰西の學者を始め、その他多くの學者は、大抵龍族の宮城より、龍樹が取歸りたるものと斷ずるけれども、私は強ち華嚴



聖典に限り、それを證據立てるといふのでは無い、他の大乘聖典にても、皆穿鑿すれば、矢張源は大衆部の結集から來て居る。華嚴聖典は馬鳴、龍樹以前に流行したといふ事も、立證が出来るのである。のみならず、龍宮説は僅に龍樹傳に於て、他の諸大乘經と共に、龍宮より將來したといふにとゞまり、而して又賢首法藏が、獨り龍宮説を稱道したと云ふ外に、四五の論疏に法藏の説を承けて説いたのを見るばかりで、賢首以前に龍宮説を云々したものはいないやうである。かゝることは、殆んど徒勞の穿鑿であるから、重んずるに足らない。

以上の點から見、又大乘的教理の上から考察すれば、彼の澄觀の大疏にも、

攝無量却之初無際之初、一成一切成、無成無不成、一覺一切覺、無覺無不覺、言窮慮寂、不壞假名、故云始成正覺。

と謂つて居る。この立場から云へば、佛陀の本覺は始成正覺の時で無くして、久遠の昔、即ち過去に既に正覺を成就した事となるのである。故に彼の龍宮、將來説の如きは、詩的神話的説として、研究上重きを置かずしてよろしい、之を強て歴史の範圍内に入れて説明せんとするは、畢竟徒勞である。

#### 一四、我邦宗教の將來

曩に東京帝國大學法科大學教室に於て、井上巽軒博士の統理せらるゝ、東亞協會第六回講演大會を開かれた、余も協會の一員であるから出席した。當日の講演者たる遠藤博士、隆吉、石川理學博士、三宅雪嶺博士、島村抱月君等の講演は、何れも立派なもので、敬服の外はなかつた。而して最後に余の尊敬する井上巽軒博士は、我邦宗教の將來と題して演壇に立たれた、最終で時間に乏しく、極短かく述べられたが、其の題名は實に重要である。余は平生この題目について、攻究してゐる者であれば、當日も尤も熱心に聽かんと欲した一人である、博士自からは僅々二十分あまりの講演であれば、たゞ題目の説明に過ぎないと謙遜せられたが、而も簡にしてその要を盡して居た。巽軒博士が常に宗教の前途に就いて攻究せられ、論述せられるのは吾々の喜ぶ所である、殊に倫理と宗教との合一點を唱道せらるゝのは、吾等と



見を同じくするものである。

余は宗教の將來に就いては、他日一書を著して世に問はんと欲するのであるが、偶博士の説を聴いて、大に感ずる所あり、今其の宗教の將來に就いて余の意見を簡短に述べて見たい。井上巽軒先生の演べられた要旨を概括すれば、次の如くである。

方今我邦の宗教界を見るに、多種多様の宗教が相接觸して、實に紊亂を極め、其の何れに適從してよいか分らない有様である。由來西洋には、希臘教と耶蘇教との二大思潮がある、即ち一は希臘の哲學思想、一は耶蘇の宗教思想である。然るに我邦現今の思潮は、此西洋の此二大思潮の外に、東洋の思潮、即ち印度の佛教思潮、支那の儒教(即ち孔孟の教)と、それから印度の婆羅門教、支那の老莊哲學、また其の上に日本固有の神道思潮が加はりて、各種の思潮の集合してゐるのであれば、其の何れに適歸してよいかに迷ひ、五里霧中に彷徨の有様である。而して此の總ての宗教を系統的に調べると、又二に分たれる、一は、一神教で、一は多神教である、一神教の神は、洵に威嚴ある神で、所謂獨一眞神である、即ち無形であつて人間を超越してゐる神

である、これに引きかへ、多神教の方は人格的の神であつて、色々の種類の名を付けられてゐる。これはたとへば人間の偉いものが、神に祭られるとかいふやうになつてゐる、印度の婆羅門教の神々も、人格的に出來たものである。一神教は無形の神で非人格的であつて、宇宙の實在である、人間の意識を超越した無際無限のものである。勿論多數の宗教家の内には、非眞理的のものを信仰してゐるけれども、又學者やその他宗教家以外のものに、斯ういふやうに形造られた宗教を信じないものが多くある、されば將來の宗教は、前に云つた西洋の二大思潮と、東洋の宗教思潮とを善く調和して大成したものでなければならぬ。而して又尊嚴至上なる宇宙の實在を根本とする、哲學的出世間的の宗教が、だんだん世間的のものとなり、人間今日の生活に適合するやうにならなければならぬ。要するに今日我邦現代の宗教思潮は、以上云ふ如く、洵に混亂の極に達したれば、吾人は此際日本將來の宗教として東西の長所を取り、宇宙の實在を根本義とする、哲學的至上高美なる大宗教が建立せられんことを希望する、實に希望するのみならず、必ず此の如き完備せる宗教が、日本將來の宗教とならねばならぬ、吾人亦こゝに盡力せんければならぬと。巽



軒博士の説は深大高遠であるが、概括すれば以上の如くである。これには余も亦同感であるが、その建設せんければならぬといふ、東西宗教の粹を抜き、その長を取るといふには、如何なる方法如何なる理に據り、又如何なるものを具體的教團とすることを提供せられぬ、余はこれを先生が述べられなかつたのを遺憾とする。そこで余はこゝに斯くの如き宗教が、日本否、世界人類に於ける將來の宗教に、尤も適合するものであるといふことを述べたい。それは如何なる宗教であるかといふに、平生余の攻究して居る哲學的宗教である、乃ち彼の宇宙(法界)の實在(法身)を教義とする華嚴聖典に於ける大哲理である、抑も此華嚴聖典は、佛陀が成道の最初に道破した智的哲學的宗教である、であるから今後如何なる哲學者、如何なる宗教家が苦心攻究を重ねても、これ以上に出ることは出来ない。

元來宗教なるものは耶蘇教にせよ、佛教にせよ、宗派の祖師が唱道したるものを真理とし、其の下に各人傑が出来て、また更に一派を開けば、他を排して、も、これを信仰するといふのである。思ふに各宗教の所立根本に溯れば、真理觀は一つであるかも知れぬが、兎に角各其の好む所に偏して居ることとは事實である。また現行

流布の宗教、例へば耶蘇教なら、その教義は耶蘇の性格を帯びてゐる、婆羅門教なら戒律に重きを置き、又佛教(特に小乗教)ならば、印度の厭世思想を帯びてゐる、其の他儒教にせよ、何れも其の教祖の性格を帯びないものは無い、故に直に之を我邦今後宗教、否、世界將來の宗教とするには偏する所がある、然るに吾が所謂華嚴聖典教は、全くこれに反し、非人格的で無限無際宇宙の實在を根本義とし、少しも偏する所はない、何故なれば、釋迦が成道の當初、其の大哲理を其のまゝ説いたものであつて、些の方便些の不真理の説を雜へず、白玉のやうなものである、釋迦には當時高弟があつたけれど、その釋迦がこれを説いても、弟子等は皆啞の如く聾の如くにして、恰も帝國大學の最高學生に説く所を、尋常小學の第一年生に説くが如くであつた、そこで釋迦は此一大哲理を説くを止め、諄々淺近なる方より説いたのである、而して一面、大乘非佛説論者は、此華嚴の哲理は佛陀の直説にあらずして、佛滅後六百年に龍樹と云ふ大哲學者が出でて、此聖典を龍宮より將來したといふ(この龍宮については神秘的に説くものと地理的に説く者とあり、既に別項に於て説明せり)のである、此等の説によれば華嚴聖典は全く釋迦が説かれたのでなく、全く龍樹論師が



説いたのであるとなつてゐる、それは別問題として兎も角、此華嚴聖典なるものは、洵に完備した智的哲學的教理であれば、將來學問あり智識あるもの、信仰するに足るものである。而して又此華嚴の教理は殆ど宗教家及び學者間には絶えて攻究するもの無く、僅に唐の時代に多少盛であり、又我邦聖武天皇の頃は盛であつたに止まり、爾來振はずして、果ては維新後一時淨土宗に合併されたこともあつた、日本にこの華嚴宗の寺と云ふは、たゞ一つ奈良の東大寺がある位なものである。調の高い詩歌は和るす者が寡いと同様に、衰微の極に達してゐる、けれども其の實、廣大無邊なる教理を含有して居れば、日本に特殊の教理を建立せんとすれば、差當りこの華嚴聖典を根本とせんければならぬ、而して今又これを神話的に説く時には、希臘の哲學に似た所もあり、天國を説く時には、耶穌教の天國に似た者もあるのみならず、佛教の各派に渡れば、彼の高妙なる哲學を以て誇る天台教を始め、其の他の佛教の各派には、華嚴の教理を離れた者はない。のみならず、西洋哲學者の所説の眞理も、玩味すれば皆華嚴聖典中に含まれてゐる、又詩的方面から見ても華嚴聖典中には、種々の世界を立て、その世界の一國一國を説明するにも、非常に微細を極めて居る。

以上は將來の宗教に就て、華嚴聖典の教義を提出せんとする理由の概要を述べたに過ぎない、詳細は他日一書として世の哲學者宗教家に質し、教を乞はんとするのである。

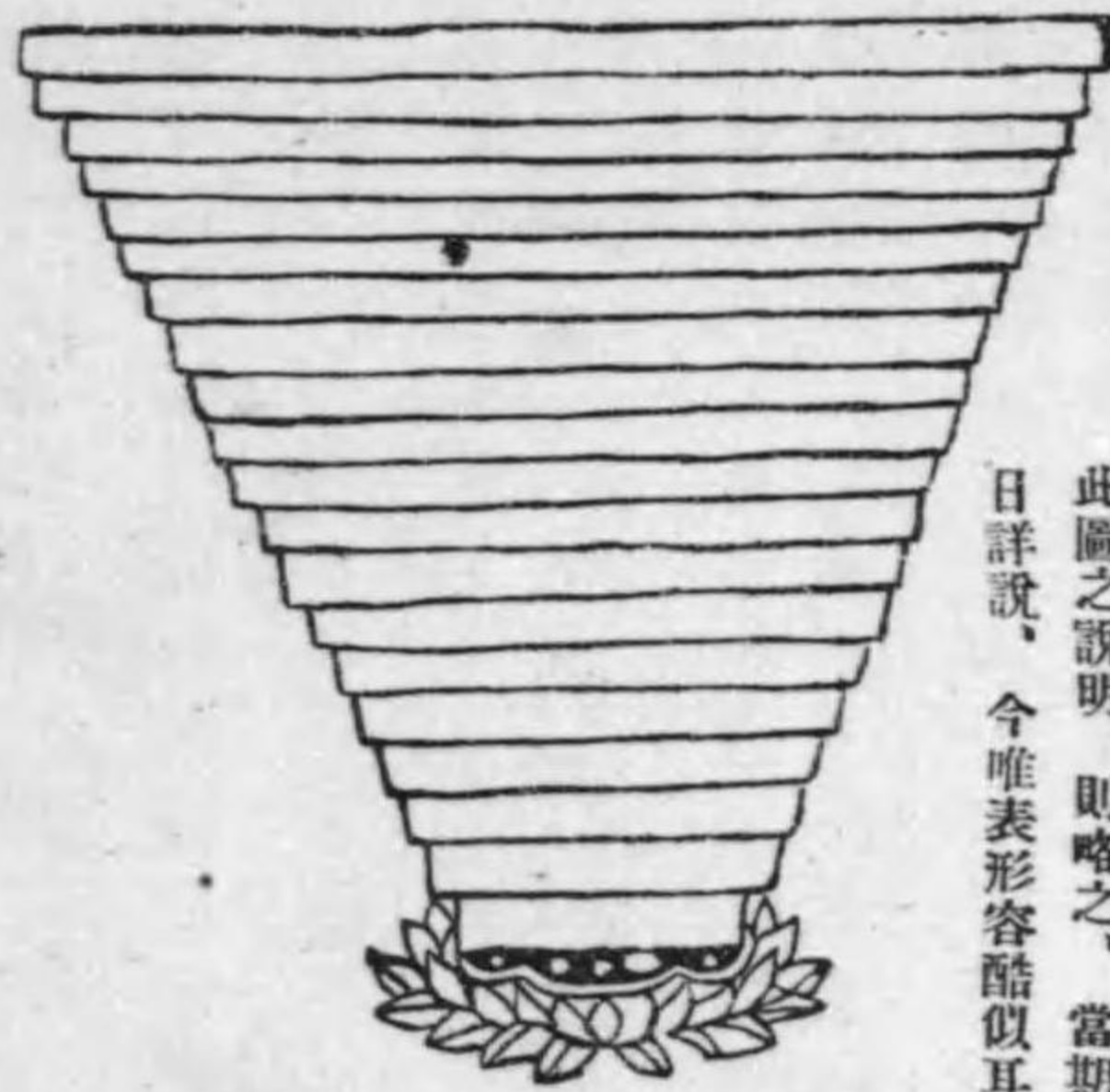
### 一五、大哲學は、大詩歌なり、又大宗教なり

哲學は哲學にして、素より詩歌ではない、然しながら、古來東西の大詩人が歌つた、詩歌の眞髓といふものは、いよゝ味へば味ふほど、深遠なる哲理を含んでゐる様に思はれる、嘗に深遠なる哲理を含むのみでなく、やがて崇高微妙なる大宗教である様に考へる。即ち是れ古來東西の大詩人が、絶大なる宇宙を對象として、其の理想を開陳し、無邊なる世界を題材として、其の寓意を披瀝した故である。然るに釋迦佛陀が五十年の説誡、其の道破したる哲學的宗教は、三千餘載の末後法味滾々とし



て盡きざるところ、實にこれ一大長詩ともいふべきではないか。此の如く大なる哲學、大なる宗教は、やがてこれ大なる詩歌にして、大なる詩歌は、又直に大なる哲學を讚美し、大なる宗教に憧憬するものである。夫の希臘の哲學の如き、耶穌基督の

此圖之説明 則略之、當期他日詳説、今唯表形容酷似耳



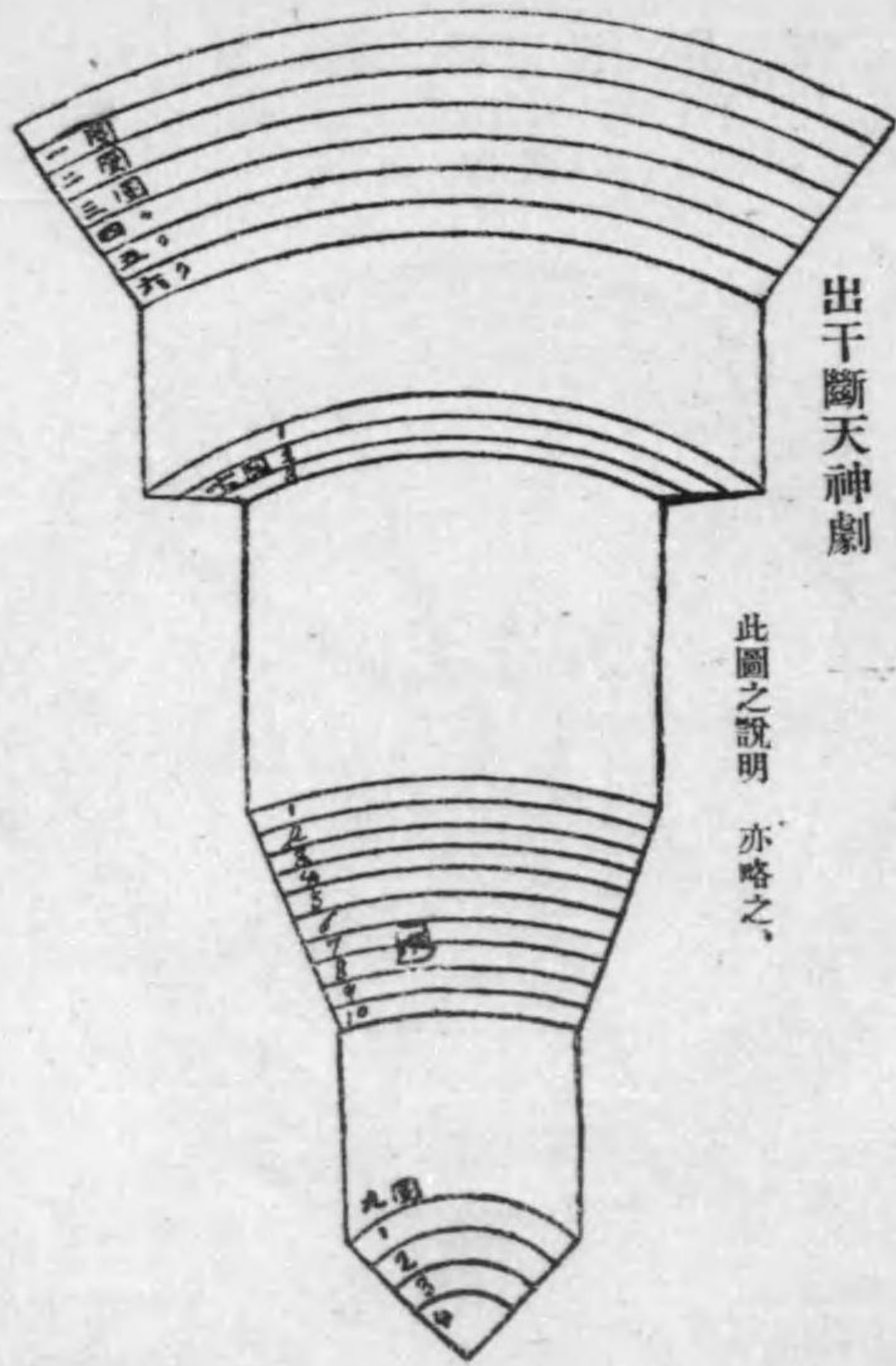
十二重藏世界

生涯の如き、乃至ソクラテースの一代の如き、誠に光明ある詩歌的哲理とも稱すべきである。元來時の古今に互り、洋の東西に別るゝも、思潮の異なるも、多少符節を合するに似たるものがないでもない。即ち之を泰西の哲人と印度の教家に比較する時、暗々の裡、自ら脈絡貫通して、其の歸結を一にし、相伴唱和すべき或るものを認むることが出来る。これ謂ゆる詩歌的に一致すべきものにして、勿論人の意識に表現する思想感情の概念は、必ずしも併行すべしとは限らぬけれども、泰西の哲人が

一切香王

組織的に演述したると、印度の教家が、謂ゆる教相學の所説の如く、能く其の歸趣を同うせるを見るに足るべきである。

地獄界之區分



出干斷天神劇

此圖之説明 亦略之、

墮落天使大魔王

これに就て、此頃予が最も感じたる一事は、中夜人靜かなる時、偶々架上の一書を亂抽せるに、伊太利の詩聖ダンテが神曲であつた、篇中地獄

界を廻れるところのものは、其の歷程の妙味言語に絶し、實に久遠の生命を保つべき、不朽の名作たることを感じたのである。こは彼のダンテが一代の高想を傾倒

一五、大哲學は、大詩歌なり、又大宗教なり







であるが、以下華嚴聖典に現はれたる華藏世界と、ダンテが道破せる天國の一斑と酷似せることを以上の圖に依て見るべきである。

此の如く彼れダンテが道破せる天國を詩的に形容したるものと、華嚴の普照十方熾烈寶光明世界種とを對照する時は、其の巧妙なる立て方と、相似調和の實證は驚歎に値すべきものであると思ふ。大哲學若くは大宗教は大詩歌と稱するを得べく、大詩歌は畢竟大哲學、或は大宗教と見ることが出来るのである。之を要するに恆久不變なる真理は、唯一絶對のものにして、忽ち多岐錯綜の妙用を現はし、雜然たる種相は、直にこれ本體の真理に歸納せらるべきである。

## 一六、正想的宇宙觀

予は宗教の信仰者として、將た華嚴哲學の研究者の一人として、予の宇宙觀を極く簡単に述べてみたいと思ふ。

かつて加藤弘之博士は、吾國體と基督教と云ふ一書を著して、基督教のみならず、佛教をはじめ總ての宗教を迷信と斷ぜられた。これに對して、予は當時「吾國體と宗教」なる一書を著して論駁を加へた。博士は其の後予及び外十五氏に對し「迷想的宇宙觀」と云ふ書を著して、予等の説を批評されたが、その批評は、吾々の駁論に對して、大した價值のあるもので無いから、そのまゝ放任して置かうとも思つたけれども、また黙するに忍びない所もないによつて、更に「正想的宇宙觀」と云ふ書を著して世に公にした。それは博士の大著述として自ら許される所の「自然界の矛盾と進化」に對して論駁を加へ、また「迷想的宇宙觀」の急所を突いたものだ。それはそれとして、こゝには少し別のことを述べよう。

元來今日世の宗教ざらひの學者の説では、宗教といふものは、科學や哲學と違つて、ひたすら迷信的のものであるやうに説く、而してその宗教を深く研究せずして、何時も宗教の例を引く時には、原始時代の宗教を擔ぎ出すのだからをかしい、原始時代のことをいへば、何も宗教に限つた譯ではない、哲學でも、科學でも皆な幼稚淺薄で、迷信的であつた、何れの學問でも、初期は非真理のことを稱へたのである。そ



れから又宗教を研究し、又は嗜好する人でも、往々間違つたことをいふ、それは宗教的真理であると云つて、他のものと分ち、別に真理があるやうにいふことである。即ち他の科學などよりは、飛びはなれた空想の如く云ふのは、大なる間違ひである。吾々の見る所では、宇宙の實在は吾々の言説の相を離れた、即ち超意識的のものであつて、その靈妙なる不可思議的なものと、吾々が心の奥底に潜んで居るものと、一つであることを實感するもので、如何なる學術も之れに及ぶものでない。かやうな觀念が吾々の心にありとすれば、宇宙の實在にも、之れと同じやうなものがあるに相違ない。上下三千年の哲學者が、宇宙の實在について、研究に研究を重ねたが、今日まだ五里霧中に彷徨して居る、而して哲學で究め盡す事の出来ないものが、宗教に没入するので、科學、即ち天文學にせよ、地質學にせよ、宇宙の大を皆部分的に研究して居るので、宇宙の大に對しては、科學は進みつゝあるが、未だ幼稚極まる、併し段々進んで往つたら、宗教の眞理界に没入せなければならぬのだ。故に宇宙の間に何々の眞理、何々の眞理と稱呼上の便宜によるなら、兎も角、全く區別を立てるのは感服しない。宗教的眞理は他の科學上などで眞理と呼ぶ所のものゝ上に超

出して居るから、尊嚴偉大なのである。然るに宗教家の内に此最高無上の眞理觀にして、他の學術を超越した、宗教的信仰を無理に俗世間の科學などに引き落して云々せられるのを遺憾に思ふ。吾々は哲學の進歩科學の進歩を喜ぶ、それは進歩發展すれば、終には宗教的の眞理觀に合一する時が来るのを信ずるからである。

加藤博士杯のお説は、目的々宇宙觀と因果的宇宙觀と云ふものを立て、目的々宇宙觀は迷想的で、因果的宇宙觀は正想的であると説くのである。目的々宇宙觀とは、宇宙の實在は何か目的があり、それより萬有が目的々に成立して居るといふので、これは間違ひで、萬有は目的々でない、總てのものは目的を有して居るものではないと云はれる。吾々は此の斷定を間違ひであると斷言する。宇宙の本體は固より天地萬有、皆目的々に活動して居ると思ふ、今日宇宙間の生物、無生物とも皆活動的活物であると、科學者も論じてゐる。彼の礦物、植物、動物も、礦物が植物に化し、植物が動物に化する様に、目的々に進化して行くので、例へば梅桃などの花が咲き、やがてそれに實を結ぶのも、魚類や、蟲類の生息繁殖してゆくことも、殊に人類の如き各人皆目的を持つて居る。其の他山の高く聳え、水の遠く流るゝも、其の外、一微



塵の小と雖も、悉く目的々であると知らねばならぬ。宇宙の一分子たる吾々人類が目的を持つて居る以上は、その大原故郷たる宇宙に目的が無いとは謂はれぬ。加藤博士の所見に據つて、前陳の如く斷ぜられたのは、總ての哲學科學の證明を否定せられたものであるまいか。

次に又、因果的宇宙觀は正想であると云ふ、即ち天地萬物は皆、因果律によつて制せられて居るといふは、一應同感であるが、因果律も、畢竟吾々人類が常識的差別から生じたもので、宇宙の本體の側から見れば、因果は一の變化に過ぎない、原因結果の道理と雖も、親あり、子あり、孫ありといふやうに論じ、またそれを逆に、子あれば親ありと云つたやうに論及して行けば、結局不明になる。原因結果の道理、因果律もその一番の根本に溯れば、分らなくならねばならぬ、畢竟吾々がかく差別をつけるので、吾々の解しやう一つで、因果的とも、目的々とも云はれるのである。それを一方は迷想で、一方は正想と斷ぜらるゝのは、大なる誤りである。又博士は、ゲーテの「吾々は一に萬古不易の金剛大法に支配されて、吾々の生存境界を成すことに餘義なくされて居る」と謂つた言を引用されて居るが、その金剛大法は、博士の所謂化

物であるとせらるゝ、獨一眞神とか、或は眞如であるとか、哲學者の所謂絶對であるとかと同一である。それを金剛大法なる語を齎し來つて、迷想、正想などの區別を立て、論ずるのは、大なるあやまりである。それから博士は、宗教家杯が、宇宙の實在を善惡を超絶した、至善のものであると云ふことを攻撃されて、善も實在なれば、惡も實在である、世間に善といふのは、眞赤な嘘言である、その證據には、善人は少く、惡人は多い、善を教へてもそれをしない、惡をするものが多いと、これも博士の謬見である。惡事をすれば、惡いと云ふことは、惡人も知つて居る、故に之れを隠さうとする。博士も利己主義を説いて、惡の實在を喚呼せられたる以上は、何故、惡をなさらんか、王陽明の知行合一説によつて云へば、人性は惡と悟つたら、何故進んで惡をなさらんのか、それとも利己主義的に、只、抗辯を續けられるのか。又博士は、善をなしても不幸に終り、惡をなしても幸福に過すものがある、と云ひ、伯夷、叔齊、顔回等の不幸短命と、桀、紂、盜跖等の榮耀長命を擧げられたが、抑も博士は、幸、不幸を何の尺度によつて律せられるのか、人を苦しめて自分のみ肉慾に耽り、横暴を極めるのを幸福とせられるのか、如何、博士に問いたいのには、此處だ。吾々は、善を行つて常に心



たのしく、一生不幸にして短命なりとも、後に聖人と敬まれる伯夷、叔齊、又は顔回の如きを以て幸福とする、今日でも人に向つて、汝は桀紂の如しと云はゞ、色をなして怒り、伯夷の如しとか、顔回の如しとか云はゞ、それが嘲笑的の場合ならざれば、よろこぶであらう、これを以ても盗跖等の一生は、人の羨望する所でないことがわかる。博士はまた、宇宙の實在に、仁、愛、正、善の至徳が無いといはれ、善も實在、惡も實在といはれるなら、人類の上に倫理が成立しない。

加藤博士の所論は、獨斷的に過ぐる事が多いやうである。今日では科學の進むに従つて、知情意の差別や、生物と無生物の限界も立たなくなるまでに進み。又、天體に於ける學術も進み、吾々の棲息するこの地球よりも、數千倍も數億倍もまさつた星があり、そこには非常な知識を備へた或る物が、生存してゐるであらうと云ふ説まで生じて來たのである、これは吾々の歡喜に堪へない所である。

## 一七、根本佛教

(一)

眞理は普遍にして絶對なり、非古非今にして、有無を離れ、因果を亡し、時空を超越し、語言を以てこれを名くべきこと難し。然れども、今吾人が眞理を研究するに當りては、之を古に徴し、今に稽へ、有無を論じ、因果を語り、又時間と空間とに依りて、之を表現するに非ざれば、又誰か其の眞理たるを確知するを得んや。この故に昔より洋の東西を問はず、多くの賢哲が、此の眞理に對し、其の考察する所を述べ、以て之を表現せり。

而して古今の賢哲が、其の哲學、宗教、教育、美術、文學は固より、彼の自然科學に於ても、各々其の研究の結果を發表せりと雖も、畢竟皆各々其の觀る所を異にし、恰も其の面の異なるが如く、素より一定ならず。今吾人の見を以てすれば、人生に於ける學術文藝は、何れも皆人文史上の必要物たり、然れども、就中、其の最も尊嚴にして、而かも權威あるものは、宇宙人世の根本原理を研究する哲學と、又た尊嚴なる宗教的



眞理を仰鑽し、宇宙の大靈と合一調和するを以て、最高無上の希望と目的とするなり。斯く云へばとて、此は決して吾人の獨斷的私論にあらず。凡そ人として、地上に於ける物質以外に、彼の美人を天の一方に望むが如く、高遠なる靈的何物かを憧憬し、これと合一せんとするを以て、最高の理想とせざるものなし。又た他の形而下物質的の學術は、如何に精微を極むるも、到底吾人をして満足せしむることの不可能なるを知るべし。故に吾人は學術上の王者たる哲學を研究し、人生の歸趣たる理想的宗教を仰鑽し、以て精神的生活の満足を得んと欲するなり。

斯くの如く、高遠なる哲學と尊嚴なる宗教は、吾人が終世の希望と目的として、仰鑽憧憬する所なり。この兩者に對して、古來幾多の哲學者宗教家が、縱橫論議せる所のものを探尋し、以て古人が如何に研學に苦心せしかを推究し、吾人も亦將來哲學宗教の大成を圖るは、實に人生の一大快事たるを覺知するなり。而して更に吾人の觀る所を以てすれば、古來東西兩洋に傳播せる二大宗教、即ち佛教と耶蘇教は、何れも長き間、精神界を支配し、共に世界に於ける文華の淵源たりしは、其の優劣を判し難しと雖も、其の教理の深遠にして、哲學的玄理を含有せるは、耶蘇教よりも、佛

教の方其の優れるを見る。更にまた世界最古の哲學宗教に想到せば、印度は希臘の前驅をなし、而して印度最古の哲學宗教が、其の所説の華麗莊嚴にして、且つ深遠高妙なるは、世の學者の知悉する所なり。而して釋迦佛陀出で、此等哲學宗教の上に、更に一新機軸を出して、其の大成を見るに至れり。然りと雖も、佛陀大成の教理に於ても、其の間自から淺深勝劣の差なき能はず、是れ古來より大小、權實、半滿の説ある所以なり。吾人淺識、佛陀大成の教理に就て比較研尋し、深く其の玄理を窮めずと雖も、多年佛教聖典の研究に従事し、特に佛陀説法の根本法輪たる華嚴聖典の、最も深遠なる哲理を含有せるを覺知し、常にこれが研鑽に潛心せり。想ふに佛教の宗教としてよりも、寧ろ哲學として優秀なるは、近時學者の認むる所、特に華嚴聖典が他に超越せることも、亦古來佛教の學者の共に是認する所にして、殆んど教界の輿論となれるなり。而して今吾人が、斯る高遠深大なる哲學宗教を研究する上に於て、吾人の智識の餘りに淺薄にして、其の任にあらざるを知ると雖も、古人が『汝ち其の人を得るを俟たんよりは、寧ろ汝ち其の人たれ』と云へる如く、叩りに自ら揣らず、専心之れが研鑽に従事しつゝあり。古來華嚴聖典の研究を企てたる先哲



が印度は固より支那及び日本に互りて頗る多く、而して其の研究の跡を尋ねれば、其の苦心實に驚嘆すべきものあり。然れども、今日より之を觀れば、先哲の研究は、或は之を神秘的に解釋し、又之を自由に討究することを忘れ、唯神怪不可思議なる説を述べ、啻に自から之を神秘視するのみならず、他人をして自家の所説を信奉せしめんとし、殆んど自由討究を妨げ、理知の力を以て解すべからざるもの多く、甚しきに至りては、其の研究の資料中には、強て之を研究する時は、其の研究者は、冥罰を受け、肉眼を亡失し、或は其の生命を奪はるべしと爲す。其の迷濛實に嗤ふべしと雖も、翻つて之を想へば、當時の思想界には有り勝ちの事なり。また一方には、古來此の聖典の研究に従事せし賢哲中には、單に深遠高妙なる真理を玩索するのみにて、深く根底を窮むることを忘了し、徒らに前賢の説述せし所の末節を部分的に解説するに止まり、又た其の字句の解釋に腐心せり。故に此等の枝葉の疏鈔を繕けば、頗る繁瑣にして、見る者をして倦怠を生ぜしむるものあり。而して適ま活眼を開き、活識を以て、これが自由研究を試むる者あれば、是れ前賢の經意に背き、自から邪路に墜する者なりとし、殆んど之を蛇蝎視するに至る。之を今日の如く、學術

の自由研究を尊重する時代より見れば、其の思想の狹隘なる實に笑ふべきなり。而して今吾人の之を研究せんとするに當り、茲に二様の研究法に據らざるべからざるを見る。即ち一は之を歴史的に考察すると、二はこれを教理の上に就て研究すると是れなり。吾人は今之れが歴史的考察を後にし、而して先づ教理の上に就て、此の聖典が如何に深遠高妙なる哲學的宗教なるかを攻究し、其の攻究の徑路を表明し、以て世の學者の示教を乞はんと欲するなり。然れども、由來この聖典は佛陀の教理中、最高最深のものとして、古來の學者は、殆んど人間と没交渉の如く神秘的に之を傳説せり。故に今之を純正なる哲學として、學術的に説明するは、極めて困難なる業なれども、吾人は強めて之を學術的に説明を試みんと欲するなり。吾人茲に研究の歩を進めんとするに際し、研究法の順序として、先づ古來傳ふる所の、此の聖典の種類を概説せんとす、乃ち其の種類と云ふは、次の如し。

(一)恆本 と稱するは、此の聖典を、時間的に過去際を窮めんとするも、其の始め無く。又これが未來際を盡さんとするも、終りなく、實に無始無終、無限無際にして、其の深大なること、如何なる譬喩を以てするも、また如何なる論辯を以てするも、



其の數量分限を説盡すことの不可能なるものとせり。即ち賢首に従へば、凡そ一言一義、一品一會、皆十方虛空法界及び、一々微塵數の刹土に遍じ、因陀羅微細世界を盡し、前後際一切劫海を窮め、及び一々の念、無邊劫を具し、常說普說、休說あること無く、唯、是れ無盡陀羅尼力の持する所、固より筆墨の能く之を記する所に非ずと。

(二)大本　と稱するは、譬へば須彌山聚の筆と、四大海水の墨汁を以て、これを書寫せんとするも、僅にこの大本の一品だに寫し難きほど、廣大なるものなり。而して大本は恆本と共に、深位の大賢の陀羅尼力の受持する所にして、固より凡人の能く結集すべき聖典に非ず、故に大哲龍樹の如きも、未だ見ざる所のものなりとす。

(三)上本　此は其の偈數をいへば、十個の三千大千世界を微塵にして、其の微塵の數に等しく。又其の品數をいへば、一須彌世界を微塵にして、其の微塵の數に等しく、其の微塵の數に等しき品數ありと云ふ、是れ亦實に廣大なる聖典たるを嘆美す。

(四)中本　此れは偈數を云ふ時は、四十九萬八千八百偈にして、其の品數は一千二百品ありといふ、此の上中二本は、龍宮に攝在して、大哲龍樹曾て之を見れども、到底人力の受持する所に非るが故に、此の土に將來せずと云ふ。

(五)下本　此れは十萬偈、三十八品あり、龍樹は、正しく此の本を將來して印度に傳ふ、即ち攝論等に華嚴經を百千經と云ふ、即ち十萬偈は百千と等しければ、數に約して此の名あるなり。

(六)略本　此れは即ち支那譯の六十及び八十等の聖典を云ふ、六十華嚴は、梵本十萬偈の中より要略して、前分三萬六千偈を譯出し、八十華嚴は、四萬偈を出す、故に略本の稱あるなり。

華嚴聖典の傳來及び種別は、已上略述せる如し。而して其の聖典の内容に就て、觀察すれば、茲に大に疑問の存するあり。由來華嚴聖典は、佛陀が始成正覺の劈頭第一の說法にして、其の日數も亦極めて短期間なれば、其を結集したる聖典が、何故に先きに擧ぐるが如く、多種の殊別を生じたるか。想ふに恆本、大本の如きは、古來より三世常恆の説といひ、或は所謂普說常說にして、無量の偈數品數あり



と稱すれば、これ實に疑ふべく、佛陀が三十にして道を成じ、八十にして入滅せる間の説法が、如何に三世常恆の説法といはるべきや。果して三世常恆の説ならんには、是くの如く、深遠廣大なる聖典を、何人が結集したるや、是れ眞に怪むべし。或は又説を爲すものあり曰く、恆本大本の如きは、謂ゆる十地の賢哲が、他に超越せる智識を以て傳持せる所にして、通常人の及ぶところに非ざれば、筆墨の以て能く記す限りにあらずと。若し然らば、誰か斯る聖典のありといふを知るや、既に古來此の聖典を見たる者無ければ、何ぞこれありといふを得ん。更に又下品十萬頌の聖典に就ていふも、佛陀の滅後、早く既に此の聖典が印度に亡びて傳はらず、謂ゆる龍宮に在りしを、龍樹之を龍宮より將來すといへり。(此の龍宮に就ての研究は、前章既に詳述せる所なり)斯かる傳説は古來學者の云爲する所なるが、吾人の見を以てする時は、佛教中、或は一經にして浩瀚なるもの、又は一括して大集せるものあり。現に法華聖典の如きも、吾人の見を以てすれば、或は八品中、必ずしも當初結集せるものには非ず、彼の觀音經の如き、當初單行のものなりしならむ。即ち今華嚴聖典の如きも、最初多くは斷片的のものなりしを、後來上足

の人々が、大成せしものにはあらざるか。即ち現に八十華嚴の三十九品中僅に『阿僧祇品』と『如來隨好光明功德品』とのみ、佛陀の自説にして、其餘は皆門下の賢哲に託して説かしめ、後に至りて結集大成せしものなることは疑ふべくもあらず。現に華嚴聖典の原本が、方今僅かに普賢行願品のみ存するに過ぎず、殊に又疑念を狭むとすれば、佛陀大悟の第一聲なるが、而かも之を佛陀の滅後より、龍樹に至る間、華嚴聖典の存在を疑ふものもあり。而して是等の説は、龍樹が佛陀の遺教を研究し、其の思索の向上するに従つて、遂に自ら龍宮より將來せしとして、高遠なる思想を、佛陀の説法に擬せしものとせり、然れども、是等の説は吾人の従ふことを得ざる所なり。

(二)

是より進んで聖典の内容に就き、逐次研究せんとするに先ち、此に佛陀が如何なる希望と目的とを懷きて出家せしや、又この聖典が、佛陀出世の本懐として、如何なる地位に在るものなりやに就て一言し、次に又この聖典は、其の哲學として、又其の宗教として、如何なる教義を含有せるかに就て、聊か論ずる所あらんとす。



元來、佛陀が出家求道の沙門となりし本懐については、古來の學者は、佛陀の聖智は、早く既に上古の印度に於ける吠陀の神話、及び優婆塞尼沙土の哲學等に顯はれたる思想信仰を攻究し、遂に生、老、病、死の苦惱を解脱せんとするに在りと論ぜり。然れども、今吾人の見る所を以てすれば、蓋し佛陀の究竟目的は、必ずしも生、老、病、死を解脱するのみにあらずるべし。實に佛陀の如き大天才は、何ぞ佛陀以前の印度思想の氣風を帶ぶる四諦の苦を解脱するがごとき、消極的目的の成就を以て足れりとするものならんや。想ふに、佛陀の苦行六年の思惟は、この有限相對の現世を超出して、無限絕對の最高至上者と合一するを以て窮極の目的とせざるなり。換言せば、現實的肉身の一沙門たる釋尊が、理想的常住の法身佛たらんと欲したるなり。否、彼れの思惟と希望は、現身の釋迦が法身の佛と合一調和せんと欲せしのみならず、彼れは宇宙の實在即ち普遍的法身の本體が、釋尊其れ自身なることを自覺するに在りしなり。

抑も現世に於ける釋尊は、他日高貴なる王位を繼承し、萬衆の上に君臨すべき太子たるの身にして、而かも其の富も亦他に併ぶものなく、花の如き三千の美姬は、互

に寵を争ふて媚を呈し、肉慾的歡樂を恣にせんとするも心の儘なりしなり。斯の如く其の富貴、其の名譽、又其の肉的快乐を併有せるにも拘はらず、而かも遂に之を棄て、蹴然王宮を出でたる後は、見るも哀れなる一沙門として、孤影孑々、深山に分け入りて、而かもあらゆる艱苦と戦ひ、沈思冥想の結果豁然として大悟せし大真理は、全世界中、最も優勝にして、而かも最も崇高なる教義なり。而して此の如く釋尊が、この大悟界に入りし徑路に就ては、印度の詩人宗教家は、或は之を詩的に讚嘆して華麗莊麗を極め、或は之を哲學的に稱揚して崇高美妙を盡せり。而してこの讚嘆稱揚の中、其の最も真相を道破したるものは、即ち華嚴聖典にてありしなり。

佛陀が始成正覺の劈頭、即ち其の六年思惟の後に得たる結果を、華嚴聖典に於ける真理觀に吐露せし時、上足の普賢文殊等の大智大才を以てすら、到底華嚴の深理を窺知すること能はず、恰も啞の如く聾の如くなるに及んで、佛陀は已むことを得ず、遂に其の思索を向下して、阿含、方等の如き、卑近なる説法を以てするに至れり。即ち之を近き例を引て云ふ時は、最高の學府たる帝國大學の教授にして、彼の幼稚園の小兒に向ひて、深遠なる學理の講義を試むると同じく、決して其の徹底せざる



は論を俟たざる所なり。是れ即ち其の所説の餘りに廣大にして、又餘りに崇高なりしが爲めなり。而かも佛陀は更に四十餘年の間、廣長舌を揮ひつゝある中に、時あつてまゝ華嚴の眞理をほのめかすことのありしかど、其は唯隱微の間に止りしが、終に涅槃の雲に入らんとするに及びて、當初の理想たる華嚴の眞理の一部を法華聖典中に表示せるなり。法華聖典の眞理觀が、華嚴聖典の眞理觀の一部を含有せることに就ては、吾人嘗て『華嚴教と天台教との契合點』と題して、一論文を草したることあり、猶ほ本研究論文の末に至り、再論すべければ、此には論ぜざるも、彼の台家の學者戒環、曾て其の著『法華要解』に、華嚴と法華の二聖典に於ける契合點を論ぜり、即ち譯述すれば左の如し。

經を解するに科あり、教を判するに宗あり、禾の科ありて以て、其の苞本を容るゝが如く、水の宗ありて以て、其の支流を會するが如し、曾て謂はく、華嚴、法華は蓋し一宗なり、何を以てか之を明すとならば、夫れ法王、運に應じて眞を出す、兆聖唯一事の爲めにして、餘乗あること無し、是を以て首め華嚴を唱へ、特に頓法を明かす、根鈍を知ると雖も、且らく本懷に稱ふ、大に怖れて昏惑するに及んで、乃ち權りに

方宜を設く、衆志貞純なるに至つて、則ち還て實法を示す、然らば則ち二經、一は始一は終、實に相資發す、故に今華嚴を宗として科解するなり、或人謂く、華嚴は純ら實性を談じ、獨り大機に被る、法華は權を引て實に入り、三根齊しく被る、二經の旨趣、迥かに相及ばず、彼を引て此を釋す、殆ど宗を知らずと、愚竊かに信解品を觀るに、其の父先よりこのかた、子を求むるに得ず、中より一城に止る、其の家大に富めり、窮子遙かに見て、恐怖して疾く走るといふは、正に初めに華嚴を説きたまふに喩る也、臨終に子に命じて、財物を委付す、窮子歡喜して大寶藏を得るといふは、正に終りに法華を説きたまふに喩る也。此に述して之を觀るに、始めは驚怖し、終りには親附する者異父なし、窮して辨る所達して獲る所の者異寶なし、既に以て異なることなし、何ぞ之を宗とすべからざらんや、又況んや二經、智を以て體を立て、行を以て徳を成し、光を放て瑞を現じ、法界の眞機を全うし、因を融し、果を會して、修證の捷徑を開くをや、凡そ設くる所の法、意緒併び同じ、二經相宗とすること亦見るに足れり、聖人の説法は、始終一貫、果して唯一事にして、餘乗あること無し、と、戒環の此の論は、華嚴と法華との眞理觀を合一せるものと論斷せり、是れ悉く是



認すべからざるも此の二聖典の契合點の存するの證左とすべきなり。而して佛陀説法の最高至上たる華嚴聖典の内容は如何、即ち此の大宇宙を玲瓏たる白玉の如き美の表顯と觀、而して此の大宇宙大法界は無限絶對なる法身の顯現なれば、吾人の常識を以て差別する善惡美醜を超越し、宛然天際に聳ゆる水晶山の如く、又大空に轟立せる大靈像にも似て、實に崇高にして、且つ尊嚴なれば、此間に小常識的善惡美醜の差別を容さず、最高善、最高美の結晶體なり。是れ華嚴聖典が餘りに高大深遠にして、到底人間と沒交渉なるものとせられし所以なりとす。而して佛陀が、此の如き大哲理を道破したるは、始成正覺の現身たる肉身の釋尊なりしも、其の實全く無限絶對なる法身佛の、久遠に於ける説法たるなり。此の間の消息を、清涼の證觀は曰ふ、

十佛法界の身雲、因陀羅網無盡の時處を以て、念々初々、物の爲めに現して、主伴を具足し、三世間を攝す、此の初は即ち無量劫の初、無際之初を攝し、一成一切成、無成無不成、一覺一切覺、無覺無不覺にして、言窮り假名を壞せず、故に始成正覺と云ふ。と、其の始成正覺の久遠なることを論じ、更に澄觀は

一成一切成とは、事々無礙なるが故、故に如來出現品に云く、如來正覺を成ずる時、其の身中に於て、普く一切衆生の成、正覺を見るが故に、如來の成は即ち衆生の成なり、況んや佛々平等にして一切成佛す、又一處成に於て、即ち一切の處成ず。故に十地の中に第十願に云く、願くば一切世界に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成ず、一毛端の處を離れず、一切毛端の處に於て、皆悉く示現する等、又云く、此の處に於て佛坐を見るが如く、一切塵中も亦是くの如し、佛身無去亦た無來、所有の國土皆明かに現る等、無成不成の義、前疏に異らず。一覺一切覺とは、若し一法を覺れば、一法の中に一切具足す、無覺とは所覺を覺ることを遠離するが故に。無不覺とは朗鑑懷に在り、亦た不覺相を存せざるが故に、餘は知んぬ可し。

と、佛陀は三十の成道より、八十の入滅に至るまで、説法三昧に眞理を唱道せしと雖も、實は是れ一個肉體の現身佛には非ずして、久遠實成の法身佛の説法たりしなり。之を以て現身佛の大説法そのまゝが法身毘盧の顯現となり、斯くて佛陀は古今を超越し、有無を離絶し、法界即法身の立場に合一調和せしものにして、華嚴を説くと同時に、法界と法身を合一せしのみならず、無始無終の大眞理を、唯方便上、且らく現



身佛として華嚴聖典の上に詮はしたるものなりとす。

(三)

既に述べし如く、華嚴聖典は、釋迦文佛が始成正覺の曉に於て、最初の說法として道破せる、いはゆる自内證、隨自意の眞現觀なれば、其の教理の最高至上の地位を占むることは、論を俟たざる所なり。是を以てこの深遠廣大なる聖典の地位を賢首大師は、其の著、探玄記の初に於て、斯の如く讚美せり、曰く

華嚴經者、斯乃集海會之盛談、照山王之極說、理智宏遠、盡法界、而互眞源、浩瀚微言、等虛空、而被塵國、於是無虧大小、潛巨利、以入毫端、未易鴻纖、融極微、以周法界、故以因陀羅網、參互影而重重、錠炎頗黎、照塵方而隱隱、一卽多而無礙、多卽一而圓通、攝九世以入刹那、舒一念而該永劫、

と、今夫れ吾人の棲息する人間界に於て、最も廣大深遠にして、他に比類なきものを形容するに當りては、人皆之を必ず高山に比し、若しくば、大海を藉り來りて、其の雄大を表示するを例とす。今また華嚴の法門が、廣大深遠なるが故に、茲に高山と大海とを借り來りて形容するなり。乃ち、賢首の意に従へば、日出でて先づ高山を照

すが如く、本聖典が佛陀が正覺の最初に、普賢文殊等の上智に對して説かれし佛陀一代經中の、最高地位を占むるの教理なり。

斯くの如く、此聖典は、佛教の根本法輪にして、他の諸經典に秀出せることは、論を俟たざる所とす。今夫れ吾人が、一文を草し、一論を作らんとするに當りては、必ず沈思冥想、靜かに考察するを例とす。佛陀も亦其の大悟界を示現するに先ち、所謂海印定中に入りて、而して後說法せられたるなり、乃ちこれを海印三昧と稱せり。而して此の海印三昧に就て順序として一言すべき要あり。

夫れ海印三昧とは、實に高遠なる眞理觀を具有するものにして、一度此の觀念に入る時は、宇宙の森羅萬象、前後左右の差別なく、同時に顯現して、寸毫も此の觀念中に洩るゝものなし。即ち縦に時間を極め、横に空間を盡し、其の姿は、宛も大海の風波、頓に靜平に歸し、海水は玲瓏玉の如く、而して彼の高く滿天に懸る月華、星彩の燦然として、海水に映現するが如く、佛陀の大心海も、亦寸毫の雜念なく、湛然清澄、玲瓏として天地法界、悉く其の心中に印現せざるはなし。此の間の消息を、六十華嚴の賢首菩薩品に於て、



一切示現無有餘。海印三昧勢力故。  
と云ひ、而して法藏師は、探玄記に於て之を釋して、

海印者、從喻爲名、如修羅四兵、列在空中、於大海內、印現其像、菩薩定心、猶如大海應機現異、如彼兵像、故大集經第十四云、喻如閻浮提一切衆生身及餘外色、如是等色海中、皆有印像、以是故名大海印、菩薩亦復如是、得大海印三昧、已能分別、見一切衆生心行、於一切法門、皆得慧明、是爲菩薩得海印三昧、見一切衆生心行所趣、  
と云ひ、而してまた八十華嚴の十行品中には、

安住甚深大海、善能印定一切法。

と讚美し、又同十廻向品の中に、佛陀說法の廣大なるを稱揚し來りて、

辯才演說徧世間、譬如大海無窮盡。

菩薩安住諸三昧、一切所行皆具足。

と云ひ、更に又、同如來出現品には、

譬如日光出現時、先照山王次餘山。

後照高山及大地、而日未始有分別。

と云へり、是れ此の聖典は、佛陀の説きたる聖典中の最高位にありて、佛陀稱性の本經と嘆美する所以なり。猶又この海印三昧に就ては、新羅の明品は、華嚴海印三昧論を著はし、海印三昧觀の華嚴經十地品中より出で、其の觀念の高妙深奥なることを讚せり、學者同論に就て之を詳にせよ。吾人は茲に華嚴教の他の諸教より秀出し、又各宗派の教理が、何れも皆源を此に發せることを一言し、此の論を終り、而して一經の全體に就て論述せんとす。

華嚴聖典は宗教として他の諸宗に超出し、又諸宗の眞理觀も華嚴の教理中に存せることは、古來學者の認容する所なり。華嚴の深理たる唯心緣起の法門は、佛陀の滅後、馬鳴論士に依りて、其の一班は道破せられ、而して龍樹論士其の後を承けて組織的分析的に論述し、後、支那に至りて、支那に於ける華嚴の初祖杜順禪師之を傳播せり。乃ち杜順師は、佛陀の一代教を五門に分類し、五教止觀を著はして、次の如く立てたり。

(一)法有無我門(小乘教)

(二)生即無生門(大乘始教)



- (三) 事理圓融門(大乘終教)
- (四) 語觀雙絕門(大乘頓教)
- (五) 華嚴三昧門(一乘圓教)

此の區別に就ては、後章に至りて詳述すべし。而して賢首大師は、更に此の五教の順序に、多少の色彩を加へて、其の著游心法界記に於て次の如く分立せり。

(一) 法是我非門……(即愚法小乘三科法也、如四阿含等經、及毘曇成實、俱舍、婆沙等論明也、)

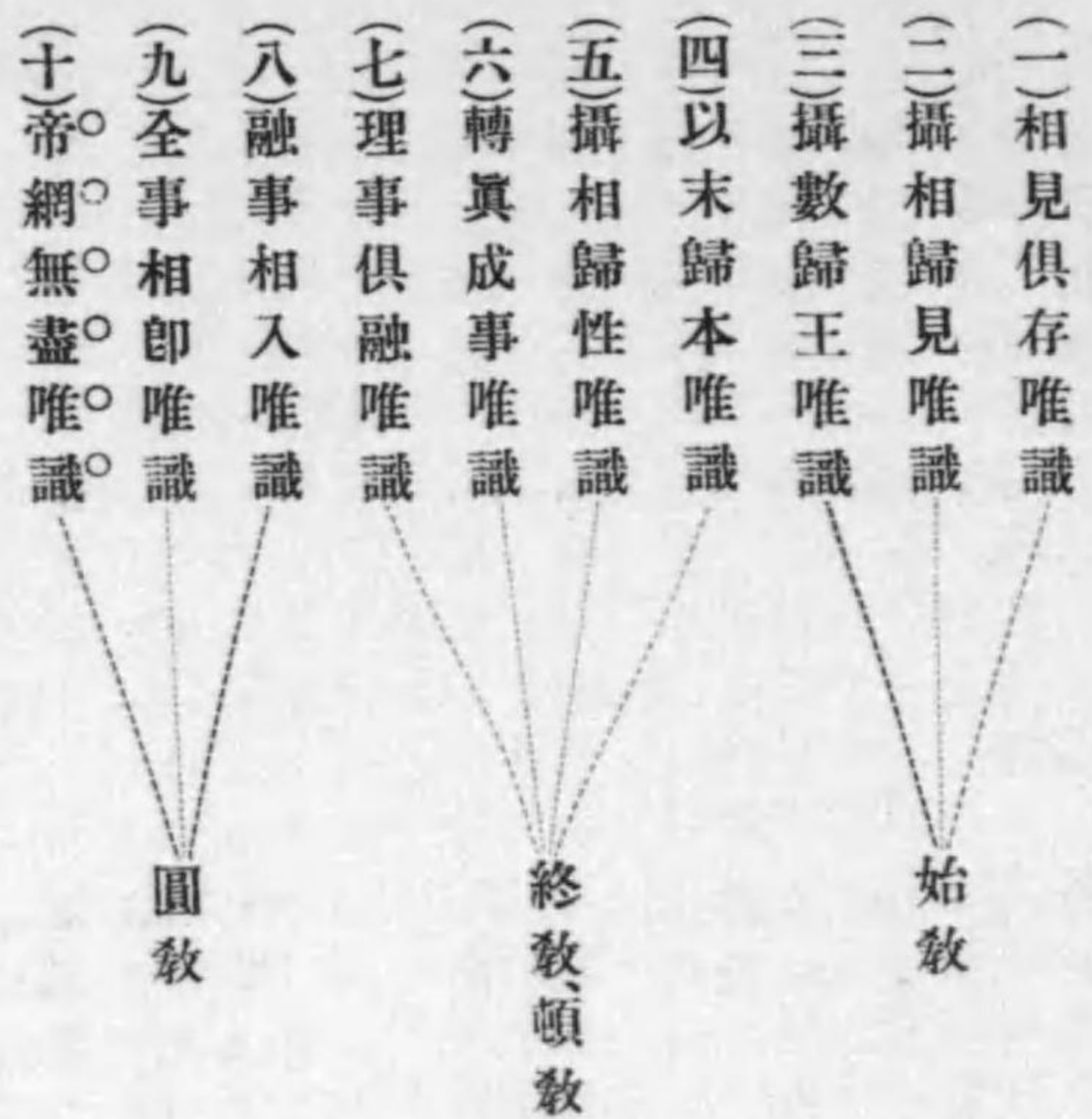
(二) 緣生無性門……(即大乘初教、即前諸法緣生無性也、如諸部船若等經及中百論等明也、)

(三) 事理混融門……(即大乘終教、空有雙陳、無障礙也、如勝鬘諸法無行、涅槃、密嚴等經及起信論、法界無差別等論明也、)

(四) 言盡理顯門……(即大乘頓教、離相離性也、如楞伽、維摩、思益等經明也、)

(五) 法界無礙門……(即別教一乘、奮興法界、主伴統絡、逆順無礙也、如華嚴等經明也、) 而して又、法藏師は、探玄記に於て、この五教に更に十種の唯識を開きて、左の如く分

立せり。



この十種の唯識に就ても、亦後章に於て詳述すべし。

次に又澄觀師に至り、この五教を五種の唯心説に分類して、左の如く云へり。

(一) 小乘諸教 → 假立一心



- (二)大乘始教……………異熟賴耶一心
- (三)大乘終教……………如來藏性一心
- (四)大乘頓教……………泯絕無寄一心
- (五)大乘圓教……………總該萬有一心

次に宗密師は更にこの五教に、五種を加へて、十種の唯心説を開けり。曰く

- (一)假 說一心……………小乘
- (二)相見俱存一心……………始教
- (三)攝相歸見一心……………始教
- (四)攝所歸王一心……………終教
- (五)攝末歸本一心……………終教
- (六)攝相歸性一心……………頓教
- (七)染淨泯絕一心……………頓教
- (八)融事相入一心……………圓教
- (九)融事相即一心……………圓教
- (十)帝網無盡一心……………圓教

以上澄觀、宗密二師の唯心説についても、後章に詳述すべし。想ふに佛陀の一代に於ける説法を、後の學者が、各々、其の見識を以て區別し、而してその立論に於て、多少の差異を來せるは、蓋しその時代に於ける他の宗教、又は他の哲學的思潮に反抗せんが爲め、或は又之を調和せしめんが爲めに、その立論を異にしたものと思はる。是等の説明に依れば、佛教に於ける各派の立論は、五教を以て概括するを得べし。乃ち華嚴聖典に於て説く所の、性起趣入は、彼の佛心宗の基因をなせるなり。而して華嚴の三密加持陀羅尼の眞理觀は、宗教の教理を生じたるなるべく。又唯心縁起の、法相宗に於ける。十地論所説の三種の浮戒は、律宗の基をなしたるなり。又如は無相、及び十不十無の深理は、三論宗の無得皆空、竝に入不中道の起因をなしたるべく。華嚴の壽量品に於ける、彌陀の佛國、又は十住毘婆沙論の難行品及び易行品は、淨土教の生じたる淵源ならむ。また法華宗、即ち台家の諸法實相は、源を華嚴の實相空より發したるには、あらざるか。此の如く、佛教に於ける各宗の眞理觀が、何れも皆源を華嚴に發したるは、疑ふの餘地なきなり。吾人は是より是の聖典の哲學的價值を始め、其の教理の全體に互り章を追ひて論述せんと欲するなり。



佛陀が古印度に於ける、哲學及び宗教を潛心研鑽せし結果、遂に深遠廣大なる真理觀を道破したるもの、即ち佛教にして、古來幾多の哲學及び宗教の中に於て、最も秀出せるを認むべし。是の如く、我佛教は、哲學としても、深遠高遠にして東西諸派の哲學の上に位し。また宗教としても、古今の宗教的真理觀を超越し、最も權威あり、又最も尊嚴なる、唯一絶対の聖典なり。

抑も哲學なるものは、常に懷疑の上に立ちて真理を探究し、宇宙人生の歸結を表明するものなり。而して宗教は、各學術の上に超出して、至高至美なる宇宙の實在たる神を憧憬し、此の信仰に依て無限絶対なる真理を自覺するものなり。此の如く、哲學は懷疑に據つて真理を探究し。宗教は又信仰に依つて真理を自覺するものなれば、其の徑路は自から異なる如く見ゆるも、純正なる宗教、即ち華嚴聖典に顯はれたる宗教觀の如き、他の宗教の如く非學術的に、迷信によりて或るものを直觀するにあらざりて、廣大にして、精微なる哲學的教相を設立し、以て向上進修の徑路を開きて、真理の大原故郷に到着せしむるなり。是を以て華嚴聖典の如きは、之を

哲學的に研究するも、其の高遠なる真理觀を玩味すべく、之を宗教的に探尋するも、亦其の深大なる真理觀を咀嚼して盡きざるを見る。吾人は斯かる哲學的にも、將た宗教的にも高遠なる唯一絶対の真理を有する教理に向つて邁進し、以て有終の美果を獲得せずんば止まざるものなり。

古來の學者は、此の聖典を除りに詩的に、又餘りに神秘的にのみ玩索考究して、銳意華嚴聖典の哲學的研究を遂げし者の罕なりしを遺憾とするなり。而して稀に此れに類するものありと雖も、其の研究法は甚だ煩瑣にして、而かも其の不秩序なること言語に絶せり。即ち吾人は吾人の研究の徑路に據りて、追次此の方面の論究に進まんとす。

夫の西洋に於ける宗教は、其の數渺からずとするも、先づ基督教を以て最も勢力の廣、且つ大なるものとすべし。然るに其の基督教も、原始時代の教理にありては、頗る單純なるものにして、毫も哲學的價値の認むべきものなきを以て、從來多くの神學者、哲學者又は倫理學等に依て、其的研究的所信を、直に神の觀念に歸せしめたる結果、遂に今日の如く進歩したる一大宗教を形成するに至れるものとす。更に



支那に於ける儒教に就て見るも同じく、孔子が始め其の所思を敷行せるは明かに形而下の學理にして、即ち修身、齊家、治國、平天下を標榜し、努めて形而上の空想的論斷に亙らざらんことを期せり。(尤も中庸、易經等に於て形而上の深理を説けども)然るに佛教に在りては如何、釋迦佛陀が最初の説法より、高尚深遠なる真理を説き或は生死の大事を問題とし、宇宙の默示を對象として、無上至高の獅子吼を爲せるものなり。此の教理の支那に入るや、宋朝に當りては、程朱等の大儒出でて、形而下的原始の儒教を、形而上的に之を攻究し、遂に之れに哲學的價値と宗教的生命を併領せしむるに臻れり。此くの如く、佛教は世界の宗教中、最も古き歴史を有せる、廣大無邊の眞宗教として其の勢力の冠たるは、世界を通じて一般的定論となれるものにして、遂に此の影響は、基督教の改革に及びたるものなり。而して今日の佛教は之を宗教としても、亦哲學としても、各宗各派其の教義宣傳の方便は、専ら卑近より高遠に、人事的より宇宙的に漸進すべき性質を有せり。然りと雖も、こは吾人の認めて必ずしも最善の方法と爲すべきものには非ずして、當初釋迦文佛が、最高の眞理觀として發露せられたる華嚴聖典が、直に覺了せらるゝにも至らんか、吾人は

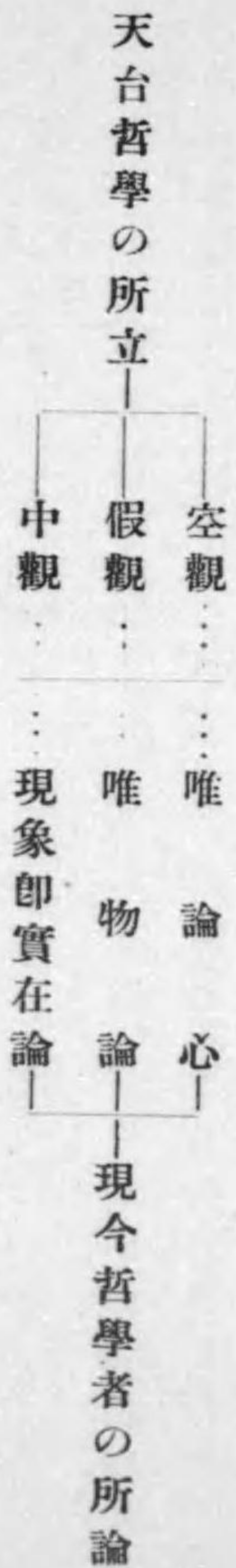
非常なる法悅と絶大なる讚美を得べきや必せり。即ち華嚴聖典は此の如くして、佛陀の眞面目を描出し、一大理想境を顯現せるものとすれば、之を要するに、哲學として他に比類なく、宗教としての最尊至上のものたり。而して今且らく言句に假りて聊か其の哲學的價値を窺知せんとするに、夫の泰西哲學の教ふる所に觀念論と實在論の二様あるが如く、吾が佛教にも空觀(唯心論)と有觀(唯物論)の二大潮流ありて、同時に實相論と縁起論の對立するあり。即ち宇宙萬象を、或は空間的に考察し、或は又時間的に攻究して、遂に深淺厚狭の差異錯綜すと雖も、一は即ち本體他は即ち現象の大別に區劃せらるゝものなり。而して更に本體即現象、現象即本體の歸納的宇宙觀も、顯はるゝに至りて、此の宇宙觀的哲學論は、又倫理的にも説明せらるるに至れるなり。

吾人は茲に現象即本體論につき、暫らく天台と三論の平等實相論を一瞥せんとす。抑も天台哲學の如き又三論哲學の如き、性惡の實有を説くと同時に、性德の實有を説くなり。斯かる説より見れば、吾人が假に善と稱するものも實相なりとすると共に、其の正反なる惡と稱するものも亦實相といふべく、或は美と現はるゝも



實相なれば醜と現はるゝも實相にして、畢竟此の宇宙は平等にして、其のまゝに、歴々分明たるべきものにして、歴々分明なるがまゝを空して、至高至美なる大涅槃の境地に到達せんことに努むるものなり。こは三論の説明に天台の色彩を加味したるが如きものにして、詳くは、別に論述すべき天台智者大師が其の大著三大部に於て、法華聖典を根本として、天台學を建立せる中に、華嚴の哲理と天台の哲理を對照せる條章に就て知るべし。前述の如く天台又は三論の如く、惡も實相善も實相、醜も實相、美も實相、大空に皓々たる明月の懸るも實相なれば、黒雲暗澹として忽ち明を覆ふも亦實相なり。美はしき花の香りも實相なれば、その花を蝕する醜なる蟲も亦實相なり。此くの如く宇宙の平等實相を説きて、而かも惡を排し、醜を斥けて、善美の大悟界に入るとするなり。然るに華嚴の哲理に在りては、此くの如く、觀察するに非ずして、最初より宇宙萬有を玲瓏たる明鏡の如く思惟し、其の間に於ける小なる事象、即ち例へば吾人の意識に生ずる差別的階級的の一切に對しては、何等願慮する所なく、之を約言すれば、華嚴の哲理は超倫理的ともいふべくして、極めて高妙なる教理とする所以なり。吾人は現今哲學者の間に唱道せられつゝある、

彼の唯心唯物の二原論を超越せる、圓融實在論、即ち現象即實在論と我が佛教に於ける圓融實在觀とを比較對照するの要あれども、今佛教各派の所説を列擧するは繁雜に涉るの悞あれば、佛教中其の教相學の精微を誇れる台家の三觀論を抽出し而して其の上に、華嚴哲學の四法界を對照し、以て其の勝劣深淺を見んと欲するなり。



右の如く、天台哲學所立の空觀は、即ち現今哲學者所論の唯心論にして。又台家の假觀は、即ち哲學者の所謂唯物論たり。而して又台家所立の中觀は、即ち哲學者の所謂現象即實在論と同一なるを見るべし。是の如く、現今哲學者間に唱へられつゝある哲學論は、實に台家所立の哲學觀と殆ど、其の歸趣を同しうせるを見るべし。然るに我が華嚴の哲理に至りては、宇宙を唯物(事法界)唯心(理法界)の二原より論究し、而して又之を打つて一團としたる現象即實在論(理事無礙法界)をも説明す



れど、更に又其の上に事無礙法界(周徧含容觀)換言すれば現象即現象論を唱道するなり。是れ華嚴哲學が古今東西の哲學より秀出して、最も高遠なる所以なり。即ち今天台哲學所談の三觀論と、普通哲學者の所論と、華嚴哲學の四法界觀とを比較對照し、又其の勝劣を見んとす。

(華嚴哲學所立)

(天台哲學所立)

(普通哲學者所論)



右の四法界觀は、支那に於ける華嚴の始祖杜順師は、最初に真空、理事無礙、周徧含容の三重觀を立て、高妙なる宇宙觀を説明せしむ。法藏等の大賢に至りて、更に事法界を加へて、四法界觀を唱道せり。即ち華嚴の事法界觀は、台家の假觀と、哲學者所論の唯物論に當り。又華嚴の理事無礙法界觀は、台家の中觀と、哲學者所論の現象即實在論に當り。此の如く、華嚴の哲理は、佛教の中に在りて、最も高遠なる真理觀を説く

天台哲學及び現今の普通學者の説く所の哲理よりも、更に秀出せるを見るを得べし。凡そ吾人が現象と云ひ、實在と云ふも、畢竟詮詰むれば、吾人の一概念に過ぎずして、吾人は宇宙の實在及び萬有を對望して、主觀客觀の二方面によりて、認識なるものを生じ、而して認識そのものが實在せるを知らざるべからず。されば現象の一物、例せば吾人の個體が即ち實在にして、而してこの個體には、事も理も共に具有し居るなり。今夫れ一微塵と雖も、宇宙の實在なれば、一微塵中にも宇宙全體に於ける理事を具有す。今彼の大海の水一滴を指頭に付すれば、其の一滴の水中に、大海の水全體が存在せるなり。今之を數學上より考察するに、一の數を離れて、十も千も萬もなく、一の中には十、千、萬の數が存在するを知るべし。古來の哲學者が唯物、唯心の二元論を主張せるも、其の間に矛盾撞着を來たせるを見て、現今の哲學者は、この二元論を打つて一丸とし、現象即實在論を道破するに至れるなり、即ち天台哲學の中道觀と、其の歸趣を同しうせるを見る。然るに華嚴の哲學は、今述ぶるが如く、天台哲學及び現今の哲學者の所論より、其の高く秀出せるを見るべきなり。

(五)



余はこれより進んで華嚴聖典が如何に哲學的價值を有するかを推論せんとするに當り、先づこゝに一言せざるべからざるものあり。余は過般宗教家及び哲學者の會合に臨みし時、法華經專攻の一宗教家あり、余に語つて曰く、『余は平素法華聖典を研究し、又深く信奉する者なるが、頃日偶々華嚴聖典を繙くこと數次、而してその教理の深遠にして、實に宇宙第一の聖典たるべきを知れり、華嚴聖典中、其の入法界品に於ける善財童子が、五十三の聖哲を歴訪する所の如き、之を文章として觀るも、又哲學的考證として扱ふも、其の巧妙なるを感じたり。凡て法華經にせよ、華嚴經にせよ、其の教理は極めて高尚深大なる哲理を含有するものなれば、普通の見解にては、到底これを解することの不可能なるを知るべし、即ち法華聖典の如きは、彼の一代の學者天台の智者大師の如き、之を理想的に解釋したれども、實行の方面には、極めて疎なる傾向あり。然るに我が日蓮上人の如きも、此法華聖典を解釋するに、比較的に實行的方面に密にして、哲學的方面に疎なりしなり。故に彼は、法華經の眞理をして、普く社會の群衆に實行せしめんとしたり、之を單に表面より觀れば、淺薄なるが如くなるも、其の中、自ら高遠なる哲學的色彩を帶ばしめ、一方には平易

なる教理を普及せしめて、比較的知識の淺薄なるものを救済し、一方には深遠なる教理を説きて、智識の發達せるものを導かんとしたり。これに反して、華嚴の教理は深大高妙なるに拘はらず、今日に至るまで、支那及び日本の學者は、たゞ其の高妙なる教理のみを研究して、實行的方面を疎外せり、これ宗教の價值と云へるものを忘れたるなり。印度は姑らく措いて問はず、支那に於ても、日本に於ても、この實行的方面を放擲して、哲學的空論を以て根本とせり、故に宗教としては、其の存在を認められず、是れ斯の宗教の爲めに惜しむ所なり。而して子が多年華嚴聖典の研究に潛心し、これを學界に廣むることに努力せらるゝは、甚だ喜ぶべしと雖も、これを單に日本國に弘布するのみならず、之を世界に弘布し、普く人類を救済するに努力し、須らく單に其の教理の深遠なるを誇るに止めず、これが實行的方面にも擴張を圖らざるべからず、我國に於ても明惠上人の如き、これが實行方面に志させしには非ずと雖も、その人格は餘りに溫和に過ぎ、僅に高貴の人に歸依せしめたるに過ぎず、下層の人は其の教理を解し得ざりしなり。切に乞ふ子もまた、その教理の深遠高尚なるを喜ぶに止まらず、之れが實行的方面にも努力せられよ』と。斯の學者の



言の如き、洵に傾聴に價するものありと雖も、然れども、吾人は思ふ、凡そ純正なる哲學的宗教の眞價は、その世俗的實行の伴はざる處に存在するものなりと、故に吾人は此の見地に立ちて、研究せんと欲するなり。

吾人は華嚴の教理を説く上に、二個の解釋の存するを思ふ、即ちその一は、純正なる宗教の眞價は實行の伴はざる處にあり、換言せば吾人認識の對象を超越したる至高無上なる實在としての邊に存在すとす、是れなり。凡そ識見の高遠なる者は、其の實行に於て甚だ疎なり、看よ古より大宗、教育家、大哲學者の世俗的實務に於て疎なりしを。深く此の間の消息を解せずして、漫に空論を排して、實行を叫ぶ者は、現實以上に超絶せる理想世界の實在を認識し、これが實現に努力したる、純潔高朗なる事業家を排し、唯地上の權勢を迎合し、富貴、名譽、逸樂を貪らんが爲めに狂奔せる者を讚美するものなり。故に哲學上宗教上に於ける空論の價値は、現實世界の常識的實行に伴はざる處に存在するなり、若し常識的實行を以て釋迦、孔子、耶穌、蘇克刺底、若しくは斯比諾薩、韓圖、馬鳴、龍樹等の聖賢を觀んか、實に平凡なる小科學者にも如かるざるなり。

想ふに哲學的宗教的空觀の價値の尊嚴なるは、宛かも國家に於ける帝王の如し、今夫れ茲に一帝國を形成せんに、其帝王は、總ての上に出出して、國家統治の權を有して萬機を總攬し、國務大臣以下をして各自に其職任を盡さしむるものとす。恰も華嚴の教理は國家に於ける帝王の如くにして、其の實行の伴はざる所に、尊嚴と權威を有するなり、彼の天台、真言の中宗の如き、又俱舍、成實、法相、三論等の有空諸宗の如き、皆源を華嚴に發し。又一方實行の方面に優れたりとする禪淨及び日蓮宗の如きも、皆源を華嚴の教理より發出せるを見る。即ち如上の各宗各派は華嚴の哲理を部分的に實行しつゝ、あるのみ、是れ華嚴の教理が先きに所謂帝王の尊に居るにも譬へつべきものにして、その教理と實行と兩方面に於て、これを行はしめつゝあることを立證するに餘りあり。斯くの如くにして、猶華嚴は空論のみに失するものとするは、或は華嚴の教理の一面を見たる偏見にはあらざるか。華嚴の教理は、常に前述の如く、あらゆる佛教の諸派の上に秀出せるのみならず、これを西洋の哲學宗教に比するも、優に上位を占むるは、吾人の前に既に其の大要を示せる所なり。



猶又華嚴の教理が、佛陀一代の教理中に在りて、最も超絶せることは、余輩の獨斷的私言にあらざりて、古來佛教の學者の輿論たりしなり。近時一學者あり論じて曰く、佛教の哲理は天台に至りてその極度に達せり、而してこの天台以外の哲理を統合し、更に高尚深遠なる哲理を稱ふるものは華嚴なり。而して天台は之を西洋の哲學に比較するに、或る點に於て同一ならざるも、猶比較し得れども、華嚴の哲理に至つては、西洋哲學に比較し得べきものなしと、是れ吾等と其の見を同じうするものなり。然れども、同學者は華嚴の教理を推賞すると同時に、更らに語をついで眞言の教理を推賞して、華嚴聖典は、かくの如く佛教の哲理中、最も優勝の地歩を占ると雖も、眞言の教理は、更にその上に一步を進めたるものなり、彼の華嚴天台の二教は、釋迦佛陀が、一般的衆生に對して説明したるものなるが故に、その人々の知識の度に應じたるなれば、充分に佛陀の眞意を顯はし得ざりて、これに比して、佛陀が、殆んど自己と知識の進歩の點に於いて、同一位に居るべきものに對して述べたる教理は、即ち眞言なり、是れ唯佛與佛の教理にして、最も價値あるものならずや、此の如く眞言は顯密二教の眞理を立て、顯は卑俗なる衆生に對し、而して密は自己

と同地位の佛に對する說法なれば、眞言の教理こそ最も佛教の絶頂に達したる者なりと。是れ畢竟深く華嚴の教理を究めずして、古來二三の學者の説を引用したるに過ぎざるなり。既に述ぶるが如く、佛陀が六年思惟の上、大悟せるそのまゝを説きたるものが華嚴の教理にして、決して論者の云ふが如き、衆生の智識の度に應じて説きたるものが華嚴にはあらざるなり。彼の眞言の如き華嚴哲學の一部を襲用し、而して學術的にその説明し得ざる部分を、こは祕密教なりと稱して顯説することを避けたり、これ畢竟哲學的推理を逃がれんとする手段に過ぎざるものとす。

抑も佛教に於ける哲學的教相判釋は、最初佛陀が、印度最古より傳來せる哲學及び宗教に、其の思想を鍛練し、一大教理を成立したるものにして、佛陀が最初の大眞理を説きし時は、上足の弟子もこれを解し能はざるにより、其の知識を降下して、卑近なる説明をなしたるものとす。由來佛陀の在世中、佛陀の説教を聴くも、唯之を記憶に存し、最も簡單なる佛陀の格言戒條を誦するに止まりて、別に典籍として傳はりしに、あらず、佛滅後多くの遺弟が、佛陀を仰鑽景慕の餘り、佛の聖語及び簡潔な



る聖文を結集し、遂には上座部、大衆部の二派に分れ、後世分派の形勢の發達するに伴ひ、今日の姿となりしも、印度に於ける教相判釋の競争は激げしからざりしも、支那に入るに及んで、教相判釋の争は激甚となり、互に自ら信奉する所を以て勝れりとし、他を卑しとして相争ふに至れるものとす。彼の大賢智者大師の如きは、釋迦文佛一代の説法を四教に分ちて、これに種々の教相判釋を試み、以て法華聖典の一代經典中に最も優れたる所以を説きたり。其の後百年を経て華嚴の賢首大師出でて、賢首以前に杜順、智儼の二師五教の判釋を試みたり、更に五教を立て、教相判釋を巧みにせり。こは本と、自己の信ずる教理に忠なる性情の然らしむる所に於て、怪しむに足らず。そは兎も角も、華嚴の哲理の如きは、教相判釋に據らざるも、自から尊嚴無比なるものとす。故に余は華嚴の哲理を左の如く區別し得るものと信ずるなり。

(佛敎の根本思想) 華嚴哲學



此の如く、余は佛陀の道破せし佛敎の根本思想は、其の最初の説法たる華嚴の教理に抱容せらるゝものと信ずるが故に、此の分類につき、聊か論辯せむとす。

(一六)

凡そ宇宙間に森々星羅する、一切の事物を觀察するに、圓融と行布、即ち平等と差別の二方面を具備せざるものなし。今試みに彼の動植物を假り來つて之を見るも、春に於ける梅櫻桃李、秋に於ける丹桂黃菊、各々其の特色を以て人に崇高なる美感を與へ、差別的色香を發揮せり、然れども、之を概括する時は、本と是れ植物といふに過ぎず、即ち之を平等觀といふ。而して又平等觀として動物界にも、鳳鶴の大あり、燕雀の小あり、或は人をして美感を起さしめ、或は人をして愛念を起さしむる等、本然法爾の異類を見るならん、是れ即ち差別觀なり。此くの如く、之を放てば、森羅萬象、千差萬別なりといふと雖も、之を藏むれば、宇宙法界何物か平等一如ならざら



んや。是れ即ち華嚴哲學に所謂行布(差別)即圓融(平等)圓融即行布の所觀なりとす。古來東西の學者の、或は實在論として、又名目論として、互に相推究せるも亦畢竟差別と平等の論争たりしなり。

此くの如き差別觀は、皆是れ時間と空間に限定せられたる現象界にあらざるはなしと雖も、然れども、之を本體の側より見る時は、時間と空間を超越したる無差別的平等ならざるはなきなり。而して由來差別的な現象界に於ける進歩退歩の變化なりといふと雖も、これを窮盡して、其の無差別的平等界に至つては、非有非空の實在と稱せざるを得ず、即ちこれを差別的現象及び平等的本體と稱し、更に差別と平等を超越したる、一種圓融無碍の真理觀を成立するに至るべし、而して此の真理觀は畢竟吾人の認識上にあらはれたる概念に過ぎざるなり。是に由て之を觀れば、吾人の認識上にあらはれたる差別界は、或は吾人の幻影に外ならずと稱することを得べしと雖も、今時間空間の一切を超越したる平等實相の上にあはれたる認識なるものは、絶對的實在なりと見ざるなり。即ち天台に於ては、謂ゆる萬物の有、空及び平等的中觀たる所の真空妙有の實相觀を成立するものなれども、華

嚴に在りては、更に其の上に進みて、有、空、中の三觀を超越したる、周徧含容觀を成立するものなり。此の立場よりして曠世の大才龍樹は、華嚴の哲理を唱導するに至れるが、吾人は前にも、此の見地に立ちて、華嚴聖典と佛教の各派との關係を略述し、更にまた華嚴の根本法輪より分岐せる佛教の各派を、理想論と現實論との二つに區別し、これを論辯せんことを約せり。故に以下順を追ふて論議せんと欲すれども、これに先ちて一言を要することあり、そは謂ゆる理想論といひ、又現實論と稱して區別せるも、畢竟佛陀一代の經典を、克く大成し唱道したる、龍樹の功績に歸せざるべからざることは是れなり。

龍樹が大乗佛教の聖典を完成せる偉功は、後世の等しく認めて以て鑽仰崇尊する所なれども、更に溯りて古印度の大乗佛教を一瞥するに、龍樹の系統たる中道哲學と、世親の系統たる瑜伽哲學と相併立せり。故に後世諸大乘の聖典は、皆此の二系統の傳統を承けたるものにして、予の見るところを以てすれば、龍樹の系統に屬する、凡ての宇宙觀に對しては、平等即差別、差別即平等とせる真空無可得の哲理に、其の根本を有せり、然るに瑜伽の系統(世親)に在りては、有即無を否定して、有の外に



別に「無」を成立し、差別の外に、更に平等ありとするものなり。

然れども、吾人は到底、瑜伽の哲學的眞理觀には與すること能はずして、有即無（龍樹）の眞理觀を以て正當と爲す者なり。必竟、瑜伽派の謂ゆる、平等の外に差別を成立せしむるは、換言せば、有の外に「無」を立て、現象の外に本體をもとむる説にして、有即空と觀ずるにはあらざるなり。是に於て吾人は古來の理想論と實相論を説ける、各宗各派の中に就き、龍樹を以て根本開創者と爲し、凡ての論議の龍樹系統に出でざるものなきを信ずるものなり。

抑も華嚴を根本とする理想論の側に於ける、相對的有論にして、夫の謂ゆる小乗と稱する俱舍宗は古印度に於ける婆羅門種族に屬する迦多衍尼子一派より出でたるものなることは、佛學者の共に知悉する所にして、或は之を有部宗と稱し、又毘曇宗といへり、乃ち有名なる小乗佛教が、二十宗に分裂したる中の薩婆多部にして、佛滅後二百餘年を経たる迦多衍尼子の唱道に係り、此の宗の人生觀に就ては、精密なる考證あれども、要は生、老、病、死の四諦に分ち、又は欲界、色界、無色界の三界に別ち、更に世界觀として、尙ほ之を分析的に釋して五蘊、十二處、十八界を立つるを見る。

而して進んで時間的或は空間的に推論し、三世實有、法體恆有を説き、吾人の天地萬有に對する考證としては、實に驚嘆に値するものあり。

次に相對的有論としての成實宗は、即ち成實論を根本として成立し、其の眞理觀としては、萬有を二方面より觀るものなり。其の一は俗諦にして、他は眞諦と稱するもの是れなり、此の眞俗二諦を更に分類して、宇宙の萬有を假有、實有、真空の三段に考證せり。こは天台の謂ゆる三諦觀に相似して、更に之を假心、實心、空心の三段に分ち、以て眞理の何たるかを辨明せるものなり。此の立て方は後世台學の先驅を爲せるものたるや疑なし。

又次に相對的空論としての法相宗は、或は唯識宗ともいひ、是亦俱舍論の迦多衍尼子と略ぼ同一説にして、換言せば毘曇宗を應用せしにはあらずやの想ひあらしむ。而して其の人生觀及び宇宙觀としては、我空、法空を以て其の立脚地となし、此宗の哲學には、吾人の心を眼、耳、鼻、舌、身、意、末、那、識の八つに分類し、就中、重きを阿賴耶識に置けるは、又學者の知る所たり。これを彼の成實宗に比すれば、彼れが五位七十五法を立つるに對して、此は更に五位百法を説き、實に二十五法の重疊を爲し、其



の巧妙精緻なる立て方は、最も讚嘆するに堪へたり。而して彼は更に遍依圓の三性論を唱道せり、想ふに後世華嚴の賢首法藏が、十重唯識を説きたる、或は範をこの五重唯識の觀法を採りしには、あらざるか。

翻て三論宗は如何と見れば、絶對的空論にして、いふまでもなく、龍樹の中論と、二門論と、提婆論師の百論を取り來りて、其の礎と爲したるものにして、詳しくは以上各論に就て見るも極めて容易の業たり。抑も三論は台學及び密宗の先驅を爲せるものにして、たゞ天台はこれに法華經を加味せる者にして、後世煩瑣精麁なる各宗派の源を此の宗に發せざるものなしと言ふも、過言ならざるを信ず。

次に進んで謂ゆる理想的中論の側に於ける眞言宗は、又是れ龍樹が南印度に於て金剛薩埵より金剛經を附授され、爾來一般の流布盛んとなり、後、龍池論師を始めり諸大哲出で、益々其の弘通につとめたるものなるが、其の哲學的宗教としての價値を高めたるは、實に我が國に來りし後よりなりといふを憚らざるなり。即ち空海が十住心論秘藏寶鑰顯密二教論等を著はし、中に就き顯密二教論の如きは、巧みに法藏師の華嚴五教章及び探玄記等を參照したること、歴々として見るを得べ

し、凡て華嚴の教相を骨子として立てたるものに外ならざるなり。

次に天台宗に至りては、寧ろ印度よりは支那に盛んにして、其の支那に於ける梁の代には、北齊に慧文禪師ありて、空假中の三觀を唱へ、其の弟子の慧思に及び、相承嗣法、専ら法華の宣揚に力めたるが、更に智顛謂ゆる智者大師出で、文思兩祖の遺志を繼ぎ、遂に絶妙なる大法を完成するに至れり、而かも其の根本は、龍樹の中觀論に依りて、更に法華經を一致したる説を應用し、遂に天台立宗の礎を爲せるものなり。彼は始め天台に在りし故を以て、名くるに天台宗を以てせるが、其の一代教を四教に分ち、或は一念三千、又一心三觀とせるまで、其の哲學的分析の巧妙なるは、殆んど空前絶後のものなり。

尙ほ現實論に於て、主觀的直覺論としては、禪宗各派の如きをいひ、謂ゆる佛心宗と稱するものにして、何れも菩提達磨を以て祖と仰げり、即ち華嚴に謂ゆる頓教なるものは、是れにして、教外別傳、不立文字を標榜し、直指人心、見性成佛を以て立宗の根本基礎とするなり。即ち凡心凡行そのまゝに佛心佛行たることを得しむる手段なるが故に、極めて簡單明瞭、其の智愚賢不肖を論ずることなく、冷暖自知を以て容



易に悟入せしむるものなり、故に煩瑣なる學問を究むるの要なく、又緻密なる觀法を修めずして、直覺的に見得底あらしむるを以て、後世武門を始め一般の好尚に適せるものとなれり。

又客觀的究竟論は、淨土教各派の謂ゆる念佛宗といへるものにして、説明を須ひずして直に其の華嚴に發せるを知るべし。こは其の根本たる阿彌陀佛を以て、宇宙の實在を究竟信仰して、涅槃界に入らしむるものたり、又主觀的實質論は、日蓮宗各派にして、殆んど天台宗と其の源を一にせるものなり、即ち法華經を根本として、我が朝に在りては、日蓮を以て其の祖と爲すことは論を俟ざるところなり、而して其の立て方は、主觀的にして宇宙間に偉大なる吾人の意識を超越したる、或る物を信じ、之を實行的に履踐する宗教たり、哲學的教相學をも喧ましくいふと雖も、要するに娑婆即寂光淨土の觀念を以て、勇猛精進する教義なり。上來略述せる各宗々乗の大綱に亘りては、更に之を總合論辯するところあるべし。

## (七)

上來華嚴聖典を根本として、それより出發したる理想論と現實論との二方面に

就て略述せしが、今又更に此の兩方面に於ける究竟的眞理觀の大要を述べ、以て其の間に如何なる關係を有するかに就て一言せんと欲す。

既に前章に於ても、其の大綱を示せるが如く、各派に於ける究竟的眞理觀は、其の表面をのみ見る時は、各派互に歷程を異にし、一見其の歸着點を同じうせざるが如しと雖も、深くこれを探究すれば、何れも皆同一眞理に歸着するは言を俟たざるところ也。而して既掲、二方面中の理想論中に屬する有論哲學、即ち俱舍哲學に在りては、釋尊の道破したる眞理觀を消極的無我論として主張し、此の眞理觀に據りて宇宙及び人生を解釋せんとせり。然らば俱舍論者は何故に斯かる消極的厭世主義に陥りたるやと云ふに、佛滅後第二世紀を経て、佛陀の遺教は漸々衰兆を示さんとするに際し、一方佛陀在世以前に、古印度に存在したる婆羅門の徒は、更に再び自家の教勢を挽回せんとする傾向あり。此の時に當りて、婆羅門の種族中より彼の迦多衍尼子出で、毅然として起ち、これに對抗して、而かも其の上に出頭せんとし、佛陀遺教の弘布に努め、彼れ異教徒を壓せんとせるより、遂には斯かる厭世的色彩を帶ぶる教義を主張せるなり。斯は當時に於ける周圍の關係よりしては、萬已む



を得ぬことなるが、即ち此くの如く、婆羅門教の厭世主義に髣髴たる教理を唱道したりと雖も、別に婆羅門教の色彩を帯ぶる有我説に對して、決然無我説を唱導したる特色を見るべし。更に俱舍論の主張としては、真有俗空の組織的哲學の立場より、宇宙の實在と我とは、固より寸毫の境界を隔てざれば、生老病死の根本を斷絶し、無我的眞理を證悟し、以て大圓覺位に臻達するといふ究竟の眞理觀なり。

次には同じく、相對的有論として成實哲學は、宇宙の萬有を假有、實有、真空の三階段に互りて論述し、以て其の宇宙觀及び人生觀を闡明せるなり。而して成實哲學は彼の阿梨跋摩氏の唱道する所にして、迦多衍尼子の俱舍哲學に更に一進境を示せるものにして、俱舍哲學の真有俗空論に反して、俗有真空論を主張し、最も真空に重きを置きたり。要するに、成實哲學の所論は、俱舍哲學の厭世的及び消極的實有論に一步を進めたる、積極的真空論なり、即ち我空を主張すると共に、法空を主張し、直覺的に宇宙の實在に合一調和するを以て捷徑となせり。

次に法相哲學については、唯心を以て基礎とせるものにして、即ち遍位、圓の三性論を立て、更に五重唯識の觀法を立て、極めて巧妙なる組織的哲理を成立せり。こ

れ亦唯心哲學としては、殆んど極度に達せるものにして、吾人の心性ありて始めて天地萬物の存在ありとするが如き、唯心論の至極に達したるものといふべし、殊に其の五階成佛説を主張せるが如き、其の巧妙なる驚歎に價すべきものあり。

即ち(第一)資糧位、(第二)加行位、(第三)通達位、(第四)修習位、(第五)究竟位

等、其の組織の善美を悉せるは、蓋し哲學としては高妙を極はめたり。

更に三論哲學は、以上略述せるものは、稍々其の趣を異にし、その説明の形式も、亦ただ同かじらず、終始空觀を以て其の哲學の根本とし、龍樹論師の中觀論十二門論、提婆論師の百論、即ちこの三論の要旨をとりて此教の成立を見たるものなるが、其の中最も中觀論を根柢として、宇宙を空觀し、唯識論に超出せるものなり。唯識宗に在りては、天地萬物皆人心の中に存し、久遠實成の法身佛の顯現となすにあれども、三論にては、更に吾人の心魂をも真空に包含せらるべきものと爲し、此の真空を外にして、萬象の存在を否定するもなり。こは中觀論中の骨子を把りて、巧に應用せるものなり。之を要するに三論哲學は、眞の唯心論と稱すべきものにして、其の眞理の根本は、徹頭徹尾唯心論なりと雖も、其の宇宙に對する實在觀は、固より不



可知的たるや勿論なり。

以上三論に至る迄は、理想論中の相待的空論を説ける者なるが、密教及び天台教は、理想論中の絶對的中論を主張するものたり、即ち密教の教理が従來佛教學者の所論としては、最も深遠高妙にして其の極度に達したるものとするも、吾人の見を以てすれば則ち然らず、其の宗教としての密教は六大、四曼、三密の大綱を擧げて説明せるも、哲學としては、謂ゆる教相學上、印度支那に在りては、深遠なる哲理を唱道せざりしも。我國に來りて始めて哲學的價値を添へたるものにして、夫の空海が華嚴の教理を應用して、哲學的に道破論述したるは、佛敎の學者の悉知せる所たり。殊に空海の顯密二教論中には、明かに賢首師の著述五教章に負ふところ甚だ多く、又密教が釋尊に重きを置かずして殊更に大日如來を崇立せるが如きは、最も著しき特色なりといふべし。而して其の究竟としては、地、水、火、風、空、識の六大を立て、これに金胎兩部の曼陀羅を加へ、宗教としては巧妙に過ぎたるが如く、又哲學としても、價値あるべきを疑はざる也。然しながら、彼れが大日の地水を説き、加持祈禱を論ずる所に、深甚微妙の眞理を含有し、自餘の教理を以て顯教と爲し、其の宗の宗乘を

以て密教と名け、以て釋尊同格の所論と説破せるなど、多少論議を要すべしと雖も、要するに不可説不可稱のものにして、他の窺知を許さざるものある也。

次に天台の教理は絶對的中論にして、謂ゆる中諦觀を主張するもの也。即ち天台の教理は、もと法華聖典に據て成立し、龍樹の中觀論を以て此宗開創の根本とせるものにして、其の大綱は佛陀一代の説法を四教に分ち、又吾人の心を一念三千、或は十界互具等の名稱を以て説けるが、空、假、中の三觀を立て、凡てを此の三觀に歸納するもの也。こは智者大師の功績に外ならずして、哲學的宗教としては、最も善美の域に達せるものといふべし。

以上は華嚴哲學より出でたる理想論の大綱なるが、現實論中の主觀的直覺論としては、更に禪宗各派に就て一言せざるべからず、謂ゆる禪宗は曹洞、臨濟、黃蘗の三派にして、各々達磨を以て祖とし、教外別傳不立文字を標榜し、直指人心、見性成佛を以て本色となすもの也。即ち言句伎倆を須たずして、驀進眞理の大原に悟入するを本旨とし、他の哲學及び宗教の如く、論議を要せず、直覺的に領解底あらしむるものとす。これ古往今來、禪道の坊間に迎へらるゝ所以にして、頃者頻りに禪論禪話

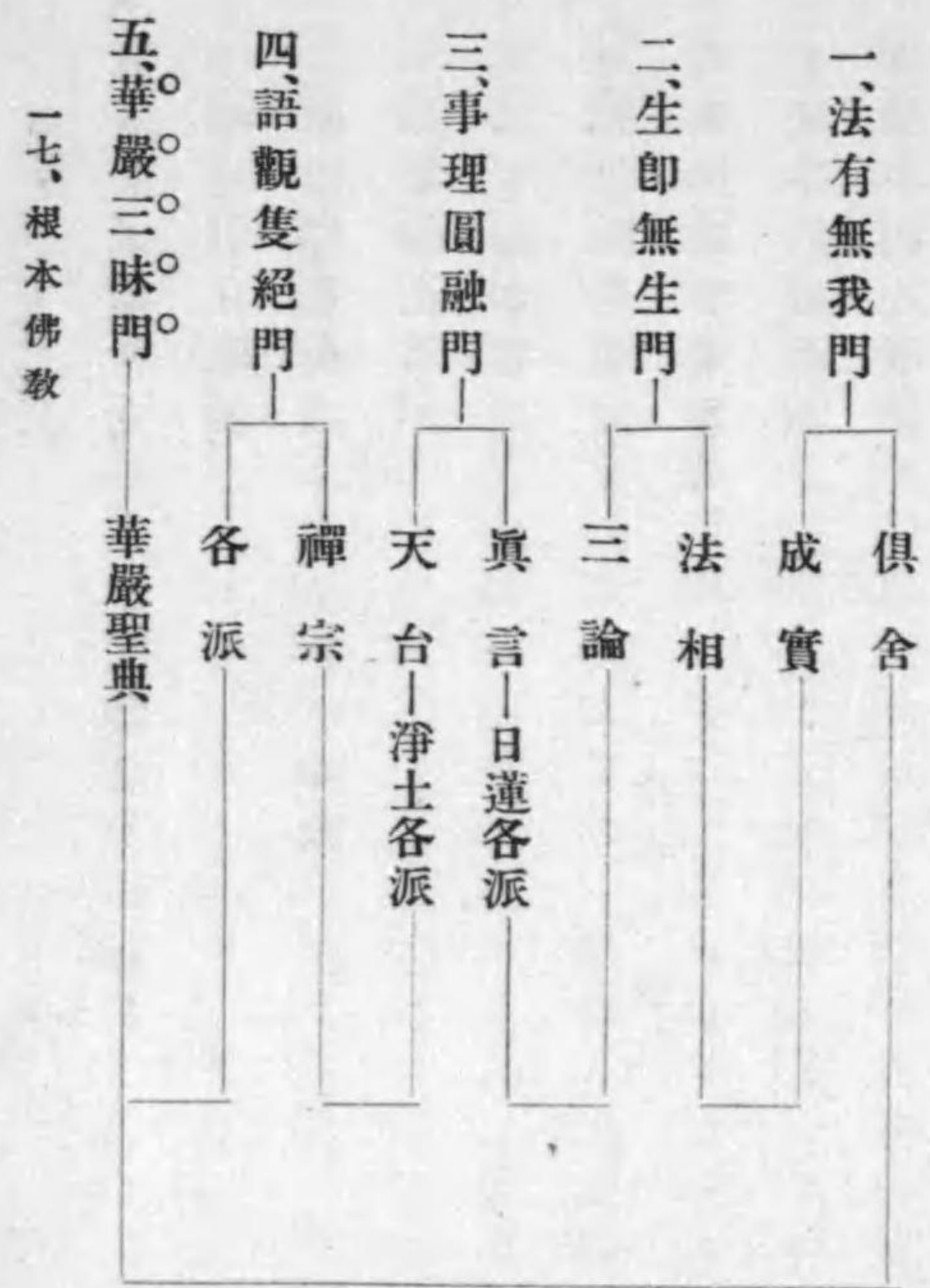


の云爲せらるゝ所因たり。

又現實論中の客觀的究竟論としては、淨土念佛宗の各派を擧ぐべし、即ち禪宗などの主觀的なるに反して、此れは飽くまで客觀的にして、一意稱名、專心讚佛を以て究竟とせるもの也。こは龍樹の十住毘沙婆論を始めとして、天親其の他の高著に據り、別して善導の力に負ふところ多く、宇宙の實在に偉大なる靈力の活動せるありて、これと合一すべきを以て本旨とせるものなれば、即ち客觀的究竟論たる所以也。然るに主觀的實質論としては、更に日蓮各派を推さるべからず、其の各派の説必ずしも一致せずと雖も、源を天台に發し日蓮出で、一宗獨立の基礎を確立せるは、萬人の知る所たり。然らば何故にこれを目して主觀的實質論となすかといふに、禪宗の如く、宇宙間に靈妙なる偉力ありて、そは決して客觀的に存在せるものには非ずして、吾人の心魂に依りて、語黙動靜、隨時隨處に遍見すと説けるとは同じからず、宇宙萬有は其儘に偉大なる靈力にして、不斷に諸物を浮沈せしむること、即ち吾人の心魂も亦爲に此靈力によりて左右せらるゝものなりと説く異同あり。要するに、各々其の大綱を鳥瞰するに、釋迦一代の大法を五教に分ちたる杜順師

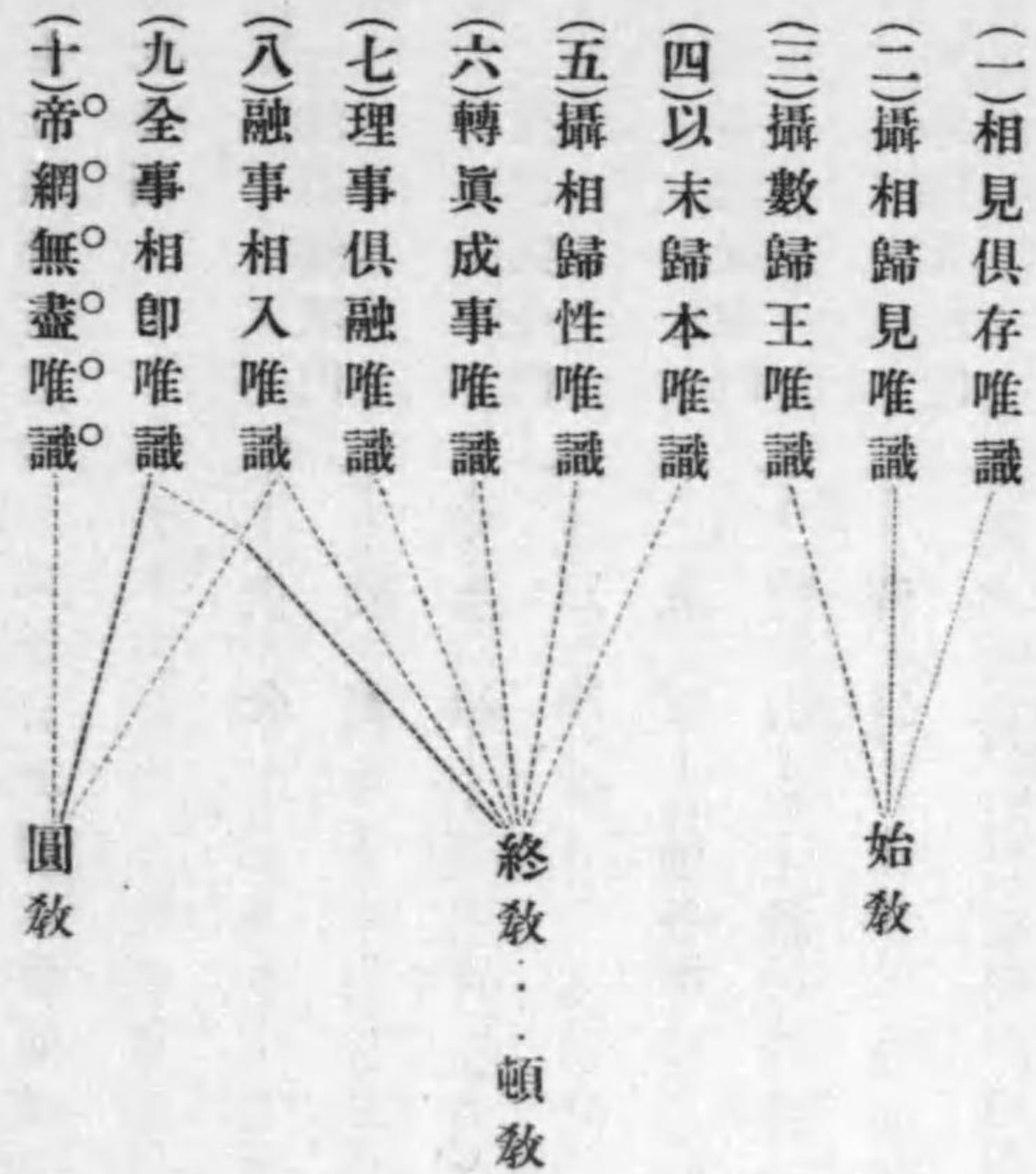
及び賢首師の所説の如く、左の別表に就て見るも、吾人が既に縷述せる諸派の教理宗乘の概要を大觀するに、諸宗各派が凡て其の根源を華嚴に發せるを窮知するに難からざるべし。

即ち杜順師所立の一代教を五門に分類せし止觀は、次の如し(前表の下段は余の加立せる所)





又賢首法藏師所立の十重唯識は次の如し。



此くの如く、佛陀一代の教義は、華嚴聖典中に包含せらるるを見る也。故に華嚴の教理は、佛陀出世の本懐にして、佛教の根本思想たること勿論也。これを例ふれば、恰も尊嚴なる一國帝王の如く、あらゆる、文物典章の上に立てる儼然たる最上の

位置にして、諸教理が各々分を守り、令を尊びて活動せる上に越したる觀ありとす、これ華嚴の崇高なる所以也。故にこれを哲學として觀るも、又或は宗教として見るも、其の絶對的價値を有するを知るに足るべし。

(八)

余は屢々云へる如く、華嚴聖典は、釋迦文佛が、印度最古の詩的神話的吠陀の典籍より、優婆尼沙土の哲學的思想、及び婆羅門の經典に至るまで、悉く之を研鑽窮盡して、而かも遙かに其の上に秀出せる佛教を道破したるが、更に又其の佛教中に在りて、最も深遠高妙なる真理觀にして、所謂八萬四千の法門、五千四十餘卷の經藏、凡て此の聖典中に包容せられざるはなし。然れども、其の深遠高妙なる聖典中に在りりても、自から分類して大小顯密の別あるは、之を譬ふれば、恰も是れ一樹の梅花なるも、枝に南北高下の異あり、又花に大小肥瘦の差を生ぜるか如く、是れ又自然の數たり。然れども、吾人は華嚴聖典を以て、釋迦文佛一代の所說の最高真理觀とするに躊躇せざるものなり。而して此聖典の研究上に於ても、其の之を相承し唱道せる碩學知識の思索に依りて、多少其の研究の方式及び色彩を異にせるは、又是れ已